

若きボリシェヴィキ

創刊 2 号

1968

社会主義学生同盟早大支部

目次

明大斗争の運動論組織論的総括

はじめに	2
第 1 部	2
第 1 章 明大斗争以前に我々が持っていたところの運動論、組織論的内容	2
(一) 政治過程論	2
(二) 政治過程論の理論的基礎	3
(i) 我々の組織論との関係	3
(ii) 政治過程論における政治斗争と経済斗争、改良と革命の問題	5
(三) 政治過程論以後の理論的基礎、三期論	6
(i) 三期論の内容	7
(ii) 三期論の主体的総括と黒田理論への批判	7
(四) 政治過程論、三期論に共通する国家論の二面的理解、レーニン国家論の批判	10
第 2 章 明大斗争に実際に関与した指導理論	11
(一) 明大斗争に於て「戦旗」紙上に現われた一つの見解	11
(i) その論理的内容	12
(ii) それに対する批判	12
(二) いわゆる夜屋論批判	13
(i) 夜屋論とは何か	13
(ii) 夜屋論の誤りの数々	14
(三) 齊藤、大内の路線、その理論的背景	17
(i) 先駆 16 号に現われた杉山論文の内容	17
(ii) 杉山論文に対する批判	18
第 2 部	21
第 1 章 レーニン組織論の原則	21
(一) 「何をなすべきか」に於るレーニンの斗い	21
(二) 党組織形態の理論的考察	23
第 2 章 レーニン組織論の具体的実践的適用	29
(一) 党形成の方法論に関して	29
(i) 反スタ派のスターリニズムの位置づけとその組織戦術	29
(ii) 「反スタ革命観」の全くの誤り	30
(二) 党組織論と我々の組織	34
(i) 革命の型と党の任務(党の確立)	34
(イ) 中央政治局と国際部	35
(ロ) 地方委と地区党	36
(ハ) 産別委と労研・社研	36
(ii) 「組織された暴力」の確立(労働者政治組織)	36
(イ) 青年同盟・労研・社研	37
(ロ) 社学同	37
(iii) 大衆運動の型(大衆)	37
(三) 「組織された暴力」と「国際主義」に関して	39
(i) 「組織された暴力」の意味するもの	39
(ii) 「国際主義」の意味するもの	42
(イ) O.L.A.S 会派への評価	43
(ロ) ブラック・パワー・S.N.C.C. カーマイクル	44
(ハ) 中国文革と毛・林派	44

変革主体としての近代プロレタリアートの措定

(若きボリシェヴィキ復刊 1 号より転載)

明大斗争の運動論組織論的総括

はじめに

一昨年十二月より六七年二月まで、全学封鎖、学園自主管理という形態をもって斗われた明大授業料斗争は、だがしがし二月二日、斉藤・大内による突然の大学当局との調印（いわゆる二・二協定）により、あっけなく崩壊していった。この斉藤・大内を生み出すことにより、組織的に崩壊せねばならなかった斗争の総括を、彼らを裏切り者ときめつけることによってではなく、彼らを生み出さざるをえなかった我々自身の主体的条件に、徹底した内的反省を加えることにより、そのことによる本質に至るまでの下向過程を媒介にしたところ、再度の概念的構成の問題として、この斗いを組織論・運動論的にとらえがたいことを目的として、我々は、この間の斗いの総括を追求してきた。

だがそのような我々自身の主体的条件の克服そのものが、十分に成しとげられ物質化されたとは未だ言えぬうちに、我々は、既に中大学費斗争を迎え、これに取組まなければならなくなっている。それ故この総括は、斉藤・大内を生み出したところの、我々自身が内在化させる物質的根拠そのものを、完膚なきまでに暴き出し、徹底した主体的反省を加え、そしてそれを物質的基礎とした上向的展開の内容として措定されたものではなく、未だ過程的に、すなわち我々自身の新たな組織論・運動論が提起されぬままに、いわば総括のための対象化された材料として、ここに中間的に提起されるわけである。その意味では、これはあくまでも下向一般本質の措定にとどまるものでしかないところの限界を、おのずから備えたものとしてあるということ、我々は、自己批判的にはじめに明確化させておかなければならない。ここに書かれている内容は、主に原則なのであって、原則はその適用を待って始めて実践化され、物質化されるものであることを考える時、現在の我々が追求すべき内容は、原則の上向的展開の内容としての組織論・運動論であり、その適用の問題であること

とは言いまでもない。それ故、我々は次回には、その内容を明らかにするであろうが、それは現代帝国主義論との関連で明確化される筈である。さて、我々がここで検討すべき内容として、まず第一には、政治過程論と三期論を抽出した。そしてその次には、現実の明大斗争に関連した指導政治理論として、戦旗紙上にあらわれた一つの見解をとらえ、それを斉藤・大内の見解・行動と比較するなかで、「何をなすべきか」に於けるレーニンの斗いを想起した。そして最後がレーニン組織論の原則の措定である。それはまだ確かに多くの点で不十分すぎるかもしれないが、そこにあるところのものは、明大斗争に対して多くの犠牲を払いつつ支援体制を取り続けた社会学同早大支部の、あのような結果に対する、主体的総括であるとともに、あの斗いに決起した多くの明大生友に対する、我々のせめても自己批判であると考えていたきたい。

第一部

第一章 明大斗争以前に我々が持っていたところの運動論・組織論的内容

(一) 政治過程論

政治過程論は、安保斗争の総括にあたり、いわゆる経済決定論を批判することから出発していた。それは「経済不況→労働者の生活状態の悪化→労働者階級の高揚」というシエーマとは全く別個の地点に安保斗争があったことを位置づけることにその視点の中心環を持っていた。だからそれは「ここに破産を宣言された政治理論を我々の手で確立する」ことを意図し、「経済的には高度成長といわれる好況局面にあった」のにもかかわらず、それが何故「予想外の高揚」をまねきたのかを対象化することを目的としたのである。その意味では政治過程論は、安保斗争を闘ったある一つの政治組織の、政治組織としての総括であるというよりも、むしろ安保斗争を闘った主体による安保斗争そのものの対象化であるといいたほうが適切である。だから当然そこには、安保斗争以前に自分達が位置づけ、獲得しようとしていたところのものが、どれだけ方針として貫徹され、内容として獲得されたのかといういわば組織戦術を媒介にした主体的総括はないのである。そして我々は、このように組織戦術を媒介にした主体的総括というものがその中に恣意的にないのではなく、

おそらくは、大衆運動一般と組織活動を分離して考えるところの思考方法そのものが、当時はまだ関西オンデそのもの内になかっただとこの所産として、この政治過程論はあつたというところを、ここで確認しておかねばならない。その意味でまさに政治過程論はこのような大衆運動主義的な欠陥が随所にみられるのであるが、ともあつた政治過程論は、この最も特徴的な論理の展開は次の点に集約されるのである。

① 経済不況でもないのに安保斗争が政治斗争として予想外の高揚をまねきたのは、すなわちその「質的發展をたらした決定的要因は戦術であった。大衆運動の進行は当然その斗争を漸次的に深化させる。しかしながらそのみによってはその質的發展はありえない。この量から質への転化即ち、飛躍をたらしうるもの、これこそが我々のいう戦術である。」そして「現存する階級斗争は改良斗争としてしか出発しえない」が故に、

② 「個々の改良斗争での小戦術は最も深い政治斗争、即ち革命情勢における大戦術を準備するものとして位置づけられる」、そしてここでいう大戦術とは例えば「ブルジョアジーの反民主主義的暴挙への抗議としての斗争の高揚はブルジョア政治意識の高揚にすぎない」のだが、この「ブルジョア政治意識をプロレタリア政治意識に転化させること」、そのための「斗争の暴力形態化から、街頭での自然発生的な生長を基礎としてプロレタリア権力の具体的形態をも含めた」「そのための戦術」のことをいうのである。

③ だから結局「安保斗争における全学連の運動は民主主義擁護斗争という改良斗争を民主主義の徹底化の斗争として発展させる中で、戦術によってその斗争を革命的な高揚に転化しうることを実証した」のであり、「国家の本質への斗いが戦術によって国家権力との直接的対決まで高められうることを明らかにした」のである。

④ だがそれではなぜこのように「革命の高揚」をまねいた斗いが、「内閣打倒→ブルジョア権力奪取（プロレタリア独裁権力の樹立）」という革命的コース（移行しえなかつたのか）というならば、それは一つには「斗争の主体のヘゲモニーを」「斗争の主導的な役割を果している学生中心のブルジョア大衆から」、「急速に労働者階級に」「移行させうる前衛組織及び労働者指導部が存在」しなかつたからである。そして結論としてここから次のようなことがいわれる。

⑤ 「我々は改良斗争の成果そのものを目的とするのではなく、改良斗争を戦術によってより政治的に、つまり対権力との直接的対決へ向って発展させ、その過程で革命の条件を準備し、全体として大戦術（すなわちブルジョア政治意識をプロレタリア政治意識へ転化させるところの革命的戦術）へと発展させなければならない。」

結局この政治過程論は、個別改良斗争と革命の問題として、すなわち⑥に集中的に表現されるところの(A)個別改良斗争の推進(B)そこに於ける大衆の左傾化(C)大衆の国家との直接的対決(D)階級形成なる図式によってとらえられる内容として安保斗争を総括しようとしたのであることを我々はみとめることができる。

それは、①個別改良斗争の推進が国家との衝突をまねき、その国家をのりこえ、べき時点で逆に国家そのものへと再集約されていくことの止揚を、更なる戦術の駆使とそのつみ重ねのうちに求めることにより②結局は「党」そのものの独自機能を戦術指導へ一面化させ、そしてそのようなものとしての党の存在をのみ追求してしまつたというように、さきわめて大衆運動主義的な限界をおのずから内包していたのであり構造的には③市民主義運動の中でその最も急進的翼たる小ブル急進主義に立脚し、④その徹底した展開により、下部労働者大衆のエネルギーを既成指導部の組合主義と市民主義の枠から解放し、⑤それが小ブル急進主義の限界点を越えてつき突むことにより、それを党として組織せんとする、まさに党形成に於ける空想社会主義そのものを根幹としていたのである。それでは一体このようなものであった政治過程論を、背後から支えていたところの理論的基礎は何であったのだろうか。それを暴き出すことが我々の次の課題である。

(二) 政治過程論の理論的基礎

(1) ルカーチ組織論との関係

政治過程論が戦術の駆使によって権力に肉迫し、同時に又党を形成していく、すなわち組織と戦術の統一として運動論・組織論を構成しようとしたものである以上、その背後に理論的基礎としてあったものは、既に気づかれていますように、ルカーチの「組織論」として刊行された内容と極めて類似している。一九二二年まにルカーチ自身が認めている如く観念論から唯物論への過渡の時期としてあった彼の著作であるところの「歴史と階級意識」の一分冊としての未来社版「組織論」には次のように書かれている。

「プロレタリアートはあらゆる抑圧され搾取されている社会層のためにも、自己の解放闘争を行わざるをえない。しかしながら、これらの抑圧され搾取されている社会層が個々の闘争において、プロレタリアートの味方になるか、それともその敵の陣営に走るかという問題は、不明瞭な階級意識をもったこれらの社会層の立場からすれば多かれ少なかれ「偶然」である。それはプロレタリアートの革命的政党的正しい戦術によるところが極めて大である。」なぜならばそれはルカーチによるならば、「革命の過程はプロレタリア階級意識の発展過程と同じ意義をもつから」で

あり、それが例え同一の時間的同時に同時な過程をたどるものではないとしても、すなわち大衆自身の意識が「純粹に（状況の変化に）遅れてゆく構造」をもって、このころのものだとしても、大衆と組織上分離した党が「革命を促進する方法でうめてゆく」ことによって、大衆の意識は「まさに革命斗争の経過中に变化する」ところのものだからであるからである。

我々は、「政治過程論」とルカーチ「組織論」におけるその理論的構造における同一性を何も決して言葉のアナロジーによってとらえようとしていない。だがしかしここではっきりと、ルカーチが「戦術」といって政治過程論に於いて戦術と場合そのどちらもブルジョワジーに肉迫しその支配権力を打倒していく方法としての戦術（闘争戦術）を意図していることを認識せねばならない。明らかにこのどちらもが、いわばそういう闘争戦術の左傾化（権力への肉迫のうちに同時に大衆の階級形成なるものがなされていくと見なしている）のである。特に引用したルカーチの文中に於いては、戦術の駆使によりプロレタリア統一戦線が形成されると言っているのであり、その戦術とは決して、前衛組織の組織戦術を意味しているのではないことは明白である。

「共産党が階級そのものに属する広汎な大衆から組織上分離していることは、階級の中で意識の相違に基ずく」とルカーチは言っている。問題なのはその意識の相違の内容なのである。その意識の相違の内容は単に濃淡の問題であつたり、一般的に遅れてゆく構造をもつ」といった時間的経緯の問題では決してなく、明白な質的な差異の問題なのであり、大衆の直接的な改良の要求の延長上に自然発生的に淘汰されるころのものではないのである。その意味でルカーチは①大衆運動の発展に適應した前衛党の活動の外延的過程と、②その大衆運動そのもののその外延的過程の過程においてその質を転換せしめるための前衛党の活動における内延的過程とを混同し単にブルジョワ権力に対する戦術の駆使のみによってそれらの両者が共に論理的同次元に於いて、獲得されていくかのような幻想を持っていたと言わなければならない。それは①党創造過程と②大衆運動の過程という相互に規定性を持った二重の過程における、後者は前者の解消なのである。

だからここまで見てくるならばルカーチが、「党が形成される過程」として①自然発生的行動と意識的・理論的洞察との関係が変動する。②ブルジョワ的な物象化されたところのしかも単に観照的にすぎない意識の（現実の状況の進展に対し）純粹な遅れてゆく構造というものが、次第に消滅していくし、又たえず克服されてゆ

必然性をとらえてはいない。レーニンによれば党と大衆が組織上分離するということ、即ち、職業的革命家による前衛党の形成ということには次のような意味がある。

①それは一つには労働者大衆が自然発生的には決して社会民主主義的意識（向目的意識）を獲得することはないからである。そして②一つには、それは、組織され訓練された国家の諸機関、なかんずく、政治警察、軍隊との斗争が必然化されるからである。即ち、それは非合法活動に耐えねばならないからである。要するに、自然発生的な運動から生れるイデオロギーは、現在の資本主義制度の枠を越えるものではなく支配的なブルジョアイデオロギーの一部分であることを確認するからこそ、レーニンは外部から社会主義的意識を階級斗争の中へ持ち込む部隊を、すなわち大衆一般の組織とは全く別個のものとしての革命家の組織の存在を叫んだのであって、ルカーチの言うようなメタフィジカルな、しかも大して意味のないような理由からでは決してないのである。そしてそういう意味から我々は、ここではっきりと、ルカーチ組織論を貫く抽象性と観念性を否定する立場を確認しなければならぬ。即ち、政治過程論はルカーチに依拠することによってその出発点に於いて既に對のすから組織論上の限界、大衆運動主義的な誤謬を内包していたと、我々は考えねばならないのである。もちろんそのこと、それが果した歴史的役割りに対する評価は別の問題であり、それを混同して、現在の地点から過去を清算しようとすることは許されないが。

我々はここでまとめとして①我々は過去において党的活動における外延的發展の過程のみを追求し、②それとは論理的に別個の時点で党形成のための我々の活動における内延的發展の追求を怠る傾向をとかく有しがちであり、それは又、それなりの理論的基礎を持っていたということを自己批判的にとらええさねばならないのである。

(ii) 政治過程論における政治斗争と経済斗争、改良と革命の問題

政治過程論は「政治過程の独自の論理を把握すること」にその当初の視点を持っていてしたが、確かに政治斗争に対するそれなりの正しい評価を持っていたと言わねばならない。だがもし仮にそれが「民主主義を徹底的に擁護する改良斗争」の一つとして安保を位置付けることから派生していく論理としてあったのだとするならば、そこでは次のような図式が前提に存在していることになる。(A)改良斗争の戦術の駆使による徹底的な推進(B)国家の本質・暴力との衝突(C)国家の本質の暴露による

くという時そのどちらもが実は極めて観念的な結局は①危機の進行という時間的経緯と②大衆の現象的な左傾化というもののうちにその根拠を求めるところのものでしかないことを我々ははっきりと見なければならぬ。「遅れてゆく構造」なるものが解消されるのは決して時間的経緯の問題ではなく、前衛的意識的な働きかけの問題なのであり、しかも何もブルジョア政治権力が打倒された時に大衆がみな共産主義者にならなければならないわけでは決してないのであって、それは政治革命後のプロレタリアートの主体変革の完成と考えることは全くの空想社会主義でしかない。何故ならばブルジョア権力下においてはそのような思想闘争に勝利していくところの物質的基礎を持つ階級は、唯一物質的生産手段を所有するブルジョア階級であり、だからこそマルクスはドイデにおいて、「物質的生産手段を所有する階級が、精神的生産手段をも自由に支配する」なる命題を展開したのである。それ故我々は次のようにこの問題をとらえねばならない。「支配的な思想とは支配的な物質的諸関係の観念的表現、すなわち思想として把握された支配的な物質的諸関係以上の何ものでもない」プロレタリアートはそれのおかれてはいる物質的諸関係を變革せめかきり彼が即時的存在としてありつづけるが、支配者の思想から述べられることはできない。我々は確かに対象すなわち社会的諸関係の変革と人間変革の永続的な過程として革命の問題をとらえるが、このことは決して下部構造の変革なしにイデオロギーの変革が可能であるかのような夢想や或は、これとは全く逆な主体変革や党形成を抜きにして危機をのみ怒号するようなクレジーを許容するものではないのである。ルカーチは確かにローザを批判したが、彼もまたレーニン前衛党組織論を極めて形而上学的なものとして理解していたと言わなければならない。

「共産党の組織上の独立は一体何のために必要であるか」と彼は言う。「それはまず①プロレタリアートに自分自身の階級意識を歴史的形態として直接的に認識させるためである。②次に、それは日常生活の上のあらゆるできごとに関して階級全体の利益の要求する態度をはっきり、かつすべての労働者に分らせるためである。③そして、最後に、それは階級としての独自の存在を全階級に意識させるためである。」「そして、ここから彼は「党はプロレタリア階級意識の独立した形態である。」「しかも、革命のために独立した形態である」と結論する。だが、レーニンは、「何をなすべきか」に於いて決してこのようなものとしてのみ党と大衆の組織上の分離の

大衆の国家の否定・階級形成(D)その後の危機の進行という状況におけるブルジョア支配の動揺(改良斗争に於いて階級形成されていた大衆の国家ののりこえなるもの)がある。このような過程を前提としたからこそ政治過程論は「改良と革命」の問題として安保を総括しようとしたにちがいない。

ところで政治斗争も又経済斗争と同様の単なる改良斗争の一つなのである。我々は権力奪取の前段階における政治斗争を経済斗争と同様のものとみなしてよいのであろうか。断じて否である。ここで(我々のいう)改良斗争とは経済斗争一般のことである。大衆の日常的な利害に起因した、それ自体は資本制社会の存続を前提とするところの経済斗争のことである。ところで政治過程論における改良斗争とは「民主主義擁護斗争」という政治斗争なるものことである。しかも民主主義擁護なる一般的な抽象はそれ独自を目的として斗争が組まれるところのものではなく、他の個別的な改良斗争(この場合、経済斗争のこと)に於いても付随的に適用されることの内容である。ここからこの改良斗争なる語義の解釈によって政治過程論は様々な解釈の仕方を「遅れて来る青年」達に与えてしまう。「個々の改良斗争での小戦術は最も深い政治斗争、即ち革命情勢における大戦術を準備するものとして位置付けられる。我々は改良斗争の成果そのものを目的とするのではなく、改良斗争を戦術によってより政治的に、つまり対権力の直接的対決へ向って発展させ、その過程で革命の条件を準備し、全体として大戦術へと発展せんがためである。」「ここでいわれている改良斗争とは安保斗争のような「民主主義擁護」という政治斗争なるものことである。ところがもしこの適用を個別学園斗争という政治斗争へとあてはめるならば、すなわちその誤った適用は次のようなシエマを必然的に作り出す。

A、個別学園斗争(改良斗争)の徹底化、B、全国教育学園斗争、C、全人民的政治斗争なるものである。果して我々は明大斗争に於てこのような図式を頭に描いてはいなかったであろうか。これは実はまさに「何をなすべきか」におけるレーニンの立場にたつならば、(A)経済斗争の推進、(B)国家の介入、(C)政治斗争なるものを考えていた「ラポチェー・ブロー」の立場、経済主義者の立場なのである。時の

「ラポチェー・ブロー」や「ラポチェー・ムイスリー」等の経済主義者は決して政治斗争を否定していたわけではない。彼等は経済斗争と政治斗争の結合を唱え、「経済斗争に政治性を付与する」ことを主張したのである。そしてこれに対するレーニンの立場は、「政治斗争の独自の意識的な持ち込み」であった。更に民主主義擁護の斗争なるものに関して言うならば、政治過程論に於いては「安保斗争におけ

る全学連の運動は民主主義擁護斗争という改良斗争を民主主義の徹底化の斗争として発展させる中で戦術によってその斗争を革命的高場に転化しようということを実証した。」と書かれている。だがこれは、実は、全くの結果解釈主義なのである。⑦ブルジョワ民主主義擁護斗争は、時の全学連（それはより本質的には安保ブンドのことであるが）は六〇年安保を民主主義擁護斗争として位置付けたのである。もしその斗争が民主主義擁護斗争になり下ってしまったのだとしたら、それは安保ブンドの指導性の喪失が、衆をして結果としてそうさせたのだと考へねばならない。もし仮に六〇年安保を「民主主義を守れ」運動としてブンドが指導しようとしたならば、それが「民主主義の破壊者岸を倒せ」運動へと傾斜していったことは自明であるといわねばならない。だがブンドは決してそのようなものとして六〇年安保を位置付けず、少なくともそれを（実証するために全世界を獲得するために等の資料によれば）日米軍事同盟粉砕斗争として位置づけた筈である。その意味で結果としてそうならなかった闘いを、あたかも始めからそうであったかのようにとらえ、指導性の喪失（具体的にはそれはスターリニストの民主主義擁護斗争に巻き込まれてしまったということである）そのものを総括することなく安保を解釈しようとしたところに、政治過程論そのものを持っていた弱さを我々は見なければならぬ。そして同時にこの民主主義擁護なるものが、他の課題との結合なしにあたかもそれ独自として存在するかのようにとらえ、改良斗争としての民主主義擁護斗争が最高の「広さと深さ」を持った改良斗争である革命斗争を準備するものであると考へることは、「二つの戦術」等においての専制ロシアでの民主制度の要求等におけるレーニンの立場の教条的理解であるといわねばならない。確かに「徹底した民主主義は社会主義を要求する」かもしれないが、権利や法令の発布をかり取るためのそれはあっても、それ独自の民主主義擁護斗争などありえないのである。民主主義とは所詮制度ではない。すなわち、現在のそれはブルジョアジーの支配秩序の公的表現としての制度である。

結論として我々は次のように考へねばならない。

- ① 経済斗争の徹底化の延長上に政治斗争の存在を夢想する立場はあやまりである。
- ② 政治斗争はそれ独自の論理を持ったものとして経済斗争の外から意識的に持ち込まれるべきものである。
- ③ 個別学園斗争と政治斗争との関連としては、それ等は別の視点から各々別の立場で提起されるべきものである。
- ④ 安保斗争を民主主義擁護斗争であったと考へることは単なる結果の解釈ではない。
- ⑤ それと同時に徹底した民主主義を要求すること、既存の「ブルジョワ民主主義を擁護することとは別

(I) 三期論の内容

- ① 「安保全学連の永久革命論とは」、「旧国際派理論による8中委9大会路線の中に」に見ることができるところのものである。すなわち「労学提携と先駆性理論」に代表される、「経済斗争（合理化に妥協し、賃上げを克ちとるといふ）の弱さを補完する街頭政治行動（それは学生も労働者も「市民」として平等に街頭で共闘するといふものであったが）の中の最左派（小ブル急進主義、ジャコバン主義）のヘゲモニーを」、「街頭行動の徹底化を通して「生産点での斗争に還流すること、により、「プロレタリアートのヘゲモニーに連動的に移行させようとした」ところのものである。
- ② これに対し「六〇年安保以降の諸階級の動向」として「資本の支配強化が職場末端支配体制の確立として」、「生産性向上運動」や「合理化、職制支配の強化」として現われており、このことは「政治的無関心層の」政府ブルジョアジーによる「作爲的造出」として、「企業忠誠」、「奉仕集団」を「職場支配の新タテ割り体系の造出」の中で作り出しているのである。そのため「既成左翼」なかならず「総評民同の組織的弱体化と資本への協調」「全労化」が進展しており、それは「社会党の護憲完全実施の空洞化と民社同盟会議の一体化」を伴いつつ、結局「永久革命型の運動母体である全学連―総評―原水禁といった市民的ブロック」そのものを「解体」させている。すなわち「六〇年安保時に見られた運動構造」は既に破産しているのである。
- ③ ところでこのような情勢の到来は、同時に又支配階級をして「過剰生産と国際収支の悪循環のために」「侵略（東南アジア市場）」と「抑圧（所得政策、賃金政策の転換による物価値上げ労働強化）に向わざるをえなく」させており、それは「国際政治経済情勢が国内情勢に直接反映し」「国内の政治斗争―経済斗争が結合して」「発展する時代」に「日本資本主義が突入した」ことを意味しているのである。
- ④ このような「情勢の到来」は例えば「諸学内斗争の性格」一つをとってみても、「五〇年代に於いては生活の実態性が市民としての国家の幻想共同性の中に内面化された上」での、「擬似的なブルジョア社会そのものを前提にしての」「憲法的な価値尺度でもってのブルジョアジーの価値破壊に対しての奪環的反応と市民的斗争」が「起り得ただけだが、現在においては」「団体会社が資本への不断の直接的学問研究」そのものを、「利潤追求への功利性としてのみ要求する」ことにより、「そこで生

のことであり、⑥他の課題との関連ぬきにあたかもそれ独自の論理としてあるかのように、民主主義擁護を提起するのは「段階革命論である。⑦ブルジョワ民主主義擁護斗争は我々の言う政治斗争を意味しない。「徹底した民主主義を要求する」こととは、ブルジョワ民主主義にプロレタリア民主主義を対置することであり、ブルジョワ民主主義を擁護する立場に立つことではなく、これを打倒する立場に立つことである。そしてここからこの後の三期論に於いて展開される「陣地戦と機動戦の結合」なる図式に対しても、次のことをはっきりと確認しておかなければならない。

- ① 経済斗争はそれが賃上げ斗争であることを原則として、いつでも現象的に陣地戦である。
- ② 政治斗争はそれが政策阻止斗争として発現するならば立法府或は行政府に対する抗議行動（街頭行動）を軸とした機動戦になる。だからそのようなものとしての陣地戦と機動戦の結合であるならば、それは単に経済斗争も政治斗争も帝国主義の下部構造における進展を媒介に（すなわち賃労働と資本の関係という本質の歴史的・場所的発現として）それを統一的な内容としてとらねばならない内容のものであるといふことをいっているにすぎないのであり、一般的すぎる経済斗争と政治斗争の結合の図式でしかないのである。
- ③ 我々はそれ故この陣地戦の内容を、政治斗争による（或は反戦斗争による）陣地でのストライキ斗争という内容としてとらねばならぬ。このプロレタリアートの陣地への政治斗争（反戦斗争）の意識的もち込みをして、経済斗争とは全く別個の組織化をはかっていくことこそが、レーニン主義の根底に流れるものだとこのことを認識することである。

というのはそのような政治斗争の意識的なもち込みのためにはそれを物質的に保障する前衛集団―党の存在が必然的であり、それでは一体そのような部隊を現実の大衆運動の中でどのようにして創造していくのかが次に問われる筈だからである。

(II) 政治過程論以後の理論的基礎、三期論

関西ブントの安保以後の理論的基礎であり、我々自身にも大きな影響を与えた政治過程論に關し、我々はこれまで明大斗争の総括のための批判的検討を加えてきた。三期論はそれ以後政治過程論をのりこえるものとして提起されたものであり、それは基本的には次のような構造によって書かれている。

活する学生大衆はあたかも生産関係に寄生した労働者の疎外と等質性を持った意識をすらすら持つのである。「それは生活の実態性を有しているが故に本質的には資本を突き抜けて国家への批判へと突き進むものである。」「これらの反逆は社会的権力への対決として」「一定の政治意識」を形成するが、「国家の政治権力への闘いに」「政治斗争」が展開されない限り、「それは決定的に不十分である。」

⑤ ここから結論として次のようなことがいえる。すなわち、「今後の大衆の中の政治的ヘゲモニーの確立」には「社会政治斗争を抜きにしても」「政治斗争を抜きにしても語り得ず」「両者の独自の徹底的展開」と「両者に」内在化する「反帝国主義性」が「両者の独自の徹底的な徹底性」と結合されて「展開されるべきことである。そして、そのためには「政治斗争、社会政治斗争の統一した実態的表現」として、「一切の諸斗争をプロレタリアート全体の」「階級的行動へと発展させ」「現実の政治―社会権力の対極」に「プロレタリアートの自己権力」、すなわち「プロレタリア民主主義の潜在的表現」、 「機能としての意識性、組織性、全体性を与える」、 「労働者政治組織」が必要である。以上を要約するならば、まさにその様な内容をもったものとしての「第三期階級斗争の時代」が到来したということである。

この第三期学生運動論は年代的には六四年、原潜斗争の総括段階に書かれたものである。政治過程論と同様にそれが果たした歴史的役割りはともかく、現在の時点からのこの極めて運動主義的な、そして又反帝純化主義的な傾向を持った内容に対する批判は我々自身の主体的総括は、次のような点に求められねばならないであろう。

(III) 三期論の主体的総括と黒田理論への批判

① 三期論は六四年丁度日帝の設備投資主導国内経済開発型復興が限界に達し、下部構造そのものが対外膨張を要求しはじめた頃、それまでのいわゆる8中委9大会路線に象徴される「平和と民主主義を守る」という運動構造では、大衆運動そのものが高揚しないという内容を物質的根拠に「反帝国主義斗争」をかかげることによって、そのような運動が起りえないという現状を突破しようとしたところのものであり、その意味では始めから運動を作るといふことのみを追求していた。だから「労働者政治組織」を提起したとしても、その必然性は論理的なものではなく極めて経験主義的なものでしかないのであり、又単にそいつら組織方針を提起したということにとどまって、それをどうやって作るかという組織戦術を明らかに

したわけではない。
② 更により実践的な意味で問題になることとして、ここに見られるいわば大衆運動で党を作るといふ考え方は（ここではその正否は別として）ともすれば、大衆運動の展開のみを自己目的に追求するといふ、いわゆる大衆運動主義へ陥ち込む危険性を常に孕んでおり、その場合の党形成の論理は（運動の高揚）大衆の戦術的な左傾化（或いは暴力化）にすぎないものでしかないものであり、その時、党なるものはまさに大衆運動の戦術指導部そのものへと歪められてしまうことは必然である。

③ 更により大きな問題点としてあるのは、前述した内容に見られる、「それは生活の実態性を有しているが故に本質的には資本を突き抜けて国家への批判へと突き進む」云々等々この視点である。これは（1）経済斗争の徹底化がたとえネストにまで発展し、政治、権力問題化することがあったとしても、そこに於る政治はあくまで組合主義的政治であり、大衆が批判するのは「国家」すなわち「政治的共同体」そのものでは決してなく、たかだかブルジョア支配のイデオロギイの葉っぱたる議院における政権担当者くらいまでなのだということ、すなわち大衆ははじめから体制の枠そのものの中でしか物を見ていないのだし、又そうすることしかできないのだということ、（2）それ故そこに「共産主義的政治」の対象化され指定された意識的指導が介在しないなら、それは必ずブルジョア民主主義に或は又、「幻想的共同性」を媒介した資本制のブルジョア国家支配に収約されてしまうのだということ、大衆運動のダイナミズムは国家とブルジョア国家権力の対立関係の発展というところから誤って理解していることである。

④ それはより理論的にとらえかえすなら、学生が資本制の生産関係の風化現象の弱体化に対する、感性的直観或は肉体的反撥そのものを物質的根拠として、（その後の内的論理の発展に対する何の論証もないままに）、直線的に革命的自覚に至るといふものであり、かの革マル派の（黒田賢一）の「プロ人間の論理にみられる（a）即目的プロレタリアートの価値判断は資本制の生産判断であるが、この資本制社会において疎外された労働を働く賃労働者は、その疎外された労働そのものを物質的根拠に、自己疎外の感性的直観をもつ。（b）その自己疎外への感性的直観に対する感性的認識に基づき、賃労働者は対象認識活動に媒介された思维活動、資本制の生産判断における物質的反省（下向的分析）と概念的構成の統一を通じて、（c）その過程で労働力商品としての賃労働者、物化されたプロレタリアがその自己喪失に対する感性的直観を純化して革命的自覚へまで自己を高めるための科学的手段である

物質的諸関係そのものと結合しつづけるということを一切無視無視してしまつて、
るのであり、物質的諸関係に規定された主体の持つ欲望（これが資本制社会では感性的意欲そのものとして同一のものとしてある）こそが、まさに資本制社会における価値判断の基準そのものであるが故に、これはそのような物質的諸関係が続くかぎり、永遠にまさに下部構造そのものとして主体のうちに残り続け、それ故主体の上に永遠に葛藤をおこさせ続ける（だからこそ消耗する奴や転向する奴が必然的に発生しつづける）ということを捨象しているのである。

〔従って価値判断なるものはその社会が資本制社会である限り、物質的諸関係そのものに規定されたとして、他方における対象認識に直結せず、むしろ永遠にそれと敵対しつづけるが、様々な形態をもって主体に対し自己否定を迫るものであり、黒寛のいう様にそれ自身がプロレタリアの価値判断へのとりつづたり、或いは又、プロレタリアの価値判断なるものが実は対象認識の能力そのものであったりすることは、全く空想社会主義の産物でしかないものである。向目的実践においては対象的認識活動と認識の運動そのものが対象化が決定的な要素となつており、それは主体内部においては価値判断そのものとすまじい敵対と対立をくりひらひらしているのだからこそ主体はその時には余計に对象的認識活動により自己を支える論理を把握しようとするのである。〕

（ト）ここから我々は再度大量の共産主義者の産出、或いは又、向目的プロレタリアートの大量の産出のためには、何故に経済斗争の外からの前衛による意識的な政治斗争の持ち込みが必要なのかということを経済主義者達に対する批判としてとらえかえしていけばよいわけである。（詳しくは第三章以下で述べる。）

⑤ 以上我々は様々な視点からこの三期論の有していた内容をとらえかえしてきてたわけであるが、そのような批判ばかりではなく、三期論においては、たとえそれが不十分なものであったとしても、革マル的な資本制の世界的普遍的本質たる「賃労働と資本」の世界へ拘泥することを乗りこえ、その特殊組織段階論としての現代帝国主義論に基いて問題を設定しようとしており、そのような視点から（1）構造的な国際階級斗争の結合と（2）それを媒介する世界革命の第三潮流の登場を展望していたことである。今やそれらの展望はそれなりに物質化されつつあり、我々はそこから、組織問題を何かしら閉鎖的な独自の領域としてとらえるのではなく、基本的な政治主張との有機的一体性の中でとらえるという我々の基本方針を継承しつつ発展させていかなければならないのである。というのは革命的左翼にとり部分的な局面対応における論理展開の構造として要求される

り、精神的武器たる「資本論」を読むことにより（d）自己疎外の歴史的論理的根拠を科学的に認識することによって（e）革命的自覚をとける。その場合プロレタリアートの当初の資本制の生産判断、価値判断は、対象認識活動に媒介されることによつて、プロレタリアの価値判断へと止揚される。といういわゆる革命的自覚の論理と、相対してはいるにしても論理的構造においては同質性を持ったものであり、そういって論理としてとらえるとしても、黒田理論に対する批判としてとらえかえすならば、それは次のような点でやまやましているのである。

（1）価値判断は主体が対象に向つてこれを変革しようとする時の感性的な意欲である。例えば主体が自己の生体そのものを維持するために対象を変革しようとする時、そこには**対象的認識**が先に前提にされているわけではない、（2）資本制社会におけるすべてのプロレタリアが所有する価値判断は黒寛がいうように資本制の生産判断である。すなわちそれは「物質的諸関係の観念的表現」（ドイデ）として「思想として把握された支配的な諸関係」（ドイデ）そのものであることであり自己の持つ労働力商品を如何に高く売ることかというブルジョアのエゴに立脚した意識である。

（3）黒寛の云っていることは資本制の価値判断（即目的プロ）労働の疎外の直観（対象的認識能力の把握）プロレタリアの価値判断の獲得すなわち革命的自覚の獲得ということであるが、それは逆に言うならば、（彼の云うところの）プロレタリアの価値判断とは対象的認識活動を行いうる主体的能力そのものと統一のとらえられるところのものであるということである。（現に黒寛は組織論序説において「プロレタリアの価値判断の基準が形づくられ、これによつてこそ認識の客観性と実践の党派性が確立される」といっている。）

（4）ところで、対象的認識活動とは主体による客体的法則性の認識とていふいわば理性的な行為であり、これは最終的には実践の向自性における対象的認識と価値判断の**関係**として**対象的認識**そのもの内的構造までを自己のものとする活動である。そして対象的認識活動はたしかに価値判断によつて促進されるが、同時に価値判断が主体の変革意志の直接的表現である限りにおいて、変革主体の実践的行為における向自性そのものを支える要素は、この**対象的認識性**のもつ**合法則性**である。

（5）黒寛は疎外された労働を物質的根拠にした感性的直観の純化として、すなわち端初的な価値判断そのものの純化として、（その過程に資本論を媒介とすることに）より、プロレタリアの価値判断の把握を、（そして彼によればそれと統一のとらえられているところの）対象的認識活動を行いうる能力の獲得を（描いているが、その場合は価値判断が資本制の生産判断として、あくまでも主体を規定している

ものは、（1）世界情勢の把握に始まる下部構造の時間的、空間的な進展の、（2）心賃労働と資本的な下向過程を踏まえた（分析と、（3）それに対応した政治権力掌握者の政治政策に対する批判（自らの世界革命戦略に媒介された党派としての政治主張であり、（4）更にはかつてレーニンが帝国主義第九章において展開したような「社会の種々の階級がそれぞれの一般のイデオロギーとの関連において、帝国主義的政策に対してとる態度」（それは具体的には、たとえそれが革命的左派を標榜していたとしても、政治党派の政治主張そのものうちにあらわれてくる）この帝国主義的イデオロギーをさす。すなわちレーニンにとり、それはカウッキの主張の中にあったのだが、諸階級が常に帝国主義的政策に対してとる態度や、それを代弁する政治潮流の主張の中にこそ、民族主義や排外主義の形態をもって帝国主義的イデオロギーは発生するに對しての批判を行なえばよいのである。その場合そのような批判の内容としてあるのは、それ等の政治主張に対する批判であり、それは当然にもその政治潮流が持っている革命戦略そのものに対する批判を内在化させ、下向向上の内的関係を媒介にした、まさにその意味では対象変革（自己変革の弁証法的な統一）としての批判であればよいわけである。その場合我々がはっきりと確認しておかなければならないことは、結局そのような批判は、帝国主義に対する批判を軸としつつ、行なわれるということなのであり、民族主義的な潮流に対する批判も、まさにそのような潮流が彼等を規定する物質的諸関係そのものの中で、帝国主義的政策のうちに集約されているということなのである。であるから、現代帝国主義批判ということの中には、それ等に対する批判ということが既に内在化されている。或はそれ等に対する批判も全体の中の部分として行なわれるということなのである。このようなレーニンの帝国主義論の内容を正しく理解できないような部分がある、世の中を二つの範疇に分けて、あたかもそのどちらかが別々の論理でうごいているかのような、反帝反スタなる「死んだ抽象」でしかない革命戦略をかきだしてきたりするのであるが、彼等は現実を象を本質との関連でとらえるという下向はできたとしても、それを前提的にふまえて再度上向していくことができず、結局、そのことは政治的主張をもちえない、政治方針を提起できないということとなってあらわれが故に、いつまでたっても政治方針をめぐって流動する大衆を収約することができず、ますます無限的な「賃労働と資本」的世界へ陥ちこんでいくという悪循環をくりかえすのである。我々の任務は普遍的本質をふまえた、その特殊段階論としての現代帝国主義論の構築にあるのであり、いかに下向を続けようとも、所詮、かつてマルクスが展開した一連の内容以上のことを探りだすことはできる筈もない

であり、又できたとしてもそれは学者にまかせておけばよい領域の仕事でしかないのである。だから我々はその意味でたゞ不十分であつたとしても、この三期論の問題設定のしかたを正しく評価してゆかなければならないのであり、我々の追求するものはあくまでも現代帝国主義論でなければならぬのである。

④ 政治過程論・三期論に共通する国家論の 一面的理解・レーニン国家論の批判

ここで我々が国家論の問題を取り上げるのは、単に三期論や政治過程論にとどまらず、この両者に最も象徴的に見られるところの国家論の認識における一面的理解、或は誤解をまねくような理解に対する総括を行い、この認識の一面的傾向そのものを揚棄していくためである。それは単的には次のような内容に見られるところのものである。

① 政治過程論には戦術の駆使・運動の急進化↓国家の本質たる暴力(機動隊)との対決↓階級意識の形成なる図式に見られるところの、「国家の本質＝暴力」的な理解が、しばしば見られる。

② 更に三期論には前述した部分と関連するが、情勢の転換が生活の逼迫をまねかせるといふような叙述に続いて、(1)「生活の実態性それは個人の内部に存型する幻想共同性と階級性の対立抗争を極限化させ」(2)「そのことは国家の幻想性を払拭し、国家が階級対立の非和解の産物」であり、「それ故にこそ被抑圧者にとって外在化した疎遠なブルジョアジーの支配の暴力性を本質とした産物であること」の認識の萌芽を(主体に与え)(3)「その萌芽は個人の社会関係の総体への認識に至らしめ」(4)それは最終的には「その根底的な自己の解放を生産関係の即ち私有財産制の廃絶が否かまで迫るところ」の認識へ主体を至しめる「本質性を有している」といふ部分がある。この論理のあやまりに関しては前述したとおりだが、ここで見られることも又「ブルジョア支配の本質＝暴力」的な内容であることは明らかである。我々がここで明らかにしようとするのはこれらに見解そのものの発生の根拠としてのあの極めて機能的なものでしかないレーニンの「国家と革命」そのものに対する批判の視点の明確化である。

①「国家と革命」には「国家は階級対立の非和解性の産物であり、支配階級の被支配階級に対する抑圧機関である」、又、プロレタリア独裁に関しては「真の民主主義、を果した場合にだけ長く続いた」(反デューリング論)、からである。しかもこの社会的諸機能こそが原始共同体が私的所有と富の分配によって崩壊していく過程で、幻想的な共同体意識を植えつけ、ひいては経済的に支配する階級のその生活条件と支配条件とを暴力で維持する機能へとその主要な任務をかえていくところのものなのである。

ここまで見てくればわかるように、レーニンの国家論は、「国家の社会的機能における暴力機能」への比重が強く、従って論理の問題としては一定の限界を持たざるをえないのである。

更にブルジョア国家はこの社会的機能にとどまらない実態性を有している。それは資本制の生産様式そのものに媒介された、様々な形態をとった、社会的分業そのものである。

すなわちブルジョア特殊利害でしかないものが、何故に幻想の共同利害として市民社会の深部にまで、あたかも実体をもつものであるかのように浸透していくのか、ということとは、ブルジョア国家支配をして単にイデオロギー支配と暴力支配という二つの要素のみへは還元しえない内容を与えているのであり、それを解くのがこの「社会的分業」の問題なのである。

マルクスの言葉をかりるならばそれは「分業と同時に、各個人あるいは各家族の利害と相互に交通しあうすべての諸個人の共同の利害とのあいだの矛盾が生ずる。しかもこの共同の利害は、ただ単に表象のうちに入普遍的なものとしてあるのではなくて、何よりもまず現実のうちに、相互に分業していることよって依存している諸個人の関係として実在する」(ドイテ)ということのだが、ここではその内的な論理そのものをとらえだすことにより、「国家の本質＝暴力」という単純理解に対する批判を更に加えなければならぬ。

②(1)引用したマルクスの文章からもわかるように、社会的分業の出現が、各個人各家族の特殊利害と、相互の交通交換しあうすべての人々、共同体としての集団利害、共同利害との間に、一定の矛盾をつくり出すわけであるが、この特殊利害と共同利害の矛盾にもとずいて、共同利害は一つの普遍的イデオロギーとして自らをあらわす。その場合この普遍的イデオロギーとして自らを表わした共同利害は、主にお互いの分業関係、社会的紐帯全体を維持するところの基礎をおくのである。つまり、いまでもなく階級社会において既存の社会関係の維持に最も利益を覚えるものは、既に物質的生産手段を掌握している経済的に支配している階級である。

(2)この普遍的イデオロギーは共同体幻想として、次第に慣習や伝統、或は道徳と

プロレタリア民主主義がプロレタリア人民に適用され、残存する階級敵に対しては「独裁を」といふ国家の形式が与えられている。このことから我々はただちに次のことを知る。すなわちレーニンの国家論には(1)国家発生の直接的原因としての階級対立と(2)それによる社会秩序の維持「社会統制」という主として政治的な側面のみが強調されているということ、これである。確かにレーニンは国家がもつ具体的物質的側面、すなわち国家の発生及びその起源からすれば本質的な部分については、この側面を強調したのであるのかもしれない。しかし重要なことは、これだけでは国家論そのものの体系的な原理的把握を困難とするばかりか、「支配階級に組織されたプロレタリアートの独裁」国家の適用、の内容を、少数官僚の独裁という誤った方向へ導く可能性すら内包せざるをえないのである。

エンゲルスは「家族、私有財産および国家の起源」で国家の本質に関して、「国家は決して外部から社会に押しつけられた権力ではない。同様にそれは、ヘーゲルの主張するような「人倫的理念が現実化したもの」でも「理性が現象化したもの」でもない。それはむしろ一定の発展段階における社会の産物である。それは、この社会が自分自身との解決しえない矛盾に巻き込まれ、自分自身で払いのける力のない、和解しえない諸対立に分裂したことの告白である。ところでこれらの諸対立が、即ち相対立する経済的利害をもつ諸階級が無益な斗争のうちに自分自身と社会を被覆さなためには、外見上社会の上に立つてこの衝突を緩和し、それを「秩序」の枠の中に保つべき権力が必要となった。そして社会から生れたら、社会の上に立ち、社会に対してますます外的なものとなっていくこの権力が国家である」と述べている。国家の発生は確かに階級の発生と不可分に結びついている。だがこのことは、支配階級がその時代に照応した生産諸関係の維持、存続、換言すれば社会的再生産の維持を基礎としつつ、しかもこのことよって階級対立の非和解性の産物としての国家の、階級抑圧を確固としたものにする」とを決してさまたげはしない、ということなのである。それどころか政治権力はこの社会的再生産維持を計るために階級対立を緩和し、それを「秩序」の枠の中に保つべく、抑圧諸機関を通じて現実化するものであり、階級対立の非和解性の産物である国家は、その社会的再生産維持すなわち私的所有制度と分業による交通形態の下における生産諸関係の維持による階級抑圧のため、国家の幻想的共同性を付与することになるのである。そしてこのことは国家の社会的諸機能の問題とかかわってくる。何故ならば「どこでも政治的支配の基礎には社会的職務活動があり、また政治的支配は、自分のこの社会的な職務活動

して自己を表現するようになり、やがてそれは、慣習法等々として法律として明文化された形態をとるようになる。

「この幻想、国家意志は法律道徳などのうちに観念的に表現された支配階級の生存条件であり、支配階級の個人の意識のうちには使命としてあらわれ、被支配階級の個々人に向つては生活規範としてかけられる」(マルクス)

(3)結局、分業に包摂された個人の間では、その分業が例え対立的な契機を含むような場合にも、自分の行っている生産行為が、他の人間の行い生産行為の執行を前提とするが故に、そこに一定の共同利害が成立するのであり、生産過程にある(4)にとり(資本制社会にあってそれは有機的の一体として全世界的規模を持っている)自らがその共同体内にとどまる限りは、その当かく社会が破壊されては困るのである。この当かく社会の生産様式の維持ということが、市民社会の内部に、ブルジョア特殊利害が、実体性を持って浸透していくことの物質的根拠なのであり、ブルジョア国家はそのような実体を有するが故にこそ、その支配を可能とし続けるのである。そして国家の本質「ゲバルト装置論は、それだけでは全く一面的でしかない」ということである。

第二章 明大斗争に實際に関与した指導理論

我々はこれまで明大斗争を規定した、いわば間接的要因とでもいふべきものを分析してきたのであるが、この第二章においては、より直接的な、それと實際に關与した指導理論のいくつかを分析し、それをとらえかえしていかなければならない。その場合あらかじめ結論的にいっておくならば、我々は明大斗争をいわゆる「運動主義」と「経済主義」の斗いとしてみてみるということであり、この全文はそれ故それ等に対する批判、(或はそれらを許容したことに對する自己批判)として書かれているということである。

(一) 明大斗争において「戦旗」紙上に現われた一つの見解

我々はここで六六年十二月十五日付の「戦旗」にあらわれた政治局論文を、最も象徴的な経済主義のそれとして取りあげていきたいと思う。というのは、そこに主張されている内容というものが、(全くレーニン主義とは関係ない地点ではあるが)、それなりの一つの論理をもって書かれているからである。

(i) その論理的内容

その論理とは(1)「安部斗争時においては高度成長を基礎に一応は安定していた同階級のとりひき体制が、現段階においては高度成長のいき詰りを基礎として巨大な動揺を開始した。(2)それ故「攻撃に対する実力防衛、実力抵抗、内乱主義こそが日本の労働者人民の主要な生存条件となった」のであり、逆にブルジョアジーにとっては「労働者人民大衆に対する国内攻撃をその主要生存条件とする」ということになったのである。(3)ことから、「この攻撃に対する抵抗」「実力防衛」が「徹底抵抗」「反帝斗争」として斗われるならば、それは実は、内容的には「日本資本主義の生存条件に対する斗争となる」のであり、「プロレタリア革命の要求を内部にひめた斗争として」、「侵略と抑圧に抗し、生活と権利を実力防衛する」という「改良斗争」を闘いながら、(いながらにして)「プロレタリア革命」の内容を闘っているのである、というものである。

このような内容は、この「戦旗」以外にも、より具体的には同盟六回大会政治報告(共産主義8号)の中に、(1)「帝国主義国におけるプロレタリア人民大衆のこうした反帝斗争は直接的には、帝国主義の政治的経済的攻撃に対する防衛斗争であり、帝国主義打倒すなわちプロレタリア革命を直接に提起するものでない」、(2)「従ってこの反帝斗争を大衆自身の意識に即して表現する大衆斗争スローガンは、防衛と抵抗のスローガンにすぎず、帝国主義の打倒、プロレタリア革命の要求を直接に表現するスローガンではない。」「(3)だが現在、国内人民大衆に対するこの政治的経済的攻撃に帝国主義の生存にかかっている。従ってこの攻撃に抵抗し反撃するプロレタリア人民大衆の斗争は、帝国主義の生存そのものに対する斗争とならざるをえない。」「(13 P)というぐあい、にみられるのである。これ等の論理は、更に、(4)世界危機、(5)先進国間ダンピング合戦、(6)ダンピング戦に打ち抜かれた国内人民生活抑圧「ブルジョアジー」の唯一の延命、(7)生活と権利の実力防衛、(8)改良斗争でありながら内容的にはプロレタリア革命(これがどうしてプロレタリア革命となるかは不明)、といった粉飾をつけて登場してくるのであるが、我々はこのような馬鹿らしい論理に対しても、真面目な批判を行わなければならないのである。

(ii) それに対する批判

① 我々が打倒せんとする国家なるものは、いうまでもなく政治的共同体のこと

は徹底的にやるか、やらないかの違いではない)

④ しかもこれは資本主義の動揺としてとらえられる現在の情勢が、(1)帝国主義の対内膨張から対外膨張への転化の時代であり、この対外膨張ということは、(2)各帝国主義の「産業構造」や「産業企業模」の「不均等発展」の法則性そのものに基づいて行われ、その場合にはそれ等の帝国主義各国にとっては、(3)帝国主義軍隊の整備」であるとか、「核の保有」であるとかが自己を支える唯一の物質的基礎となるが故に、(4)各帝国主義がこぞ「政治的、軍事的対立」の渦中にまき込まれてゆくという「帝国主義の金融寡頭制による支配」の実態を何らつかみえていないことにより、あたかも帝国主義の運動法則が「対外膨張」にあるのではなく「国内抑圧」にあるかのような、全く誤った見方をしているのである。ここから導き出されるものは、「反治斗争や経済斗争を徹底的にやれば革命が起きる」というものであり、それは真に反戦斗争や政治斗争の視点を一切欠落した真に経済主義そのものでしかないのである。

⑤ 大衆が守ろうとする生活や権利というものは社会的諸関係そのものに規定されたものであり、その場合の社会的諸関係とは「思想として把握された支配的な物質的諸関係」として、イデオロギー的な関係までも含んでいるのであって、大衆はそこでは「自己を取巻く全ての関係が悪化するなら我慢するが、自分一人が損をするのはイヤだ」というような意識のもとにあるのである。それ故大衆は彼等を規定している「国家」全体が危機に瀕した時には、生活と権利を防衛するどころか「欲しがりません、勝つまでは」と、全てを投げ打って共同体の維持(実は「国家」の維持)に向うのであり、それはいうまでもなく、「幻想的共同性」「共同利害」を媒介にした資本制ブルジョア国家支配の原理にそったものなのである。この共同体イデオロギー論を突破しうるものは「国家」と「民族」を突破するものとしての「階級」すなわち「プロレタリア国際主義」の視点しかないものでありこの「プロレタリア国際主義」とは、自己の生活や権利の一切を犠牲にしても、例えば第二、第三のヴェトナムを国境のうちに創り出すことにより、他国被抑圧人民の闘いを支援するというような崇高な内容をもったものである。それ故自国プロレタリアートに自己否定を迫るのではなく、(反戦斗争や政治斗争のもち込みというものは、そういうことなのである。)逆に全くブルジョア的に、しかも一國主義的に「生活と権利を防衛せよ」というのは、それ自体一國革命論者(実は二段階論者)の言葉である。

それと共により問題となることは、そのような「生活と権利を守る」ということが、なんでプロレタリア独裁権力の樹立 ということ、「権力移行」と「ヘゲモニー掌

なであり、この政治的共同体は、第I章の最後で述べたように、まさに資本性の生産様そのものに立脚して発生しているのである。そして革命の問題は当初、前衛政党による政治権力の掌握の問題として登場するのであり、それはあくまでも政治問題(上部構造の問題)としてとらえられねばならないものである。

ここからいえることは、それ故革命の問題は、前述した内容を支える(1)「ゼネスト」、すなわちプロレタリアートの生産管理、(2)「赤軍」、すなわちプロレタリアートの武装による軍隊との戦争、(3)「ソヴェト」、すなわち統一戦線の最高の形態、或はプロレタリア自己権力、等の問題として「共産主義的政治」を媒介としつつ克ちとられていくものであるということであり、これ等の条件を一切捨象して、革命にとり、客観的条件を意味するものでしかない、下部構造なかんなく世界資本主義の危機から、ただちに、(単に生活と権利を実力防衛する)というようになことをもって、プロレタリア革命の到来を夢想するのは、全くの客観主義でしかない(というよりもむしろ氣狂いの、ビエロである。)

② 更に我々にとり問題となるべきことは(1)そのような「赤軍」だとか「ソヴェト」だとかを、どのようにして主体的な闘いの中で創造していくのかということであり、(2)それを大衆に対する政治主張の中にどのように位置づけていくのかということだが、その場合それらの一切は単なる言葉としての「国益国防」だとか「ナショナルイズム」だとかではない。まさにそれ等の物質化された内容をもった政治潮流との間の、激烈な党派斗争を媒介にして形成されていくのであり、そのような党派斗争を保障してゆく前衛部隊を、どの様にして創造してゆくのかが再度問われるのであるが、これらの一切に自ら答える視点そのものをもっていないということは、革命的には全く無意味なものでしかないということである。

③ この論理が授業料斗争に適用されるならば、それは真に「生活と権利を実力防衛」「徹底抵抗」する斗争として、しかもその内容として「プロレタリア革命の内容をもった闘い」として、行きつく先は自爆するしかないものであり「断固やる」「徹底的にやる」ということが唯一の革命性や左翼性となってしまっているのである。それは「徹底抵抗主義」「内乱主義」と美化されても、現実にはアナーキストの「直接行動主義」と何らかわらない。即ちそれは大衆の自然発生性へ全面的に拝詭する経済主義そのものである。我々は「個人の生活防衛」のための「企業防衛主義」なるものがIMFJC路線として現在ブルジョアジーが提起する「国益国防」論の中に、しっかりと組み込まれることをみなければならぬ。社民はただ「生活防衛斗争」「革命運動」といわないだけである。(この論理からいえば我々と社民との違い

握」の問題に直結するのかもしれないことであり、その内的連関性の実体的解明が全く不明である。それ故このような論者達は(1)「下部構造における経済危機」の問題と、(2)「政治過程における権力掌握」の問題を、それを媒介する(3)「国家論」を欠落することに、(4)上部構造と下部構造の区別をつけられずに混乱してとらえている、といわざるをえない。彼等はまさに、(1)客観主義的情勢分析から直接に任務方針(生活と権利の実力防衛)を導き出し、それに思惟的な革命的展望(プロレタリア日本革命そのもの)を接木することによって、現在の情勢下においてすら、(2)大衆斗争の直接的延長上に革命運動を指定し、大衆斗争そのものを革命運動とイコールで結んでいくという、一方における情勢分析の客観主義、任務方針の主観主義であり、他方における超歴史主義(レーニンの平和・土地・パンと自分達の生活と権利を、革命的夢想のうち「二重写し」してとらえている)のである。それ等が安部斗争を何ら総括してない所の所産であり、又理論的にも旧プリント以下であることは、いまでもない。(全く今時こういうのは珍らしい)

(ii) いわゆる夜屋論批判

ここで我々は、いわゆる夜屋論の批判をとりあげなければならない。というのは、「明大斗争の総括」と称して、「階級形成論」なるものが共産主義10号に掲載されたが、我々社会学同人大支部はこれを全面的に否定したという前史を持つからであり、これに対する我々の「プロレタリアートの指定」(若かり復刊一号)に載せられたが、それ以後我々はまだこの夜屋論の批判を全面的に済ましてはいなかったからである。それ故我々はここで、明大斗争の運動論、組織論の総括の一環として、まさに「夜屋論」的な思考方法の中に潜むあやまりの数々を暴き出し、真の意味での主体的総括を完了しなければならないのである。

(i) 夜屋論とは何か

それは「階級形成と党形成」と銘うち、まさに変革主体としての近代プロレタリアートをそこに指定せんと、かつての12・15政治局論文の筆者が悪戦苦闘しているところのものである。だが悲しいことにこの筆者は、マルクス主義哲学における本当に基本的な事柄も一切理解していないらしく(そりうった文章を通じて)我々に赤恥をかかし続けるのである。ともあれそこで主張されている内容とは、

① 「奴隸制社会、中世封建社会から最も鋭く区別される資本主義の特殊歴史性は、商品形態—商品売買関係をもって生産過程における階級関係—搾取と被搾取の関係—支配と被支配の関係を全面的に包摂している点にある。」そしてこの商品売買関係では、ブルジョアもプロレタリアも形式的には全く自由平等な人格としてあらわれる。「ブルジョア意識とはこの商品売買関係の意識以外のなものでもない。」「ブルジョア意識の形式的普遍性は、資本主義の階級関係をおおっている、このような商品売買関係の普遍性にとずいては、」

② 「だが、一度生産過程の内部に入り込むと事態は一変する。」「労働生産主体（これこそ人間そのもの！）そのものとしてのプロレタリアが、資本の支配・統制・搾取のもとにおかれているのである。」「従って生産過程における資本関係—これはもはや売買関係などでは全くない。それは、労働生産主体そのものに対する資本家の支配と統制の關係—搾取關係以外の何物でもない。」「すなわち「生産過程内の階級關係は、一切の身分的、道德的、慣習的關係をはぎとられて、文字通り純粹な階級關係—支配、服従關係になる。」のである。

③ 「それ故、ここでプロレタリアのブルジョワに対する抵抗、反抗は、労働生産主体（人間そのもの）の非生産者の支配（資本主義的生産關係）そのものに対する普遍的人間の斗争に他ならず、このようなものとして社会主義斗争への萌芽に他ならないのである。」「従ってプロレタリアの階級意識は矛盾的性格をなしているといわなければならない。」「プロレタリアの即自的自然発生的意識はブルジョワ意識であるが、そのブルジョワ意識の外皮の内部に、労働生産主体—プロレタリアの、非生産者—ブルジョワの支配そのものに対する抵抗意識（革命意識の萌芽）が秘められているのである。」「というようなものである。それは要するに「生産過程の内と外」を場所的のものとして振り分けることにより、そこにおける「主体の意識」をも亦、「ブルジョア的のもの」と「プロレタリア的のもの」へその主体の位置する場所によって振り分けるといふものであり、そうであるならば主体（プロレタリア）は一般的にいつて夜は生産過程の外にあり、昼は生産過程の内にあるが故に、夜と昼とはその持つて「意識」も異なる、すなわちそれはプロレタリアの意識の夜屋論である、ということから、我々はこれを夜屋論と呼ぶのである。さて、我々はこれに対する批判を行なわなければならない。

(ii) 夜屋論の誤りの数々

ているのであるが、例えば労働強化や労働条件の悪化に対するプロレタリアの反発それ自身は、すなわち「抵抗や反抗」は、彼の望んでいる「普遍的人間の斗争」とはならず、単なる反発に終始するか、せいぜい「労働力商品の売買契約条件の変更」の欲求にすりかえられていくところのものでしかないことは、もはや全く自明のことである。

② 更に夜屋論においては、あたかも「生産過程の外」にあるときには、プロレタリアートは「ブルジョアと同様の商品売買の自由」を有することにより、資本からも解放されているかのような思いを込めているのであるが、それも全くのあやまりである。何故ならば、プロレタリアが生産過程の外にいる時、すなわち彼が仕事のため自由に遊び、自分のしたいことをしている時間さえも、これは彼の労働力の再生産のための過程の一部にすぎないのであり、彼は決して資本から解放されているわけではないのである。

③ そして第三の問題点としてはこの「ブルジョアと同様の商品売買の自由」そのものが、プロレタリアートにとっては、もともと「賃労働と資本」との「等価交換の仮象性」に立脚したものであり、「ブルジョアが商品を買う」ということと、「プロレタリアートが商品を買う」ということは、現象一般をとらえればその行為としては同様であったとしても、その内容の全く異なるどころのものだということ、この夜屋論は全く捨象した時点から出発しているということである。それ故我々はそのことを根底的に批判しつづけたために、この夜屋論の筆者が「資本主義的自由の定有」としてとらえている、「商品交換」の「等価性」のまやかしを暴き出すことからはじめたいと思う。それが明らかにされるならば、「ブルジョアジーの所有する貨幣」と、「プロレタリアートの所有する貨幣」を、全く現象的に同一のものとしてとらえることのあやまりは、ただちに克服される筈だからである。

④ マルクスは資本論第二章「剰余価値の資本への転化」において「資本家と労働者との交換關係は、流通過程に属する仮象にすぎぬものとし、内容そのものとは無縁であって、内容を神秘化するにすぎない単なる形式」であると言っている。そしてその内容とは「資本家がたえず等価なしに取得するすべに対象化された他人の労働の一部分を、より多量の生きた他人の労働とたえず再び転換するということであるといっている。このことは何を意味するのかというなら、資本制的生産關係において、賃労働と「等価」なるものとして交換される「資本」賃金は、実は「第一」には等価なしに取得された他人（賃労働）の労働生産物の一部分なのであり「第二」にはその生産者たる労働者によって填補されねばならぬ」しかも「新たな剰余を伴って填補されねばならぬ」所のものであるといっている。

① 夜屋論の作者は「純粹な階級關係」なるものを生産過程内部の資本家と労働者の間の「支配服従關係」ととらえ、それに対する「抵抗・反抗」を「労働生産主体」の「非生産者の支配」に対する「普遍的人間の斗争」ととらえている。そしてこの「非生産者」の支配に対する「抵抗・反抗」が、「社会主義斗争の萌芽」であるといっている。まず第一のあやまりは、これ等の論理のすべである。すなわち、

(i) いわゆる資本制国家と、それ以前の諸社会における国家一般とを、本質的に区別する点、すなわち市民社会と政治的共同体の分離が資本制社会において完成されるという事の根拠は、諸社会における国家一般においては、生産者と物質的生産手段の自然発生的結合様式が存在したが故に、搾取關係としての下部構造と身分的・道德的・宗教的關係としての上部構造が一体化しており、従って政治的共同体が国家として自立することができなかった故である。これに対し資本制社会においては生産者と物質的生産手段が明確に分離し、その結合が「貨幣という商品」によってなされるが故に、階級支配そのものが本質的には（マルクスの言葉を借りるならば）、経済的強制であって経済的強制によるものではない。だから資本制国家では、階級支配によって「暴力」は外化されるのであり、ここにおける政治イデオロギーの支配は幻想的共同性を軸とせざるをえないのである。

(ii) ここから言えることは、「資本制的な最も純粹な階級關係」とは生産過程の内と外を問わずに、夜屋論の作者が言うような「支配服従關係」ではなくて、あくまでも「賃労働と資本」との（仮象としての）「等価交換關係」の中にあるのだということである。しかもこの關係は生産過程の内と外を問わず、資本制的生産關係のすべてを規定しているものであり、彼の言うところの「搾取と被搾取の關係」そのものが、この「賃労働と資本」との（仮象としての）「等価交換」關係によっておきかえられているのである。

(iii) 従ってこの夜屋論の作者が「生産過程における資本關係は、一切の身分的・道德的、慣習的關係をはぎとられる。」という時、この夜屋論の作者は、その実、このことの意味をまちがって理解しているか、或は全然わかっていないのである。というのは、彼は「身分的、道德的、慣習的關係をはぎとられて」と言いながら、そのような、まさに「身分的、道德的、慣習的關係」のうち、すなわち「支配服従」という経済的強制の關係のうち、生産過程内での階級關係をとらえているのである。これがまさに「疎外された認識」ではないことはいくらでもないうことである。

(iv) しかもこの作者は自分のそっくりした「混乱した把握」には一切無頓着に、そのような「支配、服従」或は、「搾取と被搾取」關係に基づいた意識が、「普遍的人間の斗争」であり、「社会主義斗争の萌芽」である「抵抗と反抗」をまかせるといって容を神秘化するにすぎない全くの「仮象」ではないという事である。そして夜屋論の筆者は、これ等の内容、即ち(a)生産物は資本家に属して、労働者に属さないという事、(b)労働者はその代償に賃金をもらうが、それはもともと彼が作ったものであるという事、(c)この生産物の価値は、投下資本の価値のほかに剰余価値を含むが、この剰余価値の生産のために労働者は「労働」を要費したが、資本家は何も要費しなかったという事、(d)にもかかわらずこの剰余価値は資本家が所有するという事。この五つの内容をばきりつとふまえているらうか。断じて否である。彼はまさに「賃労働と資本」の「等価交換の仮象性」を「資本制社会における自由の定有」ととらえて、①に述べたあやまりを繰り返して「支配と被支配」の關係、（彼にいわせればこれが純粹の階級關係であるが）を隠ぺいする「形式的普遍性」として、これをブルジョア意識なるものとイコールでくりつけているにすぎないのであり、「賃労働」と「資本」の「等価交換」の「仮象性」を、「仮象性」として暴きだすのではなくて、「資本制的自由—ブルジョア市民として同等の権利を持つ」なる図式のものとして、その「実態性」としてこれをとらえて立脚しているのである。このような立場が全くの現象主義でしかないことはいくらでもないのであるが、「仮象」でしかないものを「実態」としてとらえるというあやまりが、生産物からの労働者の疎外も、或は又、類的生活からの疎外も、一切捨象した時点で、「疎外論」を組み立てるといふ逆転した現象となつて発現していることを我々は見ないわけにはいかなないのであり、しかもそのような労働者の反発を社会主義意識の萌芽であるととらえる、とらえ方そのものは全く経済主義者出しのものではないのである。

しかもそこで彼が言う「ブルジョア意識」は実は「日本国憲法」が保障する「法的人格」における「諸権利」としての「自由や平等」と実体的には少しもかわらないものである。（即ち「商品売買の自由」は形式的には「憲法」によって与えられた「人格」に基づくものであり、彼はこの「商品売買關係の意識」が「ブルジョア意識」に他ならないと言っている。）すなわち、彼の言うとおり論理を進めるなら生活が—彼は生産過程の内部におけるプロレタリアの生活は被搾取と被支配だと、っている。——意識を規定するので

は、憲法が意識を、ことに生産過程の外部での意識を規定していることになる。このような誤りはいうまでもなく、彼が「形式」の「普遍性」という「現象」を「実態」としてとらえて論を組み立てるといふ「概念」の「自己運動」を、ことに立脚するのであり、「現象」そのものに「真理」を前提的に与えて、「現象」それ自体から何の方向もなしに論理を出発させているということが、方法的なあやまりの根幹なのである。彼の主張としてのブルジョア意識とは「法」の下の「人格」の「自由・平等」(それ自体として与えらばるならばまさにブルジョア支配が、中世の封建領主のような「身分的・宗教的・道徳的」な「経済外的強制」ではなく、純粹に経済的な強制に立脚している)を証左する内容(を物質的基礎とする「意識」を意味するのであり、他方におけるプロレタリア意識とは「支配」に対する「反撥」の「意識」を意味するのであってそれは(a)根源的蓄積過程から(b)マニフアクチュア、労働貧民の発生と(c)機械制大工業の導入による労働貧民の機械体系への強制的な従属(d)すなわち近代プロレタリアの発生という、歴史的論理的な近代プロレタリアの発生)の考察を一切捨象した、全く没歴史的な内容でしかないものであるということを、ここで我々ははっきりと確認しなければならぬのである。

(ii)もし我々がプロレタリアートの意識の二重性を指定したいならば、我々はプロレタリアートの存在そのもの指定から出発しなければならないのであり、その場合のプロレタリアートの存在とは、プロレタリアートそのものの、歴史的論理的な発生の根拠にまでさかのぼった内容を普遍的本質とした、その適用としての「現代帝国主義国家」における「個人」と「階級」のことなのだ(個人プロレタリア、階級プロレタリアート)ということ、を、ふまえないければならぬし、その具体的内容として確認されるべき最も大切な事は、(a)物質的生産手段と生産者の無媒介的な結合が、近代プロレタリアートの発生と共に分離され、(b)その事により物質的生産手段どうしの結合の可能性が無限なものとなる。即ち生産力の発展が無限なものとなるにもかかわらず、(c)人間の機械体系への従属ということが、個人の分業への包摂を完成させるといった点に求められねばならないのである。そして更にそこにおけるプロレタリアートの二重性とは上皮と中のアノコの関係のような、意識の二重性なるものではなく、(a)私的労働力商品の所有者であることに基く商品経済そのものの直接の構成分子としてのプロレタリアートの保守性、ブルジョアの個人性と、(b)生産力と生産関係の矛盾を止揚しうる階級としての唯一の存在に基くその全体性、或は又、機械体系に順応することから出発した組織性、商品としての普遍性との間

けばよいのであり、その場合には「政治斗争」や「反戦斗争」の意識的な独自の持ち込みが我々の任務となるのである。もし仮にそれが「社民を解体せんとす

るスローガンの逆手どり」であるならば、社民そのものが斗わないのは何も一般的に日和つてからではなく、彼等の持っている共産主義そのものが彼等をして斗わせしめないものであり、その場合にはその革命論そのものに対する「イデオロギー的な批判」が保障されなければならない筈である。とまれそういつた意味でこの「スローガンの逆手どり」論は、革命的な位置づけを行なうことから出発しないかぎり、それが革命的左翼の「組織戦術」にまで止揚されていくことは、その意味では、思いつき」の域を出るものではないということである。ここでは、結局これ等の主張のどれもが、革命にとり客観的条件でしかないものを、あたかもそれが揃うことによって革命が保障される必要十分条件であるかのようにとらえているところの、全くの客観主義の産物でしかないことを確認すればよいのであり、それ以上の深化された内容の何かを求めても全く無意味なのである。というのは、これ等の経済主義者達は、確かに色々と他人の意見を取り入れたりはするのだけれど、その根底にあるものは「危機論」なのであり、それが全く無責任なものでしかないことは、既に充分に「日韓階級決戦論」で明らかにしているからである。一九五二年「ソ連邦における社会主義の経済的諸問題」に見られるスターリンの「一般的危機論」と彼等の「危機論」の一体何処が違うのか経済主義者の諸君は良く考えてみるがいい。そこにあるものは、徹底的にやるかやらぬかの違いでしかないのだから。全く社民を左から突き上げる」なる論理のくだらなさ加減よ。

(三) 齊藤・大内の路線、その理論的背景

我々は決して齊藤・大内のとった政治的行為そのものに理論的基礎があったのだ等と考えてはならないのであるが、少くとも齊藤には、いわゆる明大独立社学同以来の、それなりの一貫した思考の方法が存在していた筈であり、これはそれに対する我々の批判である。

但し、現在の地点から既に政治的にも過去のものとなったこれ等を批判したところで、我々にとり発展的な内容としては何の意味も持たないことは、我々自身充分に承知しているつもりである。

の矛盾の問題としてたてられなければならないのであり、その場合あくまでも「組織される階級」としてのプロレタリアートを「どのようにして組織していくのか」ということが、我々の視点の中心環にすえられていなければならないのである。

この「夜屋論」においては「どのようにして組織するか」の結論が、結局「生活と権利の實力防衛」でしかなく、その意味でそれは「内的矛盾の自己展開」と同じように、それ大ならば結局は「死んだ抽象」の内容をしか持っていないのである。「生活と権利の實力防衛」が決して多量の共産主義者を産出させるものでないことは第二章の(一)で述べたとおりであり、我々は「党」が「プロレタリア」を「如何なる内容で持つて組織化するのか」を主体的に問うていくべきなのであって、その内容を全く欠落した「生活と権利の實力防衛」は、全くの客観主義の産物でしかないことを、ここに確認しなければならないのである。

④ 最後に我々は、この夜屋論中に語られている「社民スローガンの逆手どり」なるものにも若干ふれなければならないが、その場合、現在の情勢下にあつては、社民は経済斗争が政治斗争や反戦はもちろぬ(11・12斗争等)反戦斗争すらも斗わなくなつてきている。(東交合理化における協会派の当局との調停ぶりを見よ)のだから、前提的に確認しなければならぬであろう。即ちそれは「逆手どり」をしたくても既に行かないような状況が到来していることであり「逆手どり」そのものが「死んだ抽象」になりつつあるということである。そしてそれをふまえて論理を出発させても、やはりこの「社民スローガンの逆手どり」は全く無内容なものでしかないのであるが、それが何故であるかは、社民一般が日和つているとかそういつた次元の問題ではなく、より主体的にこれを提起している人間そのものが「社民スローガンを逆手どる」ことによつて、一体何を獲得するのか、(a)運動を作るのか、(b)党を形成するのか、(c)それとも社民を解体させるのか、(d)これ等のすべてを行なうのか、全然はつきりさせていないからである。もし仮にそれが「党を作る」ためのものであるならば、そこには(a)共産主義的政治と(b)党の有している共産主義そのものの内容が明らかにされねばならず、「運動を作る」のであるならば単に(a)大衆を結集させるのにとどまらず、(b)大衆そのものの運動に方向性を与えていかなければならないのである。しかもこの「党を作る」とか「運動を作る」とかいうことは、個々別々なものではなく、「共産主義的な政治」に媒介された統一なものであり、その場合には結局この「逆手どり」は、これ等の何一つに答えられない内容をしか有していないのである。そしてもし仮にそれが「社民を弾劾して断固闘う」ことを目的としているならば何も「スローガンを逆手にとる」必要はなく、自分達が独自の組織化をしてい

(ii) 先駆16号に現われた杉山論文の内容

これはそのような過去の明大独立社学同の理論的指導者であった、或は又、齊藤・大内の背後に政治的背景として存在していた、かつての杉山明夫が、先駆16号紙上に、「日本帝国主義の社会的再編と早大斗争」と題して書いた学闘斗争論の内容である。この論文が明大斗争の直接の理論的背景であったと我々は考えないが、それなりの影響を与えていたことは否定できない筈である。ともあれその内容というのは次のようなものである。

①「早大の斗いに要請されていた基本的観点は」、「第一にこの斗いが全体的に進行する日本帝国主義の転換のための社会的再編の過程の一つであるということから生ずることであるが」、「それが全体的な斗いとして、政治斗争として斗われることを根本的に要請していた。」

②「この社会的再編過程を闘う中において、その過程を完遂させることを我々が阻止しうるならば、次の全面的政治斗争に対する巨大な陣地を獲得できる。」「この社会的再編過程の中でいよいよ改良的獲得物は、斗いの性格のそのような認識の上に立った極限斗争による以外、勝ちとることができない。」

③「国家独占資本主義といえども、国家が直接に労使関係を規制するメカニズムを基本的には採用しえぬ以上」、「その力関係において賃上げを労働者は、国家あるいは、個別資本の弱点和矛盾を利用しつつ、全面的に勝ちとることは可能である。」「なぜなら、個別資本は常に、「自己の利潤率に与える損失と労働者の斗いによる損失の計算でしか基本的には労使関係にあたらざるをえない」からである。

「早大斗争に要求されているのはこの微妙なズレ(国家と個別経営の立場の微妙なズレ)を拡大させ、敵の矛盾を深化させ、なおかつ、味方(学生)に斗いが、日帝の社会的再編との斗いであるということ、を明らかにするための論理と方針だった。」

④「授業料において大学側に全面撤回させることの意義が、単に、一般的に値上阻止というモノ取りの次元でしか、下部大衆には映せず、モノ取りの成果それ自身のもつ日帝に与える困難性とその影響が、一面では全く見落され、その宣伝が行なわれていない。」「日帝の政治、経済、外交の全分野にわたつての転換」は「人民大衆全体に対する弾圧と収奪の強化の上でのみ実行されるものである。」「要するにこの杉山論文の骨子としてあるものは次の三点にまとめる事ができる。即ちその第一点としては、①国独資段階においては、国家の政策を阻止しうるならば、ブルジョアジーは一大打撃をこうむる(それは内容的には恐慌がおきるとい

う程のことを意味している()ということであり、次には③個別資本と総資本(国家)の間には微妙なズレがあり、このズレにつけ込めば、個別斗争では勝利しえるということであり、そして三番目には④経済斗争であったとしても我々がそれに勝利するならば「陣地」を獲得できるということである。この三点の主張が、様々な修飾と情勢分析をもたせて、早大斗争の総括として提起されていると考えれば、杉山論文は理解できる筈である。

次に我々はこの批判にとりかからねばならない。

(ii) 杉山論文に対する批判

① この杉山論文に対する我々の批判の視点的第一は、まず彼の主張における「大衆運動の勝利」と、多量の共産主義者の産出」ということ、二重写しの混同、ないしは錯角に対して向けられねばならない。即ち彼は単的に「ブルジョア」の社会的再編を「阻止し得る」ならば、我々は「次の全面的政治斗争に対する陣地を獲得できる」と主張しているのであるが、それは(A)「大衆の改良的要求」ということ、(B)「共産主義的意識の産出」ということを、全く経済主義的な視点から二重に投影してとらえているということなのである。

例えば大衆が直接的な諸要求、「給料の値上げ」や「生活と権利の防衛」という意識に基づいて結集して来、ヘルメットをかぶりゲバ棒をもって、現象的な「組織性」と「意識性」をもって闘っている時、我々は大衆のこの「組織性」や「意識性」が結局は直接的な諸要求、「給料の値上げ」や「生活と権利の防衛」の為の「組織性」であり「意識性」ではないことを、決して忘れてはならないのである。というのは、(A)運動形態の現象的な左傾化ということが(B)斗争主体の内的な論理の把握としての質的な革命性ということ、イコールでは結べないからであり、(イ)運動の形成は(ロ)主体の形成と一致することと論理上別個の問題としてとらえられなければならないからである。だからもし彼の言うように「斗争の勝利」が、「即プロレタリアートの革命の為の陣地の獲得」となるためには、その過程において、指導部(党)による「党的主体創造のための意識的な闘い」が指定されていなければならぬのであり、この過程を欠落するならばいかに斗争に勝利しても即、「陣地の獲得」にはならないのである。その意味でこの杉山論文の第一の誤りは、「大衆運動の現象的な左傾化」の延長上に「党的創造」と「主体の形成」を夢見しているという、運動主義的な夢想のあやまりであるそれ故、我々がここで最後に引用すべき言葉は「何をなすべきか」におけるレーニンの次の言葉でなければならぬ。

「階級形成」なる図式と相まって、明大斗争を決定的な地点で破壊へ導いた、一つの主要な要因であると、我々はとらえかえすことができる筈である。だから齊藤・大内のボス交がこれを理論的基礎としていながら、その「学生民同」としての破壊は必然であったと言わねばならない。

③ この杉山論文における誤りとしてとらえられる第三の視点は、更には「物取りが日帝の存続に決定的な影響を与える」なる把握それである。多くの経済主義者達は、レーニンの「平和、土地、パン」からの類推なのか、皆このような思考を持っているようである。この杉山論文の把握のそれは、「生活と権利の防衛がプロレタリア革命につながる」というとらえ方と構造的には全く同じものである。それらにとらえ方の誤りは、一様に(イ)国家「政治的共同体の存続を、経済過程の存続と同じサイクルの上で二重写ししてとらえているという「政治過程」と下部構造としての「経済過程」の混同、ないしは(ロ)国家論そのものの認識における、政治権力の在り方の経済決定論的なそれにもとづいているといわなければならぬ。

(A)国家「政治的共同体の存続における」、「内乱鎮圧用軍隊」の存在の問題、或は又(B)幻想的共同性を軸としたイデオロギー支配の問題等々が革命論の中に実体的に把握されて位置づけられていないのである。下部構造の動揺は革命にとり、客観的の条件として存在するにすぎないのであり、(a)国家の軍隊に対するプロレタリアートの軍隊、赤軍の形成や(b)それを指導する党の形成の問題、或は又(c)議会主義的に歪曲されたスターリニスト党の解体の具体的戦術や(d)プロレタリア統一戦線への大衆の結集、ソヴェトや地区党の創造の問題等々を一切捨象した限りで何を語ろうとも、それは全くの客観主義、或は又空想社会主義でしかないのである。

その意味でこの杉山論文のそれも又、革通主義的な経済主義者の妄言であるといわねばならない。

④ 更にこの杉山論文の第四の誤りとして指定されねばならないことは(A)指導部の大衆運動の指導(B)ないしはその組織化における「反帝純化主義的」な一面的な傾向である。それは「運動の左傾化」「階級形成」なる図式との同心円的な把握から発生して来るものであるが、例えば彼は次の様に言っている。(イ)「指導部の意識性の欠如こそ早大斗争において徹底的に総括されねばならない。」(ロ)「闘いを大衆の自然発生の性の中に埋没させ」「レーニンの外部注入論を歴史との関連なしに否定し、労働者の自立思想を、徹底的に開花させる為の部隊として自らを位置づけた。」「社青同解放派に闘いの質を引上げる為の戦術を媒介とした指導の意識性が欠落するのは当然である。」(ハ)「反帝」という意識性をもちつつ、「平和と民主主義」の次

「労働者階級が政治斗争に、それどころか政治革命にさえ参加しても、それだけではまだ労働者階級の政治はけっして、社会民主主義的政治にならないのである。」まさに杉山論文に致命的な欠陥の第一は、このレーニンの言葉に示される「大衆の決起」を直接的に大衆の「革命的自覚」へと結びつけるところに発生する、「夢想」の中に求められなければならないのである。

② 第二にこの杉山論文の誤りとしてとらえられることは、「国家」(この場合は政治的共同体そのものではなく、むしろその執行権力をさしていると考えべきであるが)と「個別資本」との関連における、いってみれば政治力学的な認識の誤りである。即ち彼は「個別資本」と「国家」との間には微妙なズレがあるといっているのであるが、現在の「執行権力」がブルジョアジーの「政治委員会」であることは自明のことであり、又現在のそれは「金融寡頭支配」なのであって、決して産業資本主義段階のそれのような「夜警国家」ではないということである。だから個別資本における彼の論拠とする「最大限利潤追求の法則」(これそのものがスターリン経済学の依拠点であるが)も、既に現在の段階では、まさに国独資として国家の規制する(即ち金融寡頭制の規制する)枠(それはまさにブルの経済政策である)に包括されているのであり、税制を媒介とした国家の社会的機能そのもの(山一や陽特殊鋼の倒産に対する「国家」の資本援助等をみよ)が、既に個別資本の運動法則を上から包括しているのである。その場合我々は、「金融寡頭支配」としてのみ国独資をみればよいのであり、そこに於ては個別資本と国家の対立などあり得ない。(即ち国家の力がそんなに弱いものではないということである)或は又、それらは既にブルジョアジーの経済政策、産業政策の中に統轄されていると考えるべきなのである。

しかも、彼のこの「個別資本と国家との対立につけ込む」なる思考が運動論的に固定化されるならば、それは「明大内部の法人理事会对する利害対立につけ込む」というような形態として、まさに民同そのままの、圧力斗争諸要求貫徹路線が政治力学主義的に発生して来るのであり、この「物取り主義」は結局は「ボス交主義」へと転落せざるを得ない筈である。何故ならばそこにおいては「大衆の運動そのものはあくまでも、要求獲得の為のプレッシャー」でしかないものであり、斗争ことそのものの位置づけがそのつから「経済斗争主義」「改良の果実獲得主義」として、党形成、主体形成等々とは、無縁な観点で進められているからである。この政治力学、「ブルジョアジー内部の利害対立につけ込めば勝てる」なる思考は、国独資そのものの把握と、他方における三期論、政治過程論以来の「国家の本質、暴力との衝突

元にいる大衆を統一戦線とその戦術を媒介としながら反帝に高める。」「平和と民主主義を指す運動が反帝国主義に転化する基盤が与えられている。」

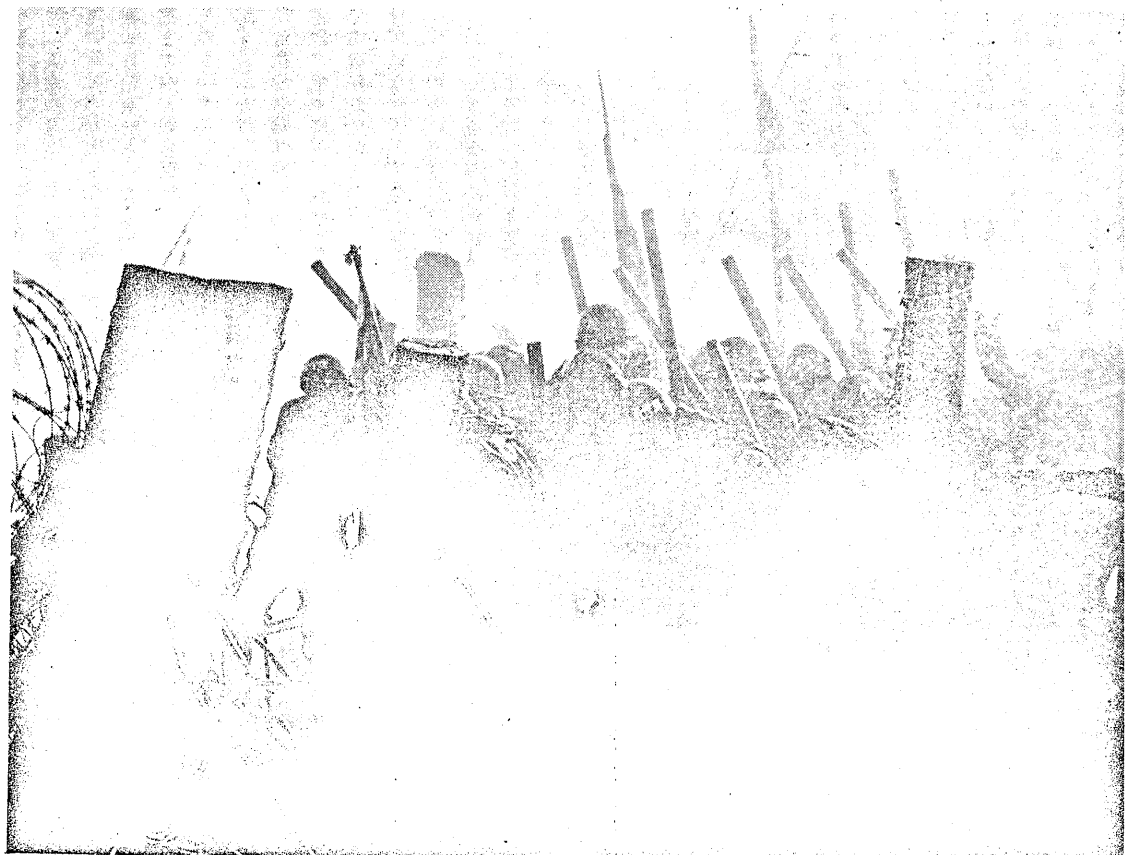
我々はここで、「戦術の駆使」がただそれだけに終始するなら、そのことによつて「大衆の意識」が「平和と民主主義」から「反帝」に自然発生的に移行していくものではないことを再度確認せねばならないし、たとえ8中委9大会路線が「ボスダム自治会」として、「平和と民主主義を守る」と規定したとしても、運動の指導部までが、即ち反戦学同なり日共学生細胞なりが決してそれだけを自己目的化して革命そのものや「反帝国主義」そのものを指していないかたは、いってしまえば、これを知らなければならぬ。即ち闘いが「平和と民主主義を守る」に終始してしまつたのは指導の弱体性の結果なのであり、その結果を解釈して「50年代は「平和と民主主義」だったが、これからは客観的条件が変化してから「反帝」だと言つたところ指導部の主観的願望とはウラハラに大衆の意識が「反帝」になってくれているわけではないのであり、ましてや「戦術を媒介とした指導の意識性」なるもの、実は「戦術のレベルアップに伴う運動の現象的な左傾化」が「平和と民主主義」から「反帝」へと知らぬ間に大衆を招いてくれるわけではないことを、頭の中だけでなしに、実体的に把握しなければならぬのである。つまり杉山論文に於ては(或いは三期論もそうだが)「指導部の意識性」なる言葉のうちに「指導の弱体性の結果」そのものを投影しているものであり、或は又、「客観的条件の変化」のうちに「指導性の喪失の結果の総括」を解消してしまつてい、ということである。

それ故、我々はあたかも「平和と民主主義」の代りに「反帝」を外部注入する(杉山論文ではそれが指導部の意識性だ、と言っているにすぎない)ことが第三期階級斗争であるかのようにとらえてしまつては決してならないし、大衆運動という階級斗争の外延的な発展過程のうちに、党形成すなわち主体形成という階級斗争の内延的な発展過程を指定できるならば、「ボスダム自治会」そのものを堅持していても何らさしきわりはないということである。

50年代は「平和と民主主義」でもよかったが、60年代、第三期の今は、「反帝」でなければダメだといふ多くの人間は「現象的な運動の左傾化」そのもののうちに「意識形成」を夢見、それに「反帝」を外部注入すればよいと考える全くの大衆運動主義者ないしは情況主義者でしかないものであり、彼らはその思考の過程に於て、「組織の形成」の問題を、(b)「運動の形成」の問題とを論理上、二重写しにとらえているのであり、彼らのもとでは「運動の崩壊」が「組織そのものの崩壊」につながつてしまふという安保プントのある二重敗北が拡大再生産されるであろうことは全く自明のことである。

我々は指導部の指導性の問題を、「情勢」の変化に客観主義的にゆだねてしまつてはならない。「平和と民主主義」でしかない大衆運動を、どのようにして「反帝」にまで高めていくのかという問題は「運動の現象的な左傾化」のうちに解消してしまつたり、「戦術のレベルアップ」のうちに二重写しにされてしまつたりしては絶対にならぬのである。それはまさにそれを指導する、(a)「党の上からの大衆の組織化」の問題なのであり、組織化していく上での(b)「政治方針」の内容の問題なのである。すなわちそれは「反帝」という言葉の抽象の問題ではなく、具体的な「党派の政治主張と、「組織戦術」の問題であり、現在の我々にとっては「組織された暴力」と「国際主義」の内容の問題なのであると考へなければならぬ。

すなわち、今、我々に要求されていることはまさにこれらの思考方法の再度の逆転と、新たな運動論、組織論の構築でなければならないのである。



第二部

第一章 レーニン組織論の原則

ここで我々が追求すべき課題は、これまで述べられてきた様々な、主体的総括や自己批判を媒介としつつ、①「今後我々が組織論、運動論上で如何なる立場をとつてゆくのか」ということの明確化である。その場合我々が内容として追求している事は、②「今後我々が如何なる視点でもって大衆運動を組織化してゆくのか」ということであり、更には、それを基礎としつつ、③「如何にして党を強化し、発展させてゆくのか」ということである。そこにおける我々の理論的基礎としてあるもの、④「何をなすべきか」におけるレーニンの立場であり、我々が獲得せんとしているものは、そのような「何をなすべきか」におけるレーニンの立場の⑤「現在の場所的な適用の物質化ということ」と、⑥「その戦略、戦術論的な方向性における立場」である。

(一)「何をなすべきか」におけるレーニンの闘い

今後我々が取つてゆくべき運動論組織論的な立場を措定するにあたり、我々はそれをアナロジーとしてとらえるわけでは決してないのだけれどもまず一九〇二年のロシア階級斗争におけるレーニンの闘いと彼の立場の明確化から始めたいと考へる。「何をなすべきか」におけるレーニンの闘いは、ラボーチエ・デーロヤラボチエ・ムイスリに代表される経済主義者との闘いであり、それは時間的継起と空間的平存の問題をこえて、普遍化されるべき内容を多分にもつているからである。

①「何をなすべきか」から我々が学ぶべき第一の点はその第一章にかかれてある内容である。すなわちそこでレーニンは、自らが経済主義者達から「イデオロギー主義」のレッテルをはられた事を述べており、にもかかわらず、そこでは更なる理論斗争の強化を強調しているという点である。そしてその結語は、「社会主義が科学となつたからには、又科学として取り扱われなければならないこと、即ち学習されなければならない」なるエンゲルスの言葉である。

②更に続く文意は、「自然発生的な運動から生れるイデオロギーは、資本主義制度の枠をこえていくことの決してない、ブルジョアイデオロギーの一部である」なる主張であり、その強調は①前衛の手による社会主義的意識的な持ち込みの必然性と、③経済主義者の自然発生への押論を規定しているブルジョアイデオロギーと

の意識的な思想斗争の展開の必要性である。

戦術に関しては、経済主義者のそれは「過程としての戦術」であり、反対にレーニンの主張は、「計画としての戦術」である。

③次に展開されている内容は政治斗争と経済斗争の問題である。経済主義者の主張は、自然発生的な斗争の中で政治的抵抗(すなわち国家権力の弾圧やそれとの衝突)にぶつかつたならば、政治行動にでゆくというようなものであり、これに対するレーニンの主張は、革命的社民主義者の任務はこのように、「経済斗争に政治性を与えること」或は又、「組合主義的政治」にあるのではなく、全面的な政治的暴露の組織化にあるというものである。すなわち問題の提起が社民主義の立場から行われるということ、さうさの斗争がプロレタリアートの党によって指導されるということ、ここに階級性が保障されるというものである。テロリズムに関しては、それは経済主義と同じく大衆の革命的積極性の過小な評価であり、自然発生性への全面的な押論である、しかもそれは共に「最大の善意」をもってなされているのだとレーニンはいっている。すなわち「地獄への道は善意でしきつめられてゐる」と。

④その次は我々はここで最も注目すべき組織方針の問題である。レーニンの提起している内容は「中央集権的な戦術の党」(実体的にはそれは国外におかれた)、「労働大衆の同情と支持にとりまかれた広範な地方党組織」——「大衆」というものであり、それを媒介する全国政治新聞の設立である。ただそこでレーニンは、「戦術的な革命組織を、何か「人民の意志」派に特有なもののように考へるのは、歴史的にも論理的にも不条理である。なぜなら、どういふ革命的傾向にせよ、実際に真剣な斗争を考へさせざるなら、このような組織なしにはやってゆけない」(大月版レーニン選集一三四P)とか、或は又、「ただ確固として社民主義的政治を行う、いわばあらゆる革命の本能と志向とを満足させる中央集権化された「戦術」組織」だけが、運動を軽率な攻撃から予防し、勝算ある攻撃を準備することができ「(同一三六P)と言っており、その場合には「中央集権化されただけ秘密な戦術の党」とこの「戦術組織」が同一のものとして措定されているといえる。実体的に把握する場合の論理的な不明確さを残している。ともあれそこでレーニンの主張は、「プロレタリアートの自然発生的な斗争は、強固な革命家の組織に指導されたいあいだはプロレタリアートの真の「階級斗争」にはならない」といった一貫した内容にうらうちされておる。そこでは「一〇人の賢者は一〇〇人の愚者よりも」と内容にうらうちされておる。更に組織論のもう一つの問題として、その組織が地方的か全国的かということに関しては、躊躇なくレーニンは「集团的組織

者」という全国政治新聞の位置づけと関連させてその組織の全国中央集権性の必然性を唱えている。

この「何をなすべきか」におけるレーニンの主張は要約的には次の三点にまとめられる筈である。それは第一には、自然発生的な大衆の運動が、直接的に革命的斗争に成長するのではなく、そのためには目的意識性をもった人間の組織の介入が必要であること。第二には第一の内容に規定されて、それ故即自的な大衆の直接的利益のための組織よりも、階級斗争にとっては、目的意識性をもった人間の組織がより必要とされるということ。すなわちそのような目的意識性をもった人間の組織が独自に形成されていかねばならないということ。しかもその事から闘いは開始されねばならないということ。そして第三には、全国政治新聞を媒介にして、この革命家の組織が大衆組織と結合しつづつあみの目のように全国各地にその足を広げていかなければならないということ、以上である。そして更にそこにおける組織の形態はどのようなならば、先に述べた「戦斗組織」との関連もふまえてとらえかえすならば、

①「戦斗組織」の厳格に結束した経験と鍛錬にとむ中核集団
②「動労大衆」の同情と支持にとりまかれた広範な地方党組織
③「大衆」というものであり、
④と⑤は実体的には同一の組織を構成している。そしてこれらは全国政治新聞の媒介によって結合している。というものである。

このレーニン組織論の欠陥としては、第一に「プロレタリアートは自然発生的には組合主義的意識しかもちえない」ということから、「社会民主主義的意識」を外部注入しようとする、いわば徳利に水を注ぐような「外部」からの「意識」の「注入」という論点、第二に「にもかかわらずプロレタリアは「目に見えない、直接的でない利益に対しても起ち上る」ということ、その内的な根拠に対する論証抜き、第三に「目的意識の形成過程の客観的論理構造に対する洞察の欠落、第四に「戦斗的組織」と「党」との関連の不明確さ、等々が指摘されるかもしれない。(現にローザはそういった内容を批判している。)ただ、我々はそういった組織の形態は客観的情勢に規定されており、一九〇二年のロシアではこれだけの内容が提起されるならば革命運動の役に充分にたてたのである。という観点からこれをみて解放派のように、(まるで鬼の首でもとったように)このようなレーニン主義がスターリニズムの萌芽であるとわめきたてるようなことはしてはならない。我々の任務はレーニン組織論の現代的、場所的適用であり、その欠陥はそこにおいて止揚されるべきものである。参考までにこのようなレーニン組織論に対する、ローザの組織論をみてみるならば、それを、①「労働組合の斗争と政治斗争との社会主義的意義は、これらの斗争がプロレタリアートの認識や意識を社会化し、

(二) 党組織形態の理論的考察

「何をなすべきか」におけるレーニン組織論は、それを極めて図式的にとらえるならば①「戦斗組織」②「訓練された中核集団」③「先進的な大衆」④「即自的大衆」というようなものである。

①その場合②の「戦斗組織」においては、それを構成する人間の出身階層は一切問われず(レーニンの言葉によればそれは「こういう組織の成員に共通なこの意識」この組織の構成員がそれへの職業的従事者であるということの意味する)をまえては、労働者とインテリゲンチヤの間のあらゆる差異は全く消えさらねばならず、まして両者の個々の職業の差異のことは云々までもない(ということである)ことが原則であり、この「戦斗組織」が党的中核である。彼らは階級的、世界的的自覚を獲得した共産主義者である。共産主義者であるということは、彼らが共産主義を主体的実践的に受けとめ、当面のプロレタリア独裁と、より深遠な共産主義社会の創設を目指して、実践しているという意味である。

②「訓練された中核集団」と③「先進的な大衆」はレーニンの言葉によれば、「労働者革命家」と「目的意識性をもったプロレタリア」の関係として交流し合い、共通する一つの組織(できるだけ広範な大衆の支持に支えられた労働者政治組織)を形成する。この場合「労働者革命家」も又客観的には共産主義者として映ずるのであるが、彼が「党」を構成する一構成実態であることは前提である。だからその場合、彼も又「前衛」である。この「労働者革命家」と共に「労働者政治組織」を形成している。(この「労働者政治組織」は「組合」ではない。)(「目的意識性をもったプロレタリア」は、いわば「階級として組織されたプロレタリアート」のことであり、彼はこの場合は階級斗争を闘っているが「党」に所属してはいない。それ故彼は「党」の戦略戦術としてたてられた「共産主義」の内容はもってはおらず、「前衛」ではない。彼は、実体的には「戦場活動家」「先進的な大衆」として指定されるはずである。

③「即自的プロレタリア」とは、いわば大衆のことであり、現象的には「賃労働一般」をさす。彼らこそがまさに「現実的普通」であり、より本質的に定義するならば、彼らは「機械制大工業に従事する近代プロレタリアート」のことである。

④以上、①②③④四者の関係は、①②③④「階級として組織されたプロレタリアート」、①②③④「即自的プロレタリア」の関係であり、実体的には、①②③④「労働者政治組織」⑤「大衆」という形態をとっている。その時

プロレタリアートを階級として組織化する点にある。「社会改良か革命か」(⑤)「この日々の組合斗争、政治斗争の中で労働者変格主体は自らの構成する社会(ブルジョア社会)とまさつてひきあひこし、この過程の中で自らを社会主義的に訓練し、階級として組織して行く」、⑥「プロレタリア階級意識の社会化過程は、ひとつのダイナミクスな成長過程であって、外部内からの規律と意志のアップローチよりもむしろ、プロレタリア大衆自身の自己教育が、また主体的階級意識の創造的ファクターとしての行動が彼等を形成する」、⑦「党はこのダイナミクスな成長過程に戦術という形で介入し、これを媒体として運動を定型化し、究極目標へ向け集約する」というように、まことに一点突破全面展開的なものであり、自然発生的への全面的な押込がそこに見られる代物なのである。(しかも何と社青同解放派の主張と似ていることか)、これが大衆の自然発生的性と革命的左翼の目的意識性を全く混同した、戦斗的組主義とを象徴する論理ではないことはいまでもないことである。

更に外部注入論に関しては革マル等は、「党がプロレタリアートの内であって外にある」という関係を、党による「外からの意識の持ち込み」という形で、機能的に理解した結果であるというように批判をしているのであるが、⑧「党が一方に於て全国政治新聞として大衆の前に登場する(その場合には確かに新聞を媒介した全面的政治暴露の組織化として、確かに「外からの意識の持ち込み」である)ということ、⑨「大衆との接点をもった地方党組織に於いて、前衛として、一個の人間として、大衆の前に「党」が登場する」ということを、⑩「あるいは又、にもかかわらずその「前衛」は、「労働者革命化」としてプロレタリアートの内部にも現実に存在しているということとそれを混同しており、そのような混同は多分レーニンの云っている路線は「地区党一本やり路線」で「産別委」がないというようなことから図式的に考えて、その内容を二重うつして批判した結果生れたものであるはずである。

そんな批判をいくらやっても決してレーニンを乗り越えたことにならないし、レーニンは全然消耗もしないだろうというのが我々に共通する意見である。ともあれ次の我々の任務はこのレーニン組織論の形態論的追求から一歩進んだ、理論的意味の分析に向けられねばならない。そこに於いてより一層我々のとるべき方向性が明確化される筈だからである。

「労働者政治組織」は「戦斗組織」としても位置づけられ、又現実にもそのような機能果されねばならないのである。しかもこの「戦斗組織」は、他の「戦斗組織」との統一戦線機関になるので、労働者政治組織とそれ自身が、実際には大衆斗争機関によるわけである。

この「戦斗組織」の位置づけは、レーニンの言葉によれば、「我々の「計画としての戦術」は、いまずく突撃をよびかけることを拒否し、「敵の要塞の正規の攻囲」を組織するように要求すること、いかえれば「常備軍」をあつめ、組織し、動員することに全力を注ぐように要求することにある」という時の、「常備軍」にあたるものであり、或は又別の引用によれば、「突撃とは「常備軍」の攻撃のことである。民衆の自然発生的な爆発のことではないからである。まさに民衆が「常備軍」を踏みつぶし、押しつけるかもしれないからこそ、我々は「常備軍」の中に「異常に整然たる組織をもち込む」ための、我々の活動によって、ぜひとも自然発生的な高揚に「まにあう」ようにしなければならぬ」というときの「異常に整然たる組織」のこと、すなわち「組織された暴力」のことである。

更にこの「常備軍」、「戦斗組織」の果す機能に関して我々が指定しているものは、「この軍隊はひたすら全面的、包括的な政治的煽動をおこなうのである。すなわち、まさに民衆の自然力的な破壊力と革命家の組織的意欲的な破壊力とを近づけ、一体に融合させる仕事をおこなう」(引用ははずれも「何をなすべきか」より)、というように示されるところのものである。ともあれここでは①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿の関係を「前衛」
①「プロレタリアート」(階級)②「即自的プロレタリア」(大衆)③「大衆」④「大衆」⑤「大衆」⑥「大衆」⑦「大衆」⑧「大衆」⑨「大衆」⑩「大衆」⑪「大衆」⑫「大衆」⑬「大衆」⑭「大衆」⑮「大衆」⑯「大衆」⑰「大衆」⑱「大衆」⑲「大衆」⑳「大衆」㉑「大衆」㉒「大衆」㉓「大衆」㉔「大衆」㉕「大衆」㉖「大衆」㉗「大衆」㉘「大衆」㉙「大衆」㉚「大衆」㉛「大衆」㉜「大衆」㉝「大衆」㉞「大衆」㉟「大衆」㊱「大衆」㊲「大衆」㊳「大衆」㊴「大衆」㊵「大衆」㊶「大衆」㊷「大衆」㊸「大衆」㊹「大衆」㊺「大衆」㊻「大衆」㊼「大衆」㊽「大衆」㊾「大衆」㊿「大衆」

それと共に「党」の空間的発現形態としてある地区委員会(地区党)や、産別委員会、それが実体的には各個別経営細胞等を媒介して成立することによって、プロレタリアの内部に「前衛」という人間を通して、党を成立せしめる。ここから「党」はプロレタリアの内部にあって外にあるという関係が生じるのであって、何も「社民」という政治組織、ないしは「スタ党」に介入するから、「党」がプロレタリアの内部にあるわけではない。「党形成の方法論」と「党組織形態論」を混同すると「学生解放派」のような存在理由のわからない政治集団が生れてくる。解放四号における「労働派マルクス主義」「内部での党建設論と学生解放派の存在には、実際には何の理論的結節点もない。彼らは「社青同」を名のっているけれど

も、実際には「社青同」という政治組織の内部に在るわけではない。かつてに自分達で名のつてただけである。すなわち彼等は社青同内部の公然たる分派等ではなく社青同外部の散々たる政治集団でしかない。しかも彼等は全員が社会主義的中間層たる学生という小ブルであり、彼等がいろいろの「存在と意識の二元論的構造」そのものの体現者である。彼らは社青同を自称するだけの、しかも形態的には「歪められたレーニン主義」に移行しつつある。既に組織論的に破産した「没落小ブル集団」でしかないのである。

⑥「即自的プロレタリア」から「プロレタリアート」への組織化は、「党」前衛が
大衆運動を指導する過程において、「即自的プロレタリア」が「対象的認識活動を
行いうる能力」を身につけることによって獲得されていくところのものである。そ
の場合一般的には「全面的政治暴露」の組織化が、前衛の任務として指定されるの
だが、より具体的にはそれは、「即自的プロレタリア」自身の政治的実践と、その
対象的認識が「即自的プロレタリア」自身によって、主体的にとらえかえされるこ
とをまたねばならないのである。すなわちそこにおいてはそれは、単なる外部注入
の問題ではなく「即自的プロレタリア」自身によるマルクス主義政治理論との主体
的な対決の問題となるのであり、「前衛 党」の任務はそれを如何に媒介し介入す
るのかという点に求められるのである。媒介し介入するということは、それによつて
「即自的プロレタリア」が勝手に自己展開していくということではなく、「前衛」
党」が彼に「政治主張」を与えることによって「彼に論理を与え」、「彼を組織化
する」ということをいみしている。その場合には与えられる論理そのものが「党派
の戦略戦術に規定された党派の共産主義の内容」であるのだから、彼は「即自的プ
ロレタリア」から「プロレタリアート」へと階級として組織化されると同時に、内
容的には党の論理を物質化する形で実践を行う党的存在になることになる。すなわ
ちそこでは、階級形式そのものが分派斗争なのであり、「政党による大衆の組織化」
と「党形成」、或は又「分派斗争」とは、同一のことを別のことばでいっているにす
ぎないのである。(だから、「分派斗争に勝てない」ということは「革命を指導で
きない」という事を意味しているのでもある。)

「現実の階級斗争は改良斗争として闘われる」ということは真実だが、この「改
良斗争」の中で「階級斗争」を闘う人間を創造していかないならば、革命を指導す
ることはできないということであり、革命を指導するためにはすべての分派斗争に
勝利していかなければならないということなのである。すなわちそこから必然的に、
運動を作る闘い、斗争戦術と、組織を作る闘い、組織戦術の問題が登場する管であ
る。

識を否定させ、それとは質的に異ったものである共産主義的意識——向自的意識を
大衆に獲得させてゆくという作業である。

⑦だが「革命的前衛」が闘いの過程で多量の共産主義者を産出するということは、
実はそのことによって、その物質化された形態としての「権力」を市民社会内部に
作り出していくということであり、更にはその闘いの過程そのものの中で、現実の
資本制社会における矛盾そのものを止揚していくということである。だからその作
業は一般的に「人間の産出」過程としてのものとらえてはならず不連続の絶えるこ
とのない連続革命の過程でなければならない。(「革命」はこれがわからない。彼等は、「革命
的プロレタリア」としての我々が「大衆運動を展開する」のは、ただ革命的プロレタリアを生産し、
組織的に結集するためにこそするのである。——AIST七号一六六Pとすら言明する。なんと
るセクト主義、或は又、疎外された前衛主義。この不連続の「現状変革の闘い」、すなわち
「既成の社会的諸関係そのもの変革の闘い」があるからこそ、その闘いを媒介にした我々自
身の「自己変革」、「主体変革」も可能なのであり、決してこの逆なのではない。「対象変格」
↑「自己変革」とはこの事である。だから対象との関係ゆき、「主体変革」を云うの
は実は全くのヘーゲル主義でしかないのである。

⑧右に述べた作業の遂行のために、まさに「革命的前衛」は「改良の果実の獲得」を提起す
ることにより、又実際に、そのような「改良の果実」の獲得の爲の闘いを組織化することによ
り大衆運動そのものを指導していくわけであるが、大衆が実際に目的とする「改良の果実」を
を獲得するためには、大衆は何処かの組織、その場合には「大衆斗争機関」に結集して闘うこと
が必要となるのである。

⑨この場合「革命的前衛」が指定された闘いの内容として把握しておくべき方針
と、その方針を担うための「戦術」は三つである。

①一つには多量の共産主義者の産出のための闘いの組織化であり、そのための方針
とそれを担う「組織戦術」である。②第二には現実の大衆運動そのものの勝利のた
めの方針とそれのための「斗争戦術」である。③そして第三には権力実態、ヘゲモニ
ーを例え過渡的ではあっても市民社会の個々の部分に確立していくための「組織
戦術」である。これはブルジョア権力打倒のために恒常的に追求されねばならぬ
ものであり、最終的には「物質化された社会的団結」として、プロレタリア自己権力打倒のた
めには恒常的に追求されねばならないものであり、最終的には、「物質化された社会的団結」
として、プロレタリア自己権力の最高の形態としての、「工場評議会」「ソヴェトとして集
約されていくべきものである。現実の闘いの中ではこれらの三つの戦術は分離的に別々にたて
られるのではなく、その差別と同一性の認識の下に「革命的前衛」によって統一の把握に基
づいて方針化され物質化されていかねばならないものがある。

④とところで個別経済斗争の進展はどの様な結果をもたらすのかというならば、

⑦「即自的プロレタリア」が対象的認識活動を媒介しつつ、「階級として組織さ
れるプロレタリアート」へ、なにかなく「革命的前衛」へと自己を高めていくため
には、彼を規定している物質的諸関係そのもの、そこにおける価値法則そのものと、
不連続に対決しつつあることが必然的である。その場合彼のそのような価値判断は下
部構造としての物質的諸関係に常に影響されつつあるわけで、この価値判断そのも
のが止揚されてしまわなければならない。(黒寛の頭の中の逆立ち、その価値判断
そのものが、資本制の生産判断からプロレタリア的価値判断へと観念的に自己否定
によってのりうつれると考えている点にある。その場合には意識が存在を規定する
ということになる。)

だから「即時的プロレタリア」が階級として自己を高めていく場合には、彼は直
接的に価値法則が働き、彼は私的労働力商品所有者であることを根拠として貨幣そ
のものが、彼自身が生きていくこと自体を規定してしまう「経済斗争」の中でより
も、より对象的に国家とすべての階級の相互関係の中で問題をたてることのできる
「政治斗争」の中での方が、より直接的に「価値判断に規定されない対象的認識
活動を行うことができるのである。

階級の政治的意識は、ただ外部からだけ、つまり経済斗争の外部から、労働者の
雇主に對する関係の圏外からだけ、労働者にもたらすことができるのである。この
知識をくみとって行くことのできる唯一の領域は、すべての階級と階層の国家およ
び政府に對する関係の領域、すべての階級の相互関係の領域である。」「(何をな
すべきか)」

それ故、一般的には「前衛」党」の任務は「即自的プロレタリアート」を政治斗
争の中で組織化することを第一義とするべきである。

⑧この組織化そのものの論理を、個別斗争における「指導部」と「大衆」の関係
としてとらえかえてみるならば、それは次のようなものになる。

①一般的に云って一つの個別斗争に於ては、大衆一般は、その個別課題に於ける
「改良の果実」を目的として斗争に決起してくる。何故ならば彼等がもし「即自的
プロレタリア」であるならば、彼等は皆、彼等が賃労働者であるという物質的諸関
係の同一性を持っており、その限りに於いて、直接的な物質的諸要求の同一性をも
っているからである。

②これに對し、「革命的前衛」は、その個別課題を媒介にし、それを獲得す
る闘いを指導することによって、自らが市民社会内部にその強固な組織を確立して
いくことを最終的な目的とする。具体的にはそれは大量の共産主義者を、闘いを指
導し組織することによって、産出させることである。それは大衆の自然発生的な意

それはまず第一に、闘いの進展につれ、斗争の勝利のために必要とされる「斗争戦
術」現実の大衆の意識との間が、一方では次第にかい離し始るといふことである。何
故ならば、「体制の枠そのものを前提的に認め」て、その中で改良的要求を克ちとう
とする大衆の意識と「体制の枠そのものを否定する」ことから出発する革命的前衛
との間には、その出発点において自ら質的差異があるからである。

この時、「革命的前衛」が運動の左傾化の追求の中に「大衆」の「意識変革」の
問題を解消するならば、大衆の分解はより急激化し、必ずや「革命的前衛」の孤立
化となって現現するのである。

しかももしその斗争の勝利をあくまで追求していこうとするならば、要求される
「斗争戦術」はますますレベルアップされていかねばならず、「大衆」そのものが、一般的に
改良的要求のためだけでは、斗いきれない事態が発生してくるのである。すなわち
その時大衆は、「自分がそうしてまで闘う意義」そのものと意識内部で対立して
いるのであり、そこでは、闘うことの必然性が革命的前衛によって論理として与え
られねばならないのである。そしてそれは、「政治主張として大衆に与えられるの
であるが、既にその時大衆は自己の世界観、人生観そのものと全面的に対決しなけ
ればならなくなっているものであり、そのような世界観、人生観の転換に介在できるもの
は、革命的マルクス主義の全体系、理論的全内容だけなのである。大衆はそこで革
命的マルクス主義理論との主体的対決にまで至るわけであるが、その対決に至るまで
の客観的過程そのものが、革命的前衛によって「組織戦術」として指定されていな
ければならないのである。

但し、これらの闘いの客観的過程は、その闘いのおかれている社会的状況そのも
のに規定されているのであり、その社会的情况によつては、大衆の直接的な諸要求
が、ブルジョア支配との非和解的な全面的な対決に至る場合もある。その場
合には経済斗争は政治斗争と全面的に結合し、まさに権力斗争として闘われること
になるのである。

③ これ等の個別斗争における組織的な構成は、大衆の目に映ずるものとしてある
のは、△自治会執行部▽△大衆斗争機関▽△大衆Vという形態である。ところ
で実際の闘いの中では、△自治会▽は機能せず、△大衆斗争機関▽が現実上の斗争
組織実態として、大衆を集約することになるはずである。その△大衆斗争機関▽を
担う中核体は、△行動委員会▽として組織された△社会学同+先進的大衆▽の部隊で
あり△BUND▽の構成員は △社会学同+先進的大衆▽の中で指導的役割を果た
すことになる。

だから大衆の目的は、中大における「学連会」、明大における「全学斗」、早大

における「全学共」として、すなわち単なる大衆斗争機関として映ずる組織そのものは、実際には先のレーニン組織論における、⑤⑥⑦の三者を、すなわち、
⑧「労働者革命家」とレーニンがよんでいる中核集団、⑨「先進的大衆と一応よばれている向自的プロ、ないしは階級として組織されたプロレタリアート」、
d「即自的大衆」の三者を、その組織の内に内包しているものであり、ここでは⑧の機能を果たしている「社会学」までが、⑨の「BUND」と共に党を構成している。党構成実体であるということになる。(このてんは、「何をすべきか」における組織そのものは弱干異なっている。)

混乱をさけるために再度、レーニン組織論のそれと、適用された実際上の我々の組織の構成とを比較し、あてはめて考えてみるならば、③の労働者革命家はBUND政治局Vを意味し、④の労働者革命家ないしは訓練された中核集団VはA各細胞におけるBUND構成員Vであり、⑤の先進的大衆ないしは階級として組織されたプロレタリアートVの部隊がA社会学Vであるということになる。⑥の即時的大衆VはいまでもなくA学生大衆Vの事である。その場合、⑦の位置にあるA社会学Vは直接的にA党Vに加盟してはなくても、A党Vを構成している「下部機関」であるのだから、果している機能そのものとしては、「前衛的機能」なのであり、その意味ではそれは、A前衛的集団Vであるといってもよいはずである。そうすると、A社会学Vが⑧の位置にあたるのなら、たとえばそれと一語にA大衆斗争機関Vの中核部隊としての機能を果たしているA行動委員会Vは、何にあたるのかということに関しては、これからはA社会学VそのものがA行動団体化Vしなればならないのだから、A社会学V+行動委員会Vはどちらも⑧の位置にあたる。すなわちそのどちらもが、⑧A階級として組織されたプロレタリアートVの部隊なのだといわなければならないことになる。

労働戦線におけるA労働者政治組織Vにあたるものが、学生戦線でのA社会学Vなのであり、「前衛+階級」の関係は、A BUND構成員+社会学Vの関係として、そこにも求められるはずである。
⑩ ところで、我々はこれまで主にレーニン組織論の論理と構造を追求してきたのであるが、マルクスにおけるその革命論と組織論の内容は如何なるものであったのだろうか。

ここで我々はそれらに対する若干の検討をおこなっていかねばならないであろう。まず第一にマルクスが、産業資本主義段階に生きたという彼の歴史的立場に規定されてもっていた「革命観」というならば、それは世界一國同時革命の立場にたつたのであるが、「党宣言」や「一八五〇年三月、共産主義者同盟への中央委員会の挨拶」の上から言えば「さしあたりは一國民的な斗」であり「各国のプロレタリアートは、もちろんまず自分の国のブルジョアジーを片づけなければならぬ」(党宣言)のである。

さてこのようなマルクスの革命観を物質化させた「組織論」に関してであるが、マルクスは「一八五〇年の中委の挨拶」では次の様に述べている。まず「中央委員会」に関しては「できるだけきびしい中央集権化こそ、真に革命的な政党の課題である」。「中央委員会」が極めて重視していることは、その指導員が、新しい革命が差迫っている度その瞬間に、つまり労働者の政党ができるだけ組織立てられ、できる意見を一致させ、できるだけ独立してかからねばならないというその瞬間に「出かける」ということである。「個々の都市町村は『中央委員会』との結合を強め、労働者の政党は唯一の強固な支えを失い……このため全体の運動においては完全に小市民政党的支配下におちいた。」更に「共産主義者同盟」に関しては「労働者はとりわけ『同盟』は、公認の民主主義とは別に労働者政党の自主的な公式、非公式の組織を打ち建て、あらゆる都市町村を労働者協会(大衆組織か?)の中核とするという方向に活動しなければならぬ。」「労働者の「政党組織」ないしは「組合」に関しては「(労働者)が、民主主義的小市民らに力をもって立向い得るために特に必要なことは、労働者が「組合」として自主的に統一され組織されていることである。」「迅速な編成、少くとも「労働者組合の地方的結合の迅速な編成が「労働者政党」の強化発展のために最も重要な点の一つである。」

これらの内容から判断できることは、一八五〇年代においては「共産主義者同盟中央委員会」V「共産主義者同盟」V「労働者政治組織」V「労働者組合」というものが、まさにレーニン組織論におけるA中核集団V「労働者革命家集団」V「先進的プロレタリアート集団」と同一の機能を果たしていたということである。その場合、マルクスの段階における労働者組合はレーニンの時代よりも階級的な性格を強くもっていたのであり「労働者の政党」と「労働者組合」は、殆ど同一の内容の組織であったはずである。そして、具体的には「共産主義者同盟」は「労働者政党」の中に入っ活動するのであるからその関係はレーニン組織論における「訓練された中核集団」が「先進的大衆階級として組織されたプロレタリアート」と共に労働者政治組織(戦闘組織)を形成するという関係と同じなのであり、その構成は、いってみれば「レーニン主義的」でなければならない。②「共産主義者同盟中央委」V「共産主義者同盟」V「労働者政党」V「大衆」の関係は、それ故④「戦闘組織」V「+」V「労働者政治組織(戦闘組織)」V「+」V「大衆」という構成と同一であり、それは③「党的指導者」V「+」V「階級」V「+」V「大衆」の関係である。マルクスはそ

「抄」に見ることができるところのものである。マルクスはそれらの中で次の様に述べている。「労働者革命の第一歩は、プロレタリアートを支配階級に引き上げること、デモクラシーを闘いとることである。」「(党宣言)」

「プロレタリアートはその政治的支配を利用して、ブルジョアジーからすべての資本を次第にうばいとり、あらゆる生産用具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、そして生産力の量をできるだけ急速に増大させる。」(同)

一方、我々の関心、我々の使命は、革命を永続的にすることにある。永続的にいつには多少とも所有しているすべての階級を主権から追い出し、プロレタリアートが国家権力を占有し、プロレタリアの連合が一國ばかりでなく全世界の主要な國々において進んでいった結果、プロレタリアどうしの競争がこれら諸國で止み、少くとも決定的な生産諸力が労働者の手に集中するに至るまで「挨拶」、これらからみればマルクスの描定していた革命の進展の内容は「民主主義憲法の獲得」から「労働者階級の独自の組織化を媒介にした労働者階級による政治的支配の創出」その同時的・世界的な発展への永続的な発展」というものであり、その過程には「ブルジョアジーとの統一戦線の形成による貴族階級の打倒」ということも当然指定されているわけである。だから、それは、その永続革命は「ブルジョア革命」に対して与えた「永続革命論」、即ち、後進國革命における二段階戦略の否定「ブルジョア民主革命を副次的に含むプロレタリア革命」という特殊な一段階戦略とは、その内容を異ならせるものである事を知らなければならぬ。マルクスの永久革命は「貴族階級一掃のためにはプロレタリアートはまずブルジョアジーを勝利させることから出発するのであるが、同時に永続的に、ブルジョアジーの打倒を追求していく」という内容なのである。「この段階でプロレタリアが闘う相手は、その敵ではなくて、敵の敵であり、すなわち絶対王政の残滓、地主、非工業ブルジョア、小市民である。このようにして、歴史的運動全体がブルジョアジーの手に集中されている。かちとられる勝利はいづれもみなブルジョアジーの勝利である。」「(党宣言)」このマルクス永久革命論と、トロツキー永続革命論の差異は、産業資本主義段階におけるマルクスと、古典的帝國主義段階におけるロシアのトロツキーという、歴史的場所の立場の相異に基くものである。なお「世界同時革命」ということを、国際ブルジョアプロの対決という図式に当てはめ、あたかも「世界国家」の革命であるかのようにとらえている集団もあるが「プロレタリアートはまず政治支配を手に入れ、国民を代表する階級にまで向上し、自らを国民として確立しなければならぬ」(党宣言)のであるから「ブルジョアジーに対するプロレタリアートの闘いは」 || 「内容はともかくとして、

ここで「共産主義者」を党宣言において、「理論的には、プロレタリア運動の条件歩み、及び一般的结果を見とおす点でプロレタリアートのほかの集団にまさっている。」「人間と規定しているわけで、その任務「さしあたっての目的」は「プロレタリアートの階級への形成」ブルジョアジーの支配の打倒「プロレタリアートによる政治権力の獲得」であると言っている。なお「戦闘組織」に関してはマルクスは「挨拶」の中で、「労働者は武装し、組織だてられていなければならない。遂石銃、小銃砲、そして弾薬による全プロレタリアートの武装を直ちに実施しまた労働者に向けられた昔の市民軍の復活を阻止しなければならない。しかしその阻止ができな場合は労働者は独自に「プロレタリア軍」として自ら選んだ長と自ら選んだ独自の参謀部を以て自らを組織し、国家権力の命令下ではなく労働者によって打ち立てられた革命的な都市町村参事会の命令下に入るように努めなければならない」といっている。そしてその場合その「プロレタリア軍」の構成、実体が「労働者政党」V「労働者政治組織」によって担われたであろうことは容易に推定できる。

ところで社青同解放派は解放11号においてこのようなマルクス組織論を「前衛」「プロレタリア党」「大衆」の関係としてとらえているのであるがマルクスのいうこの「プロレタリア党」とは「労働者政党」の事であり現実の我々の運動の中では「社会学」「全学連」「反戦青年委員会」が具体的にその役割を果たしているところのものであり、我々のいう「労働者政治組織」のことである。
そして社青同解放派は何を血塗ったのか、この「前衛」と「プロレタリア党」との関係が、マルクスにならば「共産主義者同盟」と「国際労働者協会」の関係だといっているが「共産主義者同盟」ははじめ「正義者同盟」と名のつたが、一八三六年に発足していわゆる「ケルン共産主義者裁判」のあと一八五二年に解散したのであり「国際労働者協会(第一インター)」とはこの十二年後一八六四年に発足して同七四年に「したものである」。

ここから潰れも明らかなように、マルクスにとりこの両者の関係は決して理論的に指定されたものではなくむしろ全く偶然的な関係なのであり何でもかんでもマルクスの名を持ち出せばかっこうがつくと考えるのは勝手だが、「病膏言に在る」でここまでくると「マルクスもびくびくするであろうと我々は考える。マルクスの組織論そのものは、原則的には現在の我々のそれと同一の構造を有しており、それ故当然それは、レーニンに引きつがれているものであるということが、ここでの結論である。

① 我々は ③「戦闘組織」V「+」V「訓練された中核集団」V「+」V「先進的大衆」V「+」V「即自的大衆」というレーニン組織論の構成実体から ④「党」V「+」V「労働者

政治組織（戦斗組織）V—④大衆Vという党組織形態を指定してきたわけであるが、この「地区党」の問題は、更にその空間的構成の問題として、或は又、党の主体として「地区党」の問題や「産別委」の問題を内容上含んでいるわけである。それ故我々はここでは、この「地区党」ないしは「産別」に関する理論的説明を行っていかねばならない。

④まず第一に「地区委員会」や「産別委」を構成する実体的基礎と、それを媒介にした両者の関係であるが、「地区委員会」を構成するもの基礎が「各労働者細胞」であるということ論理上の出発点とするならば、そのような「各労働者細胞」は同時に又、その産別特殊性によって、それ自身同時に「産別労働者委」の構成分子として指定されなければならない。これをふまえた上で「地区党」の空間的現実的構成は次のようなものになる④A政治局V—A地方委V—A都道府県委V—A地区委V—A細胞V④B政治局V—A中央産別委V—A地方産別委V—A細胞V。

ところで我々が何故「地区党」の問題と「産別委」の問題を論理上統一的に把握されねばならないものとして指定しているのかというならば（それが革共同第三次分裂の論争上の中心環になったものであることもふまえて）、次のような例が実際上あるからである。「青医連」なるいわば産別委的な、しかも全国的機関があるが「青医連」の「地方委員会」である。すなわち「地方産別委」であるところの「地方委」は同時に又「共産同」としての「地方委」の役割も果しているのである。それ故ここでは「地方委」と「産別地方委」は実体的には同一のものであり、「共産同」地方委員会」とは「共産同青医連委員会」地方委」と同一のものである。それらの点をふまえるならば「地区党」か「産別委」か等という二者択一の図式の中に問題をたてるとはできないのでありその両者の関係を統一的に実体的に把握するべきであるということになるはずである。すなわち例えば現段階における我々の組織的任務が「産別委」の組織的確保にあるのだとしても、この闘いは地方的産別委の確保と強化とつた過程を同時にたどらねば有効的になしとげられない筈だからである。ただこれはあくまでもベクトルの問題としてであるが「武装したプロレタリアートの生産管理」の図式の中に日本革命の型を考え「政治斗争による生産点でのゼネスト」をその端緒として追求するならば、我々が、方向性として重要視すべきものは、どちらかといえば「産別委」の強化と拡大でなければならぬといえるかもしれない。

⑤、地方委員会とは、それぞれの地方のすべての党活動を掌握し指導する、党の地方的指導部の事であるが、この地方委員会はそれ独自の機能をもつべく地方機関誌等を発刊し、その内部に地方的党組織確立のための労対、学対をもっている必要がある。産別地方委は直接にはこの地方委の指導下におかれる。この地方委には中央委員目との連絡、地方内での斗争の指導といった役割を果たすための「常任

以上深くふれることはここではできないが、ともあれ「加入戦術と統一戦線戦術を結合して闘う」という革マル派の破産は、この経営細胞の設立とその横への拡大の問題を、党そのものへの介入へとおきかえることによつて、実際は頭の中でだけ共産党に介入することしかできなかつた点に求められるべきである。なお参考までに述べるならば、「本党に必要とあれば、いつでも分離しうるほどの組織的な分派」だとか、「日本社会党内に徹底した共産主義分派を生み出す」とか、かつて解放四号で高々と宣言していた解放は、社民に放り出されてもまだ「分離」を開始しようとしなないのであり、或はそう考えていても実際にはできないのであり、その意味で全く革マル以上破産した存在である。社会党のようなザル組織を利用して革命をやるという夢想にふけるよりは、或は又、どうせそれが破産するなら解放派も又共産党内分派位追求したらどうだ。論理としては、その方がよほどすっきりしているのだから。

我々は次の章においてより詳しくこの党形成の方法論について展開する。

第二章 レーニン組織論の具体的実践的適用

(一) 党形成の方法論に関して

我々が党形成という場合、その根底に基本的視点として横たわっているものは、①実践を媒介にしてプロレタリアを政党内組織するということ、即ち、②市民社会において現象してくる様々な諸矛盾を不断に止揚するという現状変革の運動の中で大衆を階級へと組織するということである。その場合、それを最も有効になすための方法として次の三つが、即ち、③党そのものが社民、スタ党にもぐり込むか、④あくまで別党コースでいくか、⑤或は又、一方における介入と他方における独自活動を追求するかの三つが、それが最も革命にとり効果的であるかという問題として登場してくる筈である。④は四トロ、解放派といった社青同へ介入する党派が現在とっている路線であり、⑤は論理上我々がとっているものであり、④はかつて黒寛が「革命的マルクス主義とは何か」「組織論序説」の中で展開した内容である。それはまさに、「反スタ」が革命戦略にまであがめられた時、スタ党解体の指針として、組織戦術そのものとして採用されるべき方法であり、論理上これのない反スタは、ただ自分達の気持を言っているだけの、或は又、感性としてだけの「念仏左翼」。「坊主左翼」となってしまう筈である。最も、革共同両派は既に実際上そうなってしまうのである。

我々はここではトロッキーの死後分裂に分裂を重ねてきたいわゆるパブロ派トロ

、即ち「戦軍」が是非とも必要である。何故なら中央委が全員逮捕されるようなことがあっても、この地方委は官憲の弾圧をぬって地方的な闘いを維持しつづけなければならぬからであり、そのためには政治警察との闘いにたえ、非合法活動を続けられる訓練された人間が必要だからである。この地方委は基本的にその地方に包括される種々の労働者学生細胞の代表者の中から選出され、それによって構成される。

⑥ 地区委員会は地方委に所属するのであるが、東京、関西を除いては未だこの地区委員会は細胞そのものと同じの場合が多いのであり、地区における党指導部の役割を果しているものは少いはずである。それ故多くの地区委は地区的指導部と細胞の二重の役割を果さねばならない。原則的にはそれは地方委と同じく、その地区（地方）に属する諸細胞（経営細胞、学生細胞等々）の一切の活動を、中央委の方針ののっとって指導する地区の党指導部である。

⑦ 産別委は所屬する経営の規模が大きければ大きい程、地方的な枠をこえてますます全国化するから、その指導に中央委が直接あたる必要性も増大するはずである。この産別委は現実にプロレタリアートの内部に確立される党組織として、真に党の生命であり、最も重点がおかれるのでなければならぬ。その場合その増大とは、とりもなおさず経営細胞の増大として、党の地区的確立にも役立つはずである。この産別委も又、地方委と同じくそれぞれの機関誌紙を発行し、常任活動家がそれらを集約する必要がある。ただこの産別委は現実の労働組合内に位置するが故に、いわば現場主義におちいりがちであり、多く組合内執行部をしめる民間に對する戦斗的部分としての機能しか果しえないのであるが、それがもし本党に産別委として機能せんとするならば、独自の組織活動が、独自の活動が必要になってくるのである。そしてそのような活動が現実に進展するならば、その活動は真に社民、日共をその足許から突き出す活動として、一切の中間的諸潮流の解体につながるものである。かつて反帝反スタの、鼻祖黒寛は、その「組織論序説」において、「反スタ、パブロ修正主義反対の二正面作戦をバネとし、独立活動を共産党内斗争と結合させて、新しい前衛党を結成して闘う」と大風呂敷をを広げたが、実際には共産党に介入しても何の活動もできないのであり（やれば必ず除名される）、彼の思い描いていたようなことは、この産別委、経営細胞内での組織化と、それによる社民、日共の解体によって始めて実現されることである。加入戦術に何か意味をもたせようとする党派の多くは、皆この党が経営細胞内に設立されるということ、「党がプロレタリアートの内であつて外にある」ということを、無理に忘却しようとしているのにすぎない。そして例えば社民内部への介入にしても、実際にそれを最もよく実行しているのは、論理上は別党コースを歩んでいる我々なのである。この問題に関してこれ

ツキストの、しかも既にその破産そのものが歴史的に証明されつつしているところの、加入戦術、没入戦術に関してはあえてふれず、この⑦に示される党形成論に對する批判を「反スタ革命観」そのものに対する批判として展開し、それをもつて我々のとる方針の、まさに正統性と正当性を立証したいと考える。

「反スタ革命観」を批判することが、なんで⑦の党形成論を批判し、しかも、それを止揚してゆくことになるのか、その内的な連関構造が解らない人間のために一言せざるならば、先述したように「反帝反スタ世界革命戦略」という理論的基礎がある事によつて⑦の路線は採用されるのであり、しかも、そのように、組織戦術として物質化されないならば、「反スタ」そのものは言葉だけのことでしかなくなつてしまふという関係に、両者が本来的にはあるからである。（その意味、我々にとっては既に組織戦術において破産した革共同両派の、なにかなく中核の反スタなど突いでしかない。）このようね「反スタ」の実際の組織戦術における破産は、「反スタ革命戦略そのもの」のあやまりに規定されていると考えるべきであるし、我々がこれから展開するのは、この「反スタ革命戦略」の抽象的無内容の対象化とその批判である。

(二) 反スタ派のスターリニズムの位置づけとその組織戦術

五十年代後半から六十年代前半の一時期、「反スターリニズム」に関して、この抽象的無内容を言葉如何に定義するか「反スタ」論者達は悪戦苦斗してきた。「反スタ」の鼻祖と普通思われる黒寛の云っていることも、所詮はトロッキーと対馬忠行を足して二で割つたようなことではしらない。だがともかくも黒寛は「スターリニズム」を定義した。我々としてはやはりそれを問題とせざるを得ない。「スターリニズムとは世界革命の挫折によつて孤立化された連官僚性国家に発生したところの、本質的に虚偽なる反革命イデオロギーである」（「組織論序説」）「スターリン主義、すなわち「一國社会主義」「イデオロギー」（現代における平和と革命）「極端に中央集権化されたピラミッド型の龐大な官僚機構とぬきさしならぬ官僚主義が、スターリン主義の直接的な現象形態である」（「スターリン主義とは、内外にたいする強大な軍事力と政治力とを背景として一國社会主義を實現しようとしたエセ・マルクス主義である。それは、プロレタリア世界革命の實現というマルクス主義の原則ぬきの、或はかかる展望から切断された一國プロレタリア革命、これを絶対化するにより一國社会主義建設を自己目的化し、かつそれから必然的にうみだされる諸欠陥を「社会主義」ブロックの単なる量的拡大（いはゆる

る衛星国の形成)によって糊塗しようとするエセ・レーニン主義である(ハ)。 「フルシチョフ主義は一国社会主義としてのスターリン主義の枠内において、それを社会民主主義化した形態にすぎない(ハ)」。 「スターリン主義と毛沢東主義とは本質的な同一性をもっている(ハ)」。 「スターリンはプロレタリアート独裁期という過渡期社会を社会主義社会そのものと等置するまやかしを通して、社会主義に於けるマルクス理論を實質上破壊した(ハ)」。 (ハ)等、

これらの内容からつかみ出すことが出来るものとして、「スターリニズム」とは、要するに「定式化された革命戦略としてある一国社会主義イデオロギー、二段階戦略、平和共存路線」を意味することになる。これに対する「反スタ」はそれ故、「我々の打倒対象はスターリン主義官僚(とその政府)であり、そのイデオロギー— 国社会主義と平和共存」である。それらの煙幕と壁で戦闘的労働者や下部党員が眠り込まされている。この現状を打破するために、革命的共産主義者は当面加入し獲得戦術をとってたたかなくてはならない。「そのために我々は、現段階においてまずスターリン主義の否定を前面におしだすべきである。」(平革)という内容で表現されるのである。

要するにスターリニズムとは「疎外された反革命イデオロギー」のことなのである。少くとも黒寛はそういっているのである。そして「反スタ」とは、この「疎外された反革命イデオロギー」を批判する運動に他ならない。字面どりに理解すればそうならざるをえないのである。(だから革マル派はかつて社青同解放派に「イデオロギー批判運動」と批判されたが、それも全く自明のことと云わねばならない)そしてこのイデオロギー批判運動のための組織戦術が先(ハ)の路線として示されたものであり、それはより具体的には、「イデオロギー斗争や政治斗争の戦闘司令部は外に置き、この司令部のうちだす斗争方針を一方では大衆運動に適用してそれを革命化し、他方ではスタ党や社会党の内部へ直接もち込むことにより、それを全体として変質せしめる方向へもっていき、新しい共産党を提起せしめる。すなわち加入戦術と独自行動に基ずくなだれ込み戦術である。」(革命的マルクス主義とは何か)という形で提起される。

さて我々にはこれに対する批判を、こういった「反スタ世界革命観」に対する批判を行わなければならない。

(ii) 「反スタ革命観」の全くの誤り

① 黒寛は「スターリニズム」とは、いわば「疎外された反革命イデオロギー」打倒によって、全世界的な規模でのプロレタリア政治権力の樹立によって、初めて可能であると我々は考える。その場合の我々の基本的な視点は、「反帝国主義」であり「反修正主義」である。それはどちらが先かという問題ではなく、同時に進行されるべき問題である。ただ我々はその場合にもあくまでも、「一切の疎外の廃棄は疎外そのものを生み出した現実」界のそのものの廃棄によって、はじめて可能である(ドイテ)というマルクス主義の基本的命題を守り抜く道を、歩まんとするだけである。なんとなれば、「この国家この社会が、宗教という(スターリニズムと読め)倒錯した世界意識を生みだすのは、この国家この社会が倒錯した世界であるためである」(法哲批判)と我々は考えるからである。

② 現実の「労働者国家」の諸政策を、基本的にはマルクスが「ゴータ綱領批判」で展開した、過渡期社会の一般法則(例えば擬制的労賃制の採用といった)と比較類推し、あるべき姿になっていない嘆いてそれをスターリニズムと規定する小ブルがいる。或はそれを全く逆に「コンミュニオン型国家の四原則」の一つから例えば人民武装ということが、現実の「労働者国家」のあるものの中に採用されていると欲し、それをもって直ちにその、「労働者国家」を「社会主義国家」と規定するウルトラマンがいる。(「社会主義社会」に「国家」があるのだろうか)。そのどちらがあまりである。過渡期社会という未完の過程に、完結された定義を与えようとする如何なる試みも、全く無意味である。それ等は直接的な事実から出発し、それに本質としての定義をあてはめるとい現象主義的な対応論である。結局それは(まるで黒寛のような云い方になるが)、普遍的本質論(原理論)と、それに規定された特殊論(段階論)や個別論(現実形態論)との間の区別と同一性に無自覚であるということに基づき、素朴反映論の立場である。しかも特に前者の場合のそれは、現実の帝国主義に包囲され、世界交通から分断された「労働者国家」を、あらまほしきものとして自分の頭の中に描かれた第三カテゴリーの世界と二重写しして批判している、という点で最も犯罪的である。(我々はこういう宇宙的世界観の持主が来るべき決定的な時点で、突然に精神主義の泥沼にはまり込み、決起の前にヒッピー族となって故郷へ帰ってしまったりするであろうことを、今から予測してはならない。)

③ ところで我々は、先にいって言えば我々の立場は「反帝国主義」「反修正主義」であると書いた。それでは何故我々は「反帝、反修」とスローガン化しないのであるのか。丁度あの「反帝、反スタ」のように。それ等のことは我々にとり「帝国主義の批判」とは何かということすなわちその内容そのものに対する把握の仕方の問題としてあるのである。先に第一部第二章においても若干展開したとおり、

であるといっている。それが「疎外されたイデオロギー」であるなら、その発生は、或は又その存在は必ず「疎外された物質的基礎」、「疎外された物質的諸関係」の存在に規定されている筈である。しかもそのような「疎外された物質的基礎」の存在は、単に歴史的な過去にそのようなものがあつたということではなく、現在もなおそのようなものがあつてつづけているということである。でないとい「スターリニズム」とは結局は「物質的基礎を失ったイデオロギーが一人歩きしている」ということ、「イデオロギーが物質的諸関係を逆規定し、人間の生活実践全般を逆規定している」ということになってしまふからである。それはまさにヘーゲル主義そのものである。いくら逆立ちした革共同でも、「スターリニズム」をそんなものとしてとらえている筈はない。

それではそのような「疎外された物質的基礎」の存在とは一体何であろうか。歴史的な過去のそれとしては、「世界革命の挫折」、「ロシア革命の孤立」ということがあげられる。それはしばしば言われて来た問題である。しかしそれはあくまでも歴史的過去の事例であり、いくつかの労働者国家が、まがりなりにも現に存在している、現在での主要な理由にはなり得ない。

④ 一つには「労働者国家」といってもあくまでも「過渡期社会」である。そこには資本制の生産諸関係が貨幣そのものの残存を媒介にして「出来高払制」といって形で存続しており、同時に又、プロレタリア以外の階級が、農民や小商品生産者が、プロレタリア独裁に敵対するものとして存在している。しかも貨幣そのものは、全世界的な規模でのプロレタリア権力の樹立がないかぎり、残存する資本主義国家との貿易のために、世界交通人間交通そのものの維持のために、一朝一夕に廃止することはできない。(それ故)「過渡期社会」は当然、矛盾としての資本制的な物質的諸関係を、それに規定されたブルジョアイデオロギー発生を根拠を、その内に孕んでいる。世界交通から分断された社会主義生産の限界は国内を疲弊させ、打ち続く外部からの帝国主義の反革命攻勢は、プロレタリア独裁に敵対する「過渡期社会」内部の非プロレタリア階級を、必ずやブルジョアイデオロギーのもとに結集させる。ところが「過渡期社会」においてはそれ等の非プロレタリア階級の利害を代弁する政党が不在である。「共産党」は内と外からブルジョアイデオロギーの攻撃にさらされねばならない。それが「共産党」内に浸透するならば、それは必然的に「修正主義」を発生させる。我々にとり「スターリニズム」とは何かしら気分的なものではなく、そのような「修正主義」のことである。だからその止揚はその物質的基礎そのものの打倒によって、「過渡期社会」を包圍する帝国主義そのもの

ーニンは「帝国主義の批判」に関して、かの「帝国主義論」において次のように書いている。「帝国主義的イデオロギーは労働者階級の中にも浸透している」。「帝国主義は、労働者のあいだでも特権をもつ部類を分離して彼らをプロレタリアートの広範な大衆からひきはなす傾向をもっている」。「労働者階級が万里の長城で他の階級からへだてられてはいるわけではない」。「帝国主義の批判というものを、われわれは、社会の種々の階級がそれぞれ一般的イデオロギーとの関連において、帝国主義の政策に対してとる態度というふうに、広い意味に理解する」。「この点でもっとも危険なのは帝国主義との斗争は日見主義に對する斗争と不可分に結合されないなら、空虚で偽りの空文句にすぎないのとを、理解しようとのぞましい人々である」等々。あらゆる意味で現代の世界は過渡期世界である。かつてレーニンの時代には各資本主義国内部でブルジョア階級に對立する「階級」としてのみ存在していたプロレタリアートは、今ではたとえそれが歪曲されたものであつたとしても、自らを「国家」として組織している。世界革命の「根拠地」となりうる「労働者国家」の成立である。

そしてこの「労働者国家」も決して万里の長城で他の帝国主義国家と隔てられてはいるわけではない。ブルジョアイデオロギーの流入は不可避であり、「過渡期社会」としての「労働者国家」内部での階級斗争の発生は必然的である。そこには必ず「帝国主義国家」と妥協しようとする「修正主義」が発生してくるのである。そしてこの帝国主義と妥協する修正主義発生の物質的基礎は帝国主義の存在そのものにある。すなわち修正主義は帝国主義の存在そのものを基礎としたブルジョアイデオロギーの一変種である。現象としての修正主義の批判は、本質としての帝国主義の批判である。修正主義の物質的根拠は資本の存在そのものである。それ故、我々は修正主義の批判を帝国主義の批判としてとらえなす。それは帝国主義論におけるレーニンの立場である。レーニンは「反帝国主義」「反カウツキー主義」の立場である。しかしレーニンはカウツキーの批判を帝国主義の批判として捉えている。だからレーニンは「反帝国主義」の立場としてカウツキーの立場を批判した。我々もまた同様である。我々にとりスターリニズムの批判とは、それが「官僚による剰余労働の搾取」「党内分派の禁止といった様々な現象形態をとつたとしても、結局は帝国主義との思想的妥協という立場に立脚することにより、それが成立するものであるが故に、「帝国主義の批判」としてとらえかえされねばならないに他ならない。すなわち帝国主義との思想的妥協の産物としての「一国社会主義建設可能論」は過渡期社会としての労働者国家に流入したブルジョアイデオロギーそのものに他ならないのであり、その意味でそれは資本制的疎外の外化された姿なのである。過渡期世界

における労働者国家は外的に資本制的価値法則に規定されており、それ故、ここではそれに対する不断のイデオロギー斗争が「労働者国家」内部の階級斗争として組織されていかなければならないのである。そしてそれが「イデオロギー」である限り、我々の任務はその物質的基礎そのものを打倒する立場に立つこと、すなわち「反帝国主義」の立場に立つことなのである。

そのような立場に立つ限り、「反スタ世界革命戦略」などててくるはずはありえない。「イデオロギー」そのものと格闘せんとする如何なる「思想界の巨人」も彼が「影そのもの」と格闘せんとしている限り、所詮は「現代のナルシス」に終始する他ない。疎外された物質的基礎との格闘を忘れ、その反映、その外化された事象でしかない「イデオロギー」そのものとの格闘を如何に志向しても無意味である。水にうつった月を掻き消す為には月そのものを掻き消さねばならないからである。

我々の革命戦略はあくまでも「反帝国主義世界革命戦略」でなければならず、「反スタ革命戦略」等せいぜい共産党の日和見主義（実は2段階戦略に規定されたそれなりの革命運動）や、裏切りを大衆に向けて怒鳴るだけのことしかできないのである。我々が先に(1)の路線としてとらえた、既成党（日共）への介入、そこでの独自活動と、外部での独自活動の結合、すなわち「加入戦術と統一戦術の結合」なる組織路線が、現実には破綻してしまっていることの本質は、「反スタ革命戦略」そのものの破綻の故なのであり、我々の歩むべき道は必然的にこのような「念仏左翼」との訣別の道、経営細胞の拡大、独自活動による大衆の組織化に媒介された、「反帝国主義」、「国際主義」の道となるのである。他人の種で相撲をとろうという一切の方針は、本格的な階級斗争の高揚の時代、革命か反革命かがとわれている

「第三期階級斗争」の時代には無縁な代物である。それ等の一切が論理に先行する現実によって次々と破産させられていくことは全く自明である。そこで我々は次に、(2)に示される路線の実践上の破産の根拠を、現実に対応した問題としてとらえかえしてみたいと思う。

② 先にも述べたように(1)の路線は、(A)共産党内分派の結成、そこでの独自活動と、(B)スターリニスト党に反対する一切の反対派勢力との統一戦術、或は又統一行動の追求、その統一行動の過程における徹底したイデオロギー斗争の貫徹、とを結合させつつ闘うものである。黒寛はこれをパロ派トロツキストの加入一本槍戦術に対するものとして提起しており、「加入戦術と統一戦術を結合して闘う最も革命的な組織戦術」と自負していた。ところが現在ではそのどちらもが、加入戦術のほうも、統一戦術のほうも、破綻してしまっている。その現実的破綻根拠である。

(1) 共産党内分派の結成という問題に関しては次のことがいえる。

共の批判をイデオロギー的に学習会で行えばよいという問題ではない。その運動の存在そのものが彼らをして日共と結合させている物質的基礎である。すなわちそこでは、もともとはイデオロギーによって作り出された運動が逆にイデオロギーそのものの存在を物質的に保障しているのである。それは別の言い方をすれば「イデオロギーの存在は運動の存在によってしか証明されない。」ということである。大衆は即自的にはイデオロギーの存在を知らない。運動の存在が彼らをしてイデオロギーのもとへ結集させるのである。

我々が日共を打倒しようとする場合も同様である。「外の運動が内のイデオロギーと対決する」と我々は考へる。組合内左翼反対派（労研、社研）の独自活動が、運動そのものによってイデオロギーを打倒していくということである。それがスタ党を打倒していくための我々にとって唯一の方法である。（革マルは我々のこの立場と全く逆であり、イデオロギーを打倒すれば運動も打倒されると思ひ違ひしている。だから、それはイデオロギー被却運動である。）そしてそのような我々の路線が組織的に表現されるならば、それは(2)のコース別党コースとして表現されざるをえないはずである。我々は黒寛のような位置づけに基づく共産党への加入なるものを嘲笑をもって否定せざるをえない。真理は我々の路線にしかない。他はみんなダメである。

(2) 反スタ統一戦術に関しては我々も決してそれを否定するわけではない。三派全学連というのは統一戦術全学連である。その場合、我々の組織路線に於ける統一戦術機関は学生戦線では社会学同であり、労働戦線では現在のには労研、社研である。それらは総称としては「労働者政治組織」である。ところで統一行動の原則は、(3)政治課題の一致、(4)共同行動、(5)批判の自由である、といわれている。我々は現在、その統一行動の対象を、「反帝第3潮流」として指定している。それは国際共産主義運動に於ては「ゲバラ・カストロ路線」として総称されているものである。この統一行動と、統一戦線とは異なる。統一戦線のためには少なくとも統一された組織的表現が必要である。黒寛は反スタ統一戦線を叫んだが、その組織的表現はまだ実現されたことがない。ここでも黒寛の夢は破産しているのである。反スタ統一戦線と(1)の3派と革マルが共同行動を行うことではない。それはあくまでも統一行動である。そしてこの統一行動すらも実現されない。ブルジョア権力に肉迫するためよりも、自党派をふやすための統一行動に依るバカがいる筈はないからである。

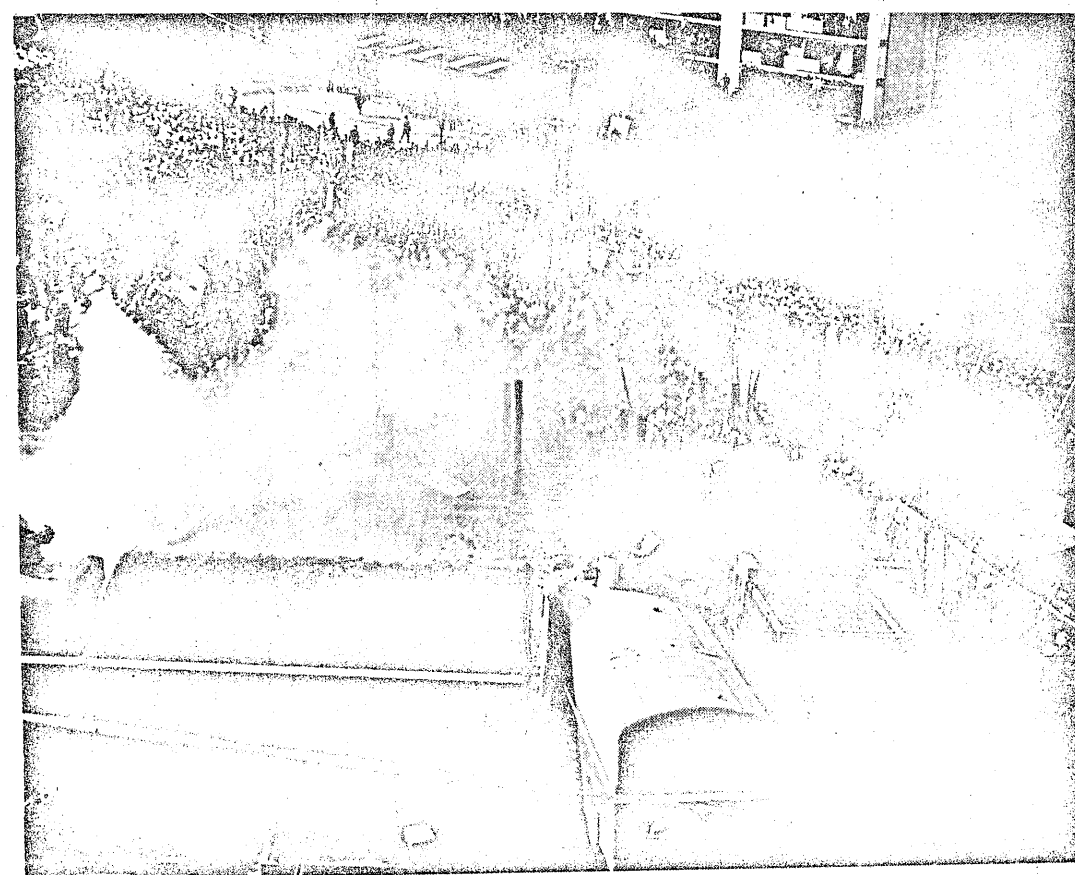
共産党内分派の結成のためには、秘密黨員を作るということから開始されねばならない。具体的にはそれは相当優秀な黒寛派の人間が極秘のうちに共産党入党することから開始されるということである。だがたとえ入党しても何もしないうでじつとしていようなら意味がない。彼はただちにオルグを開始し、日共綱領の誤謬を他の黨員達に認めさせ、そこで独自活動を行わなければならないのである。黒寛はこの共産党内独自活動を重視している「加入戦術」が単なる「没入戦術」になってしまふことを回避するために、最も必要なことであるといっている。その独自活動とは、実践上の方針や戦術をめぐるイデオロギー闘争の形態をとる筈である。

ところで、共産党内でそのようなイデオロギー斗争を行うということは、実は分派活動を、党内分派斗争を行うということである。スタ党は党内分派を禁止している。それを行った人間は直ちに、統一と団結を乱す分裂主義者として査問され、しかるのちに除名される。

除名された人間が日本共産党を名乗ることはできる。「解放戦線」や「日本のこえ」はそうした。しかし実際には日本共産党自体とは何の関係もない。ただ名乗っているにすぎない。そこでもう加入戦術なるものはあえない最後である。共産党に加入したところで実際にはなんの意味もない。ましてや党内分派の結成、独自活動など、頭で逆立した人間の妄想でしかない。

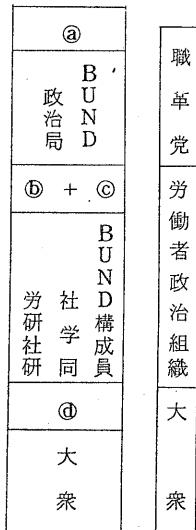
(3) 共産党が機関の主流派を占めていく組合があるとする。その組合の内部に我々のケルンを作ること容易である。我々は現在それを「労研、社研」方式として組織戦術化している。それは経営細胞が中心となった学習会組織の大衆的表現であり、しかも単なる学習会組織ではなく、労働者政治斗争組織—労働者政治組織である。この「労研、社研」が経営細胞を中心とし、組合内左翼反対派の役割を果たすことは容易である。そして我々が日本労働運動内部で主流を占めていく過程、すなわちそこからスタ党を叩き出していく過程は、この「労研、社研」に結果する労働者が組合内で主流を占めていく過程に他ならない。それが労働運動で果たす役割は、学生運動に於ける自治会反主流派の果たす役割と、いわば同じである。そしてこれが確立され強化されていくということは、スタ党を外部から、しかし実はプロレタリアートの内部から突きくずしていくことである。黒寛は、労働者はスタ党によって「眠りこまされていく。」と言っている。それは一体どういう意味だろうか、彼らが日共を支持するということが、あるいは日共の黨員であるということはそのこと自身を對象化してとらえていようといまいと、彼らが日共綱領を支持しているということである。日共綱領の誤りをあばき出し、それを粉砕するためには、我々自身の手による運動の創造が二段階戦略に基づく、日共の運動に対する我々の運動の創造が前提である。それは日

我々の現在の統一戦術は3派全学連、地区反戦として実現されているのであり、これそのものが我々にとってのスターリニズム党打倒の方法であり、物質化された既成党と別個の党建設の方法である。



(一) 党組織論と我々の組織

先に我々は ②A 職革 V—③A 労働者革命家ないしは訓練された中核集団 V—④A 階級として組織されたプロレタリアート V—⑤A 即自的プロレタリア V の四者の関係を ⑥A 職革党 V—⑦+⑧A 労働者政治組織 V—⑨A 大衆 V の関係として組織論的に位置づけた。これらの現実的な組織的表現は現在の



という形をとっている。このうち「労研・社研」として組織されているプロレタリアートは新たに設置される「青年同盟」(仮称)に再組織され、それは名実共に「労働者政治組織」として大衆の前に登場する筈である。我々が最後にここで言うのは、これらの現実の各組織の「組織された暴力」と「国際主義」の視点からの、とらえなおしの作業、再度の組織論的な位置づけの確定である。その場合我々が基本的な立脚点として持っている視点は、或るべき組織の型、或いは又党の型が来るべき革命の型を規定するというような考え方(黒寛の考え方)はそういっただけである。(ここではなく戦略に指定された革命の型が、我々が作り出すべき組織の型・運動の型・党の型を規定する、即ち戦略が戦術を規定し、組織をも規定するという考え方である。我々はそれ故にこそ世界革命戦略の規範となる現代世界帝国主義論の確定を執拗する)だから黒寛が組織論序説で提起しているような「前衛党組織論の五つの原則」(即ち①党構成主体がプロレタリアの主体として自己を確立している。②戦略・戦術が正当である。政治指導に柔軟性がある。③労働組織が、前衛組織として確立されている。統一戦線戦術を正しく駆使する。④完全なる批判の自由と完全なる行動の統一すなわち内部理論闘争が保障されている。⑤革命実践における統一を破壊しない分派組織を結成し斗われる党内闘争が保障されている。というようなものもそれが単なる原則の提起、あるべき組織の一般的規定に停っている限りは(それはそれとしてとらえ返して見る必要があるとしても)実践上は何の有効性も持ちえないものでしかない)と我々は考えるのである。というのは、実際の革命運動はそのよ

我々は民間基幹産業、或いはまた官公労に於る労働運動の主流派を追求する。だが恐らくはそれが獲得されないうちに来るべき決定的なブルジョアジーとの対決を、我々の勝利のうちに闘いとらねばならないことを我々は宿命づけられている。危機の到来が必然的に我々を日本労働運動の主流派に押しやる等と考えるのは全くの夢想ではない。そのような時期に、大衆がささって棍棒をもってブルジョアジーの軍団に襲いかかるとするのは勝手だが、そんなことは歴史的に一回もなかつた。それら一切は現在時点から我々が如何にして大衆を組織するかの一点にかかっている。ブルジョアジーの軍団を打倒するためには、組織された我々の暴力を、我々の戦略で、武装されたプロレタリア軍団をたつた今から我々が組織化することから始めねばならない。その時の基本的視点が「国際主義」であり、それが「組織された暴力」と呼ばれる戦略的闘争部隊の建設のための唯一の「導きの糸」である。

かつて第一次大戦後のロシアにおいて、迫りくる破局を前にした労働者大衆の自然発生的暴動を「ソヴェト」の政治権力にまで高めるのにポリシェヴィキが成功したのは、第一に労働者階級以外の他の諸階級、デラクセインテリ、没落小ブル、貧農、戦線逃亡兵士の戦斗性に注目し、それをソヴェトに組織する中で軍事的ヘゲモニーを確立したためであり第二にこの諸階級の結合を、就く、兵士と労働者の結合を、自国政府打倒を旗印にした国際反戦闘争によって媒介させたことに起因している。同時に又、経済ストを続発させながら結局社民政府に敗北し、ナチスにも敗北していったドイツ共産党やスパルクス団の敗北は第一には経済闘争の徹底化、戦術の左傾化をプロレタリアの階級への形成と二重写しにしてとらえたためであり、第二にはフライコールとしてあったルンプロや小ブルの破壊力を組織できなかったこと、先にはそれを社民へ、後にはそれをナチスへ集約されてしまったためであり、第三にはドイツ帝国主義の植民地戦争を国際反戦闘争として大衆の中に組織化できなかったことに起因している。

我々はそれらのことをふまえて、来るべき革命の型と我々の任務を大体次のようなものとして指定する。

第一に決定的な経済危機の到来以前に政治闘争や反戦闘争を全人民的課題として斗いぬける戦略部隊を組織された暴力として組織化すること。この政治闘争部隊は戦争部隊として訓練をうけ、同時に党の宣伝の機能を果たすための徹底した思想教育をうけること。しかもこの部隊は小ブル・ルンプロを主力とし革命的プロレタリアと独立資本の両方に対して両面的な嫌悪を抱くファシズムの温床として中間層をその供給源とすること。それは地区毎に組織され、地区党を中心に結集すること。

第二に小ブル・ルンプロを主軸とした戦闘組織の確立と共に、民間基幹産業・官

うな一般原則の羅列を問題としていたのではなく例えれば彼が項目②で提起している「戦略の正当性」ということの正にその内容をめぐって論争が斗わされているのであり、黒寛はそもそも戦略とは何か(彼は「戦略とは実現されるべき革命の目的と手段の理論体系、即ち革命の本質規定・革命実現の具体的な一法則、前衛組織の個別的な一般的な一般法則をさす」といっている。この抽象的内容)と原則一般を指定するための下向はしてもその現実的な適用「歴史的課題を行為の現在において場所的に実現する」ための上向となると全然わからなくなるのが常である。(ちなみに彼が「平革」で行っている日本の権力規定・戦略の指定は次のようなものである。

「現代の日本資本主義は確かに現在では政治的独立を勝ち取っているが経済上軍事上実質的にはアメリカ帝国主義に隷属化されている。(P15)「アメリカ帝国主義の世界支配のための特殊の構成部分をなす各国資本主義の支配階級」(P14)「サンフランシスコ条約により形式的に独立に与えられた日本資本主義国家権力は安条約などで経済的・軍事的にはアメリカの帝国主義ブルジョアジーに完全に隷属化されている。まさにかかる日本国家権力—アメリカ帝国主義それに隷属した日本独占ブルジョアジーとの「同盟」によって維持されているところの日本資本主義国家権力—の打倒を我々の戦略とする」(201頁)「いまや独占資本主義が国家資本主義という形態で表われているという事は資本主義の枠内においてははるがブルジョワ国家権力を通じて資本制生産の基本的矛盾が部分的に解決されつつあるということだ」(50・51頁)「アメリカ帝国主義者に政治的・軍事的・経済的に隷属化された日本独占ブルジョアジーの国家権力」(37頁)等々。平革の発行は一九五九年三月である。それだけ全くこれが発行された時の宮頭のほくそ笑む顔が手に取るようだ。我々がここで行わんとするのは、それ故、我々の戦略に規定された我々の組織の現代的な任務の明確化の作業である。

(1) 革命の型と党の任務(党の確立)
ドイツ30年代敗北の経験は我々に大衆組の社民支配を、内側から打ち破る準備を20年代に怠った結果のみじめさを教えた。

そこでは、好況を支える既成指導部の労組支配が、好況条件の喪失によって崩壊していくというロシアの類推は一切通用しなかった。不況がもたらした解散選挙にもとづく中間政府の成立は、革命的左翼の大衆運動を社民が議会主義的に集約していくという型が議会制民主主義国家の政治過程に普遍的な法則性として成立していることを示している。我々がこの型そのものを突破しない限り必ずや我々はドイツやスペインの過去の撤を踏むことになる。

公労での細胞建設を押し進めること。それらは差別委員として組織され、プロレタリアート本隊の獲得に努めること。それらの部隊は、基幹産業での反戦スト・政治ストを指導することを任務とし、そのためのフランクシヨンの確立を非法活動にも堪える形で追求すること。その場合あくまでも独自活動を堅持すること。すなわち社民とは別個の独自の大衆Mの形成を政治闘争・反戦闘争を主軸にすえて、行なうこと。

第三に党は国際部を増強し、世界単一の党を追求する中で、国際共産主義Mとの結合をはかること。その場合の結合の対象は現的にはゲバラ・カストロ路線に代表されるものであり、この部分との反戦インテリの創造を通じてソ連共産党の打倒・中国共産党の変革を追求すること。それらは「帝国主義の反革命に対する労働者国家の擁護」の立場からなされること。

第四に革命の型として我々が想定しているものは地区拠点工場のストライキを武装したプロレタリアートが防衛する中で地区党を軸に地区の拠点工場の連合を地区ソビエトとして組織化し、この地区ソビエトから「組織された暴力」を街頭へ送り出し、中央政治権力闘争を闘いぬくというものである。その場合この「組織された暴力」の闘いを大衆が支持することが条件となるがそれは金融寡頭制の暴力支配ファシズムを粉砕することによって可能であり、それと同時に革命の宣伝が革命のビジョンを明確に提示しつつ、議会主義に対する原則的批判を大衆の中に浸透させておくことが条件として前提的に済まされていなければならないのである。ともあれ現実のMは一旦は議会と選挙を重要な舞台たらしめずにはおかないであろうし、労働者人民の武装は軍事力そのものによって中央政府の正規軍を粉砕するということよりもあくまでも労働者人民の示威として機能するであろうことを確認しなければならぬ。これらのことから我々は再度我々の現在の任務を確認し、その方向性を組織論的に位置づけなければならない。

(1) 中央政治局と国際部

中央政治局は全員職業的革命家で構成されることが前提である。それはまさに革命Mの中核であり党のイデオロギー的政治的な核である。その任務として設定されることは①戦略的指針の提起、綱領活動の具体化②イデオロギー上の全内容の掌握と指導③党派関係の掌握、大衆闘争の政治的指導④機関組織活動の点検、方針の提起⑤情勢把握・方針提起⑥その他諸々のことの一の政治判断。etcである。それらの内容は中央政治新聞・通達等を通じて全同盟的に貫徹された物質化される。そこにおける人間は一切の事象を全世界的な視点から、しかも常に未来から現在を規定する立場でとらえること。その意味で頭の中に座標を組める人間であることが条件である。近い将来この中央政治局は全く非法化されるであろうし、その時にはここで

の活動はいわば完全な地下活動となる。

国際部は全世界に戦略的基準をもった生きた交通形態の生産のための国際共産主義M内部における我々の外化である。それは単一世界共産党結成（それは具体的には国共産主義Mの戦略的統合のための統一戦線の結成から開始される。）のための各国との連絡を保障すると共に、大衆組織、ことに全学連等によって推進されるべき国際反戦インテリの組織とMの指導機関として機能する。だからそれは四トロ系のような没主体的な外国革命Mの単なる紹介、あるいはそれへの拝誦、中共派のような単なる出先機関的性格のものではない。それは中央政治局と密接に結合しておりその構成員は職革であるべきである。

(ロ) 地方委と地区党

地方委は全国を9地区に分けて構成される。東京は中央政治局下におかれる。この地方委の統轄下に各地区委がおかれる。各地区委は地区の各略胞（経営、学校、個人等の一）を政治指導する。それは地区の党的指導機関である。それらを構成する人間は各地方、各地区から選出されるが、地方委の場合は最低一人の職革を必要とする。地区委は現在各地区反戦に細胞を送りこむことを、経営細胞の設置と共に主要な任務とする。地区反戦はそれが統一戦線機関である限りにおいて、将来的に設立されるであろう地区ソビエトの母胎となるはずである。その場合、各地区委の任務は各地区反戦における主流を現在の時点から形成することである。経営細胞内の労研社研は青年同盟へと再組織されると共に、この各地区委の指導下に入る。産別委に關しても、地方産別委は地方委の指導下に入る。

(ハ) 産別委と労研・社研

産別委は産業別の各党の指導機関であり、その構成のうちに労研・社研を含む。労研・社研の構成員は大衆化される青年同盟の構成員となると共に、地区反戦に結果し、地区反戦の実体的担い手となることを任務とする。反戦青年委は公労協青年労働者を主軸に、中小零細労働者を副軸に成立しているが、中小零細青年労働者はすでに地区反戦として革命的左派の手によって再組織化されつつある。これらの青年労働者が党に組織される場合には、今後は青年同盟として組織されるわけである。その場合にはバンド構成委は地区党そのものを実体的に担う役割を果たすことになる。それは労働革命家としてバンド構成委が純化されることを条件とする。同様に産別委においてもその実体的担い手はバンド構成委にまかせられなければならない。産別委はそれによって労働者政治組織（青年同盟）を指導する党的機関として確立される。労研・社研は青年同盟へと再組織化されることにより職場における政治斗争機関を再度設定しなおさなければならない。地区反戦に結果した労研・社研は地区「突撃隊」である。だが青年同盟・社学同はあくまでも革命のための必要性から再組織化されるのであり、それは分業化されたブルジョア軍の軍隊とは異なりあくまでも自分の頭脳で思考し判断する一個の革命的主体の集合体であることが原則である。そのような原則が貫徹されず一般的に大衆化されるならそれは、もともとが小ブル、貧プロを構成要員とするが故に、「パンチザン」どころか、かのドイツ革命の「フライコール」のようになってしまふのであろう。ここでは、「組織性」「規律」が何よりも獲得されなければならない。組織性と団結が、プロレタリア軍にとつての唯一の革命的武器である。もともとヘルメットとゲバ棒で革命をおこせるほど世の中は甘くない。そこにプロレタリアの主体性が、理性的立場を獲得した「プロレタリア的理論」が介在しないならば、それらは単なるゴロツキ集団に転落する。そのようなプロレタリアの主体性や規律は、実践を媒介にして、マルクス主義政治理論との全人格をかけた対結を媒介にして、初めて獲得されるものである。それ故、その構成員に問われるものは不断の自己対象化の作業と、現存する市民社会、ブルジョアの諸関係のすべてに対する徹底したイデオロギー斗争である。

(ニ) 青年同盟・労研社研

労研社研は青年同盟へと再組織化されたならば、労働者政治組織として全国的指導体制を確立しなければならない。その青年同盟の全国指導部は、中央政治局の労働者組織委員会（労対）の指導下に入る。青年同盟は原則として単産労組ごとに細胞を作り、各細胞は地区委の指導下に入る。青年同盟も亦、BUNDと同様に全国を9地区に分けた地方委を設立するが、その指導にはBUND地方委があたる。各単産内の労研社研の構成員が青年同盟の構成員となった場合、必然的に新な労働者政治斗争機関の設置が必要となるが、それは恒常的なものとしてよりも、一課題一斗争委員会方式で行われたほうがよい。そのことによって職場活動家の結果機動的役割を青年同盟そのものが果してゆくようにしむける必要があるし、青年同盟そのものの行動委員会化はそういった方向性を追求しない限り、決して克ち取れない苦である。それが戦斗組織として確立されるにつれ、BUND構成員はますます理論的指導を強化しなければならない。各職場単産の青年同盟は地区反戦の構成実體となるべく、何らかの形で地区反戦に加盟しなければならぬ。それと共に、それは単産労組ごとの地区党への加盟を貫徹し、社会党総評の統制機能を末端から突崩していかなければならない。その場合そこに指定される方向性としてあるのは、中小零細労組にヘゲモニーを確立し、組合を我々の政治路線で固め、そこから公然たる組合として反戦に加盟し地区党をいわば横から国際反戦斗争に抱き込み、公労協、自治労等の主力拠点での反戦斗争の公然たる持込みを左翼的に補充していくというものである。青年同盟は最終

委と共に地区反戦を大衆斗争に於て、小ブル・貧プロに立脚した「組織された暴力」の結集体とするために努力しなければならない。この地区反戦が将来的に地区ソビエトへと発展するためにには拠点工場細胞のこれへの参加が前提となる。それを担うのは産別委の指導による労研・社研、将来的には青年同盟の任務である。地区反戦はそのことによつて「組織された暴力」とプロレタリアート本隊との結合の環とされなければならない。産別委はそれが全国化するならば全国産別委として中央政治局の指導と直結されなければならない。その場合にはこの産別委を指導する為の専門化が、職業革命家は是非とも必要となる。

(三) 「組織された暴力」の確立（労働者政治組織）

産別委、地方委、地区委等は、直接的に「党」を構成するものである。労研・社研・青年同盟・社学同等は、「党」を構成する一部隊であるが、「党」そのものではない。それはむしろ「党」に指導された別個の全国組織として指定されるべきである。反戦青年委、全学連を直接的に構成しているのは、この社学同、青年同盟の部分である。それ故これ等は労働斗争機関化されてゆく必要を強くもっており、それは党が徹底的に純化されてゆく事と共に進行させなければならない。今後大衆はこの青年同盟、社学同に直接結束して闘うことになる。そうなることによつてこれらの機関は、一層統一戦線機関としての性格を強くしていく。社学同、青年同盟の戦斗組織としての確立は、党に直接指導された大衆運動を保障し、大衆の階級への形成を保障することになる。組織論上は、この青年同盟、社学同は前衛ではなく、「階級として組織されたプロレタリアート」先進の大衆」ということになるが、實際上それが大衆運動において果たす役割は極めて先駆的であり、前衛的である。それが大衆斗争機関化されていくことは、その進行に連れてますます党との結合を深めていかなければならないということである。青年同盟の党との結合は単産毎のBUND構成員の設立によつて始めて可能となる。それらのBUND細胞員は各地区委をBUND構成員の設立によつて始めて可能となる。それらのBUND細胞員は各地区委を或は、産別委を構成し、中央政治局と直結することにより、戦斗組織「青年同盟」社学同を指導する。その場合その指導のうちに実践での戦術指導、党派斗争での政治指導、大衆宣伝、理論指導の一切が含まれる。社学同・青年同盟は今後特殊に軍事工作化されてゆかねばならない。その場合には、街頭行動に於けるヘルメットの色から、服の型、旗の形までがテーゼ化される必要が生まれて来る。大衆は多くその行動力に対する恐れ、そのカッパよさから結果を開始するものだからである。現存的には社学同のヘルメットは赤で統一されている。この戦斗組織の確立の中で、そこにイメージ化されているものは、一八四八年二月革命での「自衛軍」、七一年革命での「コミューン軍」ロシア革命での「赤軍」等々であり、或は又、ナチスの的には「BUND戦斗団」というような名称を付すべきである。

(四) 社学同

社学同は現時点における「組織された暴力」の中核である。しかしながら学生はインテリであり、国民階級のイデオロギーを直接反映するが故に、今後の分解が最も激烈化するであろうことは自明である。従つて社学同の任務は、社会的ヘゲモニーの分解に伴う諸階級の動向に振り回される学生大衆の中で、なかならず学生運動（右も左も含めて）の中で、あくまでも革命的左派のヘゲモニーを貫徹すること、に求められる。既に社学同の全国組織化は一定程度完了しており、今後問われるのはその拡大である。学生運動が階級斗争の中で果せる役割は主に三つある。一つはイデオロギーの排出、二つには各専門家（特殊技能を備えたスペシャリスト）の排出、そして第三には全体としての学生運動の果す役割りとしての機動戦、街頭政治行動である。今後の社学同は反戦学同化されると共に、よりラジカルな第三の面の伸長が要求される。それは具体的には武装準備までも含む軍事訓練である。各大学内において徹底して大衆化された社学同は同時に軍隊化されなければならない。それは十人単位程の小隊編成から開始して、全国的な疑似プロレタリア軍団を設立し、青年同盟、反戦青年委と結合しなければならない。その時の結合の軸は、「国際主義」である。社学同の同盟員はそうして軍隊的に組織化されると共に、党の戦略戦術・政治主張を徹底的に学習しなければならない。その規律ある行動の一つ一つが党の宣伝であり、シュプレヒコールの一つ一つが国際主義で彩られていなければならないのである。労働者政治組織は広義に解釈されこの社学同までを含む。社学同の当面する任務は全学連での主流派の奪取であるが、組織的には日共民青の革命的解体である。日共民青の革命的解体というものは、「武器の批判か批判の武器か」という言葉があるが、徹底した革命的批判、イデオロギー的批判と、しかるのちは暴力的批判によつて実現されなければならない。なお未だ全国的には社学同の下に更に大衆斗争機関を設置する形態をとっているが、大坂市大、早大においては既に社学同として大衆斗争の組織化を開始している。全国的にそのような形で運動が進められることが望ましい。「第三期階級斗争の時代は、大衆が直接に政治党派を選んで闘う時代である。」全国社学同の党的確立が魚眉の課題としてある。社学同は最終的には「社学同戦斗団」というような呼称で呼ばれるべきである。

(五) 大衆運動の型（大衆）

ヘルメットを被り、ゲバ棒をもった戦斗集団だけが、大衆と関係なく奮闘し、自己完結的に総括を行っていきながら、一切の大衆斗争はおこなない。大衆が斗争に参加してくるということは、彼らが直接的にヘルメットを被り、ゲバ棒を持つということを意味し

ない。我々が運動の構造として措定しているそれは、いわばアメリカのペンタゴンに対する反戦斗争のようなものである。ペンタゴンでは、先頭の急進的部隊はペンタゴン内に突入しようとする警官隊との激突を繰り返す、だが後の部隊はそれを支持しつつも、ヒッピー族がバラの花を持って歩いていたりする。運動の構造は二重になっている。しかもそれが一つの運動体として動いている。その二重の構造が同一の政治課題に対する、同一の政治的位置付けによって成立しているならば、それでよいのである。我々はそのような二重の構造を「国際主義」で統一する。先頭の部隊は「組織された暴力」の部隊である。後続の部隊は、直接民主主義に立脚し、この組織された暴力を支援し、不断にそれを発展していく大衆全体の部隊である。我々はその「国際主義」で統一すると共に、すべての運動がこのような多様性と立体的性を持つことを追求しなければならないのである。それが一方における赤色主義・前衛主義を、他方における大衆運動主義を回避する唯一の道である。

ともあれ、我々の歩む道は一つ、そこから導き出されるプロレタリア世界革命へ向っての最左派の道である。

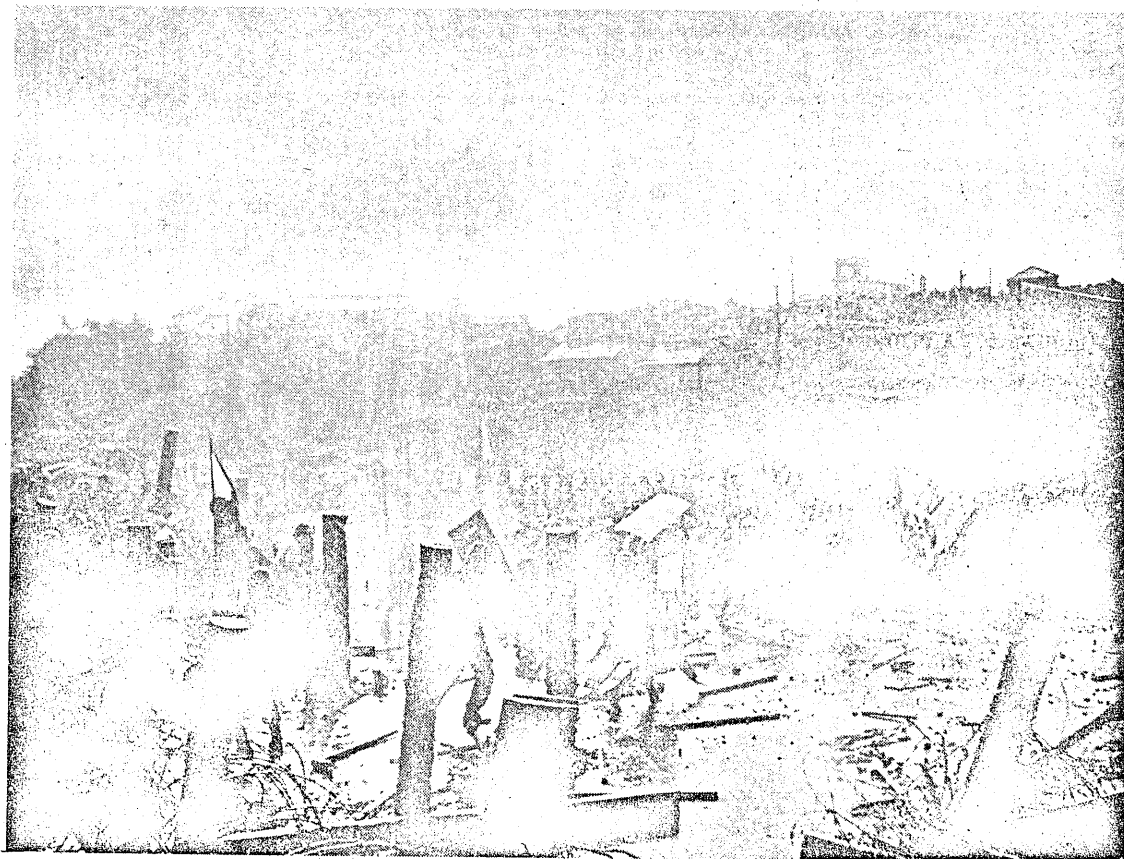
(三) 「組織された暴力」と「国際主義」に関して。

日本帝国主義の質的転換、帝国主義世界分割戦への本格的な登場は、七十年安保からそれ以後の七十年代階級斗争の内実が、基本的には各国帝国主義の対外膨張市場再分割戦に反対する「革命的な反戦斗争」として闘われるであろうことを我々に予見させる。そしてこの「革命的な反戦斗争」は単に帝国主義の対外膨張に反対するに止らず、その過程において小ブル中間層の自己権力思想としてのファシズムそのものに対して、物質的イデオロギー的に闘いを組織していかねばならぬところのものである。そこで我々はこの戦後第三期として認識される「後進国民族解放斗争と先進国反戦斗争の結合の時代」、「政治斗争と経済斗争の結合の時代」が我々に要求している問題の質を、まず正確に認識することから始めなければならない。

①「国際的な階級斗争の結合」とは、六十年代前半のE.E.C.日本資本主義の「構造的な不況」を媒介とした、内的膨張から外的膨張への転換による、経済斗争の自然発生的高揚と、ヴェトナムを頂点とする後進国人民武装斗争の拡大が、世界危機II世界革命の同時性の萌芽を形成していることの一表現である。従ってそれは、E.E.C.日本帝国主義の外的膨張が侵略反革命戦争として展開され、これを媒介として後進国革命が突出して実現している「世界革命の永続性」を、先進国革命に於て統合包括する所の問題、すなわち「現代帝国主義論と世界革命戦略」として総括展望することとを我々に要求している。

他方「政治斗争と経済斗争の結合」とは、日本帝国主義の内的膨張から外的膨張への転換が、同時に帝国主義国家体制の確立であり、諸階級諸階層の政治過程への全面的登場として発現せざるをえないということの意味している。従ってその場合そこで問われている問題は、諸階級諸階層を「プロレタリア統一戦線」に統合し、日本帝国主義打倒へ至る「プロレタリア独裁のための戦術(組織戦術)闘争戦術」に、それを表現するための「政治主張」の内容を確定することである。

②この現在の問われている「世界革命の戦略」、「共産主義的政治」、「プロレタリア独裁の戦術」に対する我々の解答が、「プロレタリア国際主義」と「組織された暴力」であり、日本帝国主義のアジア侵略反革命と対決し、世界革命を突出して表現するヴェトナム人民解放斗争、米黒人解放斗争等と結合して、七十年安保粉砕日本帝国主義打倒の方向性へ向けて前進する。全学連一地区反戦の運動である。



ヴェトナム人民解放斗争に対する米帝国主義の反革命戦争と日帝のそれへの加担に反対する、現在のヴェトナム反戦斗争は、日帝の動向、我々の指導の質という、客観的主体的条件からして、新たな運動の質の内包を我々に要求して来ている。日本帝国主義は極東からアジア太平洋地域へその経済的勢力圏を拡大し、ヴェトナム後進国革命への本格的対決を軍事力強化として準備し、日米軍事同盟の再編を通してそれを実現することを決意し、訪ヴェトナム、訪米から七十年安保としてその基調を設定している。従ってヴェトナム反戦斗争は、ヴェトナム人民解放斗争、米国内反戦斗争と連帯し、日本帝国主義のアジア反革命侵略と軍事力強化に反対する反戦斗争へと高められ、その闘いを通じて日本帝国主義打倒を展望するプロレタリア国際主義の質をもって指導されねばならぬのである。これまでの全学連一地区反戦のプロレタリア国際主義の意識性に支えられた運動は、当然にも、この訪ヴェトナム、訪米として日本帝国主義が表現しようとしたところの、侵略反革命路線との全面的対決であり、国内統治、後進国支配を軍隊暴力として等質的に貫徹せんとすることに對する公然たる挑戦である。

我々は帝国主義の対外膨張、市場再分割に反対するべき七十年代階級斗争II革命的な反戦斗争の基調として「プロレタリア国際主義」と「組織された暴力」を提起するが、それは最終的には七十年代階級斗争を権力斗争として闘う戦略的展望として打ち出されるべきものである。それ故我々はこの「組織された暴力」と「プロレタリア国際主義」の、更なる革命的な位置づけの深化に入っていくかなければならない。すなわちここで獲得するべき内容は、「組織された暴力」と「国際主義」が七十年代階級斗争の基調であることの立証と、しかもそれが単なる「旗印」の問題にとどまらない、運動組織路線の基本構造であることの認識の作業である。

(1) 「組織された暴力」の意味するもの。

①「組織された暴力」を政治理論的に説明する場合、我々が前提的にとらえている観点は次の一点、すなわち「革命的危機の到来」ということそれ自体は、何ら現在の社共による労組支配を揺がせない」という認識である。もちろん言うまでもないことだがこの問題は、我々の主体的な活動、対象に対する働きかけの問題と切り離しては考えられない。既成労働運動の社共支配が揺るがなければ、結局は我々がどれだけの力か、如何なる組織方針を準備し如何なる組織戦術をどこまで駆使するかという問題である。だがそれにもかかわらず我々は、日帝の対外膨張が単なる

る方向性の問題から物質化された内容として表現されるようになるまでの期間を、極めて短期的なものとして指定するし、それに対処する革命的左翼の主体的準備を極めて遅れたものとしてとらえかえさないわけにはいかない。極論するならば、我々はあえて民間基幹産業プロレタリアートや官公労、公労協プロレタリアートの支援なしでも、日帝の対外膨張に規定された一つの決戦を闘い抜かなければならないのである。革命運動は根底的に情勢に規定されている。それはいつまでも情勢を先取りして突き進むものでなければならぬ。そしてそのことは、実は主体的準備が十分に調わなくても闘わなければならない時があることも我々に強要するのである。

日帝の対外膨張は既に開始されている。自衛隊の帝国主義軍隊化はまさにその物質的表現である。沖繩の核基地付き掌握は、まさに日帝のそのような意図の表現である。そしてそれは当然にもその過程において小ブル中間層の全面的な政治過程への登場を促がす。それは一方では日帝に対して敵対する勢力を生み出し、同時に他方ではそれと同調しそれを支持する勢力を必ず発生させるのである。すなわち一方に於ける小ブル反戦派と他方における小ブル自己権力思想派「ファシズム」を、である。この点に關するドイツの教訓は決定的である。一九一八年に始り三十二年に終焉するドイツ革命の激動期において、国鉄をはじめとする主要組合に於ける社民支配は一度たりとも揺いでいない。ということはすなわちプロレタリアート本隊は最初から最後までこの歴史の激動期に、変革主体として参加してきていないことである。そこで歴史を担ったのは、ユンカーと失業兵士とデラクセ・インテリであり、六百万を越えた失業者群、貧プロである図を参照してもわかるようにナチスの登場は一九二四年である。ヒットラーはこの時、ドイツ民族主義と幻想の國際主義、第三帝國としてのヴェルサイユ体制打倒の路線を明確化し、この下に小ブル貧プロの大衆運動を展開し、その中から組織された暴力「突撃隊」を形成する路線を既に確定している。突撃隊は一九三二年中に十万人から四十万人に増える。共産党と突撃隊との衝突が連続しておるのは一九二九年から三十年、三一年にかけてであり、三十二年になると共産党はナチスに完全に粉砕される。ナチスは大衆に「ヴェルサイユ体制打倒」の路線を提起したがコミンテルンに指導されたドイツ共産党には「反戦平和」以外の國際路線が無かったからである。問題は社民である。社民を支持する部分は就業労働者であり、共産党とナチスを支持するのは失業者群と小ブルである。それはより具体的には次のように分析される。社民は就業労働者を集約するが、就業労働者のうちでも技術者、事務員、官吏はナチスを支持する。失業者、ルンプロは基本的には共産党を支持したが一九二九年位を境にしてその支持は共産党からナチスへと移っていく。ナチスには就業労働者と失業者の対立をドイツ民族

政治的結果の環は、日米安保打倒、「プロレタリア革命、暴力革命、世界革命」であり、より具体的には、自國帝國主義打倒、帝國主義軍隊解体に表現される徴兵拒否から國防省昇格反対、沖繩派兵反対に連続される「革命的な反戦闘争」の提起であり、「プロレタリア國際主義の内実の形成」である。そしてそこで我々が敵対しあわねばならない小ブル自己権力思想派は、日本民族主義の旗印の下に、恐らくは「日米安保打倒」をかかげるより本部隊である筈である。小ブル、ルンプロの集約としての「組織された暴力」の位置づけは、それ故プロレタリアなしにプロレタリア革命をやろうということを意味するのではなく、小ブルルンプロの戦闘性に最大限に依拠することによる日本民族主義との対決の図式の中にとらえかえされねばならない。それが「組織された暴力」の第一の位置づけである。同時にそのことは、我々がプロレタリアート本隊の組織化を如何にせよとせよとせよとせよとせよとせよと自身に問うているのであり、それは又別個に指定されるべきものである。

②第二に「組織された暴力」は、大衆が生活と権力を防衛するために自然発生的に決起する時の暴力一般とは、質的に異った「暴力」を所有する部隊として位置づけの第二である。すなわち「組織された暴力」とは「党によって組織された暴力である」ことを自明の条件とするということである。ドイツに於ける一九二〇年代の革命期を、小ブル、ルンプロ、失業者群といった階層を誰が如何なる手段により如何なる内容で集約したのかといった視点から総括する我々にとり、この第二の視点の意味は決定的に重要である。「組織された暴力」とはすなわち「階級として組織されたプロレタリアート」を意味するということ、それ故当然それは「向自的プロレタリアート」の群として、その活動そのものが一つの目的意識性と世界戦略によって、思想的イデオロギー的に武装されているということ、すなわちそれは結果的に党を構成する一構成実体として大衆の前に登場し、かつ機能するということ、これが位置づけの第二の視点の中心環である。だからそこから言えることとして、現在の我々の「ゲバ棒闘争」はあくまでも一つの斗争戦術にすぎないのであり、決してそれが自己目的化されるものではないということである。我々が何故このように闘争戦術を恒常化するのかということは、つとめて七十年代階級斗争、なかんずく日帝の対外膨張と対決する「革命的な反戦闘争」の基本的な運動構造を確定するためであって、それ以上の如何なる深遠なる理由もない。同時に又、何故に「軍団組織」等を作るのかということは、何もそれによって暴力的に機動隊、自衛隊を解体しようとするのではなく、それによって、あくまでも小ブル、貧プロを大衆的に集約するためである。我々にとり帝國主義軍隊の解体は、大衆の徴兵拒否や、海外派兵反

年号	社会民主党	独立社会主義党	共産党	ナチス
1919	1,1509	2317		
1920	6104	5047	590	
1924	6009	235	3693	1918
1928	9153	21	3265	810
1930	8578	12	4592	6410
1932	7960		5283	13746

ワイマール共和国議院選挙の結果
単位千人、得票数推移。

主義によって集約するという路線があったが、共産党には就業労働者と失業者の対立に対する政策はなかった。共産党はプロレタリアートを獲得することを望んだがそのプロレタリアートは社民を支持していた。従って共産党はそれなりに大衆を集約したが路線を提起できなかった。失業者、ルンプロを満足させる路線はプロレタリアート本隊と敵対する路線であったからである。更に共産党は上部から労働運動を焦約する方針をとったが、ナチスは下部から集約する方法をとった。そのことは結果的に貧プロ、小ブル、失業者をナチスに引きつけた。それ等は突撃隊として組織された。

内左派（新左翼の加入派等）の下はオロイテ化している。だが基調としてのそれは同盟と総評という社民によって集約されるという構造をもっているというものである。そこでこれ等の材料から判断されること。すなわち、社共の労組支配は揺がないという前提に立って提起される路線は、ファシズムの温床としての小ブル、ルンプロを如何にして組織化し、これに如何なる國際路線を、すなわち世界戦略を提起することによってこれを集約するのかが、という点に集中的に表現される筈である。「組織された暴力」の革命的な位置づけの第一はこれである。すなわちそれは、現在「全学連」反戦」として組織化されている小ブル、貧プロの部隊を、世界革命戦略によって集約し、しかもそれを「組織された暴力部隊」として組織化することにより、ファシズムの温床そのものに切り込んでいくという視点である。その場合の

対、三次防反対といった軍事外交上の日帝の総路線に敵対する大衆運動の中に求められるべき内容のものなのであり、一対一の帝國主義軍隊との対峙の図式によって押しはかられるべき内容のものではないからである。もちろん「組織された暴力」はその延長上に「赤軍」のイメージを持つ。そして我々はそのような「赤軍」も、ドイツ革命一九二〇年代の「赤色戦線」のように路線を提起されないうままに放置されるべきではなく、あくまでも党の上からの路線の提起によって世界戦略によって武装されねばならないと考える。そしてそれは七十年安保を日帝の侵略反革命路線の環ととらえる、現在の我々の政治主張によって担われるべきものである。だからせいぜい沖繩斗争ぐらいにしか路線を提起できない。すなわち社共の民族主義的な返還要求運動を糾弾することしかできない革マル派に、國際路線世界戦略を求めて決起して来る大衆を集約することができないことは、今後とも全く自明のことであるだろうし、ましてや、成田侵略空港設置阻止の闘いまでも、「航空合理化論」なるもので乗り切ろうという解放派の、しかも「ゲバ棒闘争に反対する」等という路線の破壊は、ほとんど間違いないのである。トロッキーは「小ブルジョアは独立した政策をもたないが、パリコミンやロシヤ革命の経験からして、そのブルジョアとの同盟も亦、決して確固たるものではない」（唯一の道）と言っている。「資本主義の成長開花の時期、その上昇期にはそれはブルジョアと妥協し、それに従っていくが、資本主義の崩壊が予測されるような時期、その過渡期には独占の足枷から逃れようとする。しかもその場合、プロレタリア党が労働者の結果を確保していない時には、小ブルはプロレタリア党に憎しみを発露して、自分達の憎悪と絶望に答えてくれる政党を見出そうとする」（同）と。「組織された暴力」はまさにこのような小ブルジョアを党の戦略戦術によって組織化した、それ故、基本的には「階級として組織されたプロレタリアート」として位置づけられる、前衛党の政治方針のもとに結果して来た「向自的プロレタリアート」の軍団でなければならないのである。

③第三に「組織された暴力」は、経済斗争部隊ではなく、政治斗争、反戦斗争を、プロレタリアート本隊（持ち込むための部隊、すなわち革命的な反戦斗争を現実的には最も主体的に担っていく部隊、結果としての「街頭政治行動部隊」であるという位置づけである。社共の大衆の自然発生的な即自的意識に全面的に意図した経済主義は、革命的危機の到来にもかかわらず、決して転換されることはないということは既に述べた。大衆の自然発生的な意識をそのまま即自的に組織化し、議事を媒介にして政治権力の掌握を夢想するという現在の社共の「連合政権構想」が、小ブル中間層の突撃の前にあえなく敗退していくのであろうことは明白である。我々はこの社共の議会主義経済主義に対して、「組織された暴力」を全人民的政治斗争部隊と位置づける。そ

これは②との関連においても明らかのように、現象的には機動戦部隊として機能する「党」の独自の政治行動部隊である。「組織された暴力」が街頭行動の先頭に立てば、プロレタリアートがインパクトされて決起してくるというのではない。プロレタリア大衆の組織化の問題は党の独自の組織活動の問題である。そしてそのような「党」組織活動の一環を担うのが「組織された暴力」である。現在の全学連・反戦」II「社会学同、青年同盟、労研社研」の活動であるという位置づけである。

④「組織された暴力」の第四の位置づけは、反ナチ斗争におけるドイツ共産党の悲劇と、「次は何か」や「唯一の道」における、トロツキーの政治方針、組織方針の総括から導き出される。すなわち統一戦線機関としての「組織された暴力」の位置づけである。トロツキーはプロレタリア階級の権力獲得のための「闘争組織形態」としてソヴェトを提起した。彼は「次は何か」の中でファシズムを次のように規定した。

「ファシズムはプロレタリアートのすぐ上の没落・転落階層を、プロレタリアの対抗部隊として組織し、プロレタリア組織全体の破壊を狙う。それは単なる暴力、テロ、弾圧ではない。それはブルジョア民主主義体制内のプロレタリア民主主義的要素を根絶する。特殊な国家制度である」と。そしてこれに対する彼の政治方針は次のようなものとして提起する。

すなわち「反ナチ（反ファシズム）統一戦線戦術の組織形態は、統一戦線のもとでも進んだ形態、最高機関としてのソヴェトへ発展させられなければならない」と。ここで彼の政治理論の展開は次のようなものである。「共産党が一党で一国の全プロレタリアートを結集出来るようならソヴェトは必要がない。ドイツではプロレタリアートが共産党の旗の下に結集する以前は、権力獲得の直接的任務が突きつけられていた。権力獲得の要請にプロレタリアートが応えられなければ、ブルジョアジーはファシズムを選挙し、狂乱化した小ブル中間層とルンプロは磁力に引きつけられるようにファシズム（権力）へ吸い寄せられ、労働者大衆組織も党も完全に破壊され壊滅させられる。だからこそ統一戦線戦術を通してソヴェトへ発展させ、プロレタリア独裁を勝利へ導かなくてはならない」。

トロツキーは統一戦線を単なる党派の政策次元にとどめることなく、権力問題として提起している。我々も又、彼のこの過去の轍を踏襲しなければならぬ。我々にとり「組織された暴力」II「社会学同、青年同盟、労研社研」は、「全学連、反戦」等で統一戦線機関であり、小ブル、貧プロを政治的に集約するといふ観点から提起される権力斗争における、基本的な「闘争組織形態」である。この内容に関しては

連関性の統一が、「政治的共同体」として、「国家」として幻想的に表現されていると云うことである。そして帝国主義の新たな段階への突入は、必ず不均等発展の結果形成される協同から対立、競争への諸関係の転換を、ブル独裁の露骨な表現、「暴力」として発現させる。その場合の「思想」は、「民族主義」であり「擬似国際主義」である。すなわちその時代にあつては、資本主義の法則性の必然的發展から、ブルは国民大衆に対し「民族国家」を媒介とした世界戦略、国際路線を提起せざるをえないはめにおこまれののであり、そのことによってしか又、労働者大衆は集約されなくなるのである。いうまでもないことだが、「民族国家」と「国民経済」こそがブルジョアジーの切り札である。そこではふたたびかのヘーゲル体系の一連の系列が、国家、法、宗教、市民社会が、我々のまわりを覆いつくし、それからの出口は「戦争」という「民族国家」間の対立によってのみ可能であるかのような幻想が、再び我々をとりまくのである。現在日本ブルジョアジーが提起し、乗り切らんとしている内容は次の三つである。すなわち一つは軍事外交問題としての沖繩と自衛隊の帝国主義軍隊化、第二には政治路線としての民族主義の貫徹と、アジアの盟主日本の主張、そして第三には生活経済から提起される経済ナショナリズム、すなわち東南アジアからアジア太平洋一帯の集約を集中的に表現する内容としての、アスパック構想等である。それはすべてが軍事外交上の路線によって解明されるかのような幻想を大衆に与えるための路線である。すなわち日帝の世界戦略のみが日帝が内部にかかえる矛盾の一切を解消できるという形で、ブルジョアジーの大衆に対する問題の提起である。

我々はそれ故、既に我々自身の世界戦略を大衆に対し提起しなければならぬとされている。そしてそのことは、結局は我々が「民族国家」と「国民経済」に対し逆することから開始することを要求している。我々は対して、自国帝国主義打倒の権力斗争にまで高められる形で、「反戦斗争」を提起しなければならない。しかも当然それは、権力斗争の斗争組織形態を内に含んだ戦術として、大衆に対し提起されなければならないのである。

ここから導き出されるものが、「プロレタリア国際主義」である。それはまさに文字通り、世界単一共産党の形成から、各国革命戦略の世界革命戦略からの規定、すなわち普遍からの部分の規定、そして更には、自国帝国主義打倒をプログラムにすえた反戦斗争の全世界的意志一致の一切をその内容として含んでいなければならないものである。そして我々は現在のこの「国際主義」の内実を、「組織された暴力」の基本的な五つの視点によって位置づけている。「国際主義」とはブルジョアジーが国民大衆の政治的集約のために提起する世界戦略の基軸としての、「

更にその内容を深化させていかねばならないが、これが「組織された暴力」の政治理論としての第四の視点、すなわち「統一戦線機関としての組織された暴力」の位置づけである。

⑤「組織された暴力」の第五の視点は、普通一般的に語られているような内容、すなわち組織された国家の暴力に対するプロレタリアートの暴力の位置づけである。それはまさにその意味では実践的なゲバルト部隊であり、我々の闘争戦術を担う主体である。この視点から要求されるものは、「組織された暴力」の実践的な軍事教訓であり、徹底した戦力増大のための訓練である。しかもこの実践的なゲバルト部隊としての位置づけは、ナチスの突撃隊と同様に、その過程で「党」の宣伝をおしはかり、大衆に対するプロバガンダの役割を行うのであって、最も重視されてしかるべき意味を持っているのである。我々が「組織された暴力」を「軍団」として組織化する時、それを最も必然化させるのは、実践的にはこの第五の視点である。

以上「組織された暴力」の政治理論としての五つの視点をまとめると、第一にはそれは小ブル、貧プロの組織化、その戦力増大の世界戦略による集約化の視点。第二には「党」によって組織された暴力」の視点、すなわち大衆の自然発生的な暴力一般とは質的な差異を持った向内的プロレタリアートの部隊の位置づけ、第三には全人民的政治斗争部隊であり、社会の経済主義に政治斗争、反戦斗争を目的意識的に持ち込む部隊であるという視点。第四にはプロレタリア権力斗争に向けての統一戦線機関の視点、すなわちソヴェトと結合してとられかえされるべき内容を持っているという位置づけ。そして第五にはブルジョアジーの組織された暴力に対するプロレタリアートの組織された暴力であるという視点の五つである。そして我々があえてこのような政治的な位置づけにこだわるのは、「言葉は概念を区別するのに役立つ、政治における概念は現実の力を区別するのに役立つ」という、トロツキーの共産主義的政治の根本命題の精神にのっとると、更なる根底的な視点に我々が規定されているからである。

(II) 「国際主義」の意味するもの。

支配は全ゆる時代を問わず「思想」と「暴力」の連関で貫徹される。民主主義は官僚、警察を通して表現され権力の行使は民主主義を通して表現される。我々の前提ブルジョア支配の骨格が「テオロギー」と「暴力」と「分業」の連関性こそあるといふことの確認であり、その

民族国家」と「国民経済」に対する「プロレタリア国際主義」であり、その「プロレタリア国際主義」にのっとった「プロレタリア世界革命戦略」に他ならない。そしてその基軸には、やはり「自国帝国主義打倒」、「後進被抑圧人民解放」の二つの基本命題がすえられる筈である。しかもこの国際主義は、ソ連と中共による過渡期社会、労働者国家の二分断という現実の中で提起されている。そこにおいては一般的なプロレタリアートの団結の謳歌もはや夢である。ここでは、それ等の労働者国家が現在如何なる世界革命戦略を有しており、しかも如何なる形で社会主義社会の建設を押し進めようとしているかが問題にされなければならない。それはソ連がいかに、中共がいかにという二者拓一で語られる内容のものではない。未来から現在を規定し、本質から現実を捉えかえすとき、我々はそのどちらをも基本的には支持することが出来ない。ともあれ、我々はそこで、ソ連中共にとどまらない諸ヘゲモニーの分析を行い、我々が提起するプロレタリア国際主義の内実を、如何なるヘゲモニーとの統一戦線の形成の中に求めていくのかと最後に明らかにしなければならない。

(I) O.L.A.S.会議派への評価

我々がO.L.A.S.第一回大会の諸決議を注意深く読み、かつゲバラのあのよびかけを革命家の理性と良心をもって受けとめるならば、次のことが明らかである。

第一には、O.L.A.S.会議派にあつては現代階級斗争史上の一時代を画するあのソ連共産党十九回大会の「平和共存」革命への平和移行」のドグマが、L.A.革命の現実の検証を通して否定され、その否定はその内に武装解放斗争型戦略を作り出したということ。しかもそれは現在のには恐らく、キューバ武装解放の経験に学んだアメリカ帝国主義、カイライ政権の対ゲリラ戦略に対抗しうる唯一の道であるといふことである。

第二には、武装解放は民族独立を自己目的化した戦略のもとではなく、反帝反政府斗争の内実が、プロレタリアートの独裁II社会主義を当面の目標とすることに直結されているということ。これは旧来のスターリン的修正主義二段階戦略の抜本的克服であり、かつ、他の人民解放革命斗争ななく、ベトナム人民解放斗争それ自体に、真の戦略的展望を与えるものである。我々はしかもここには、後進国解放斗争におけるプロレタリアートのヘゲモニーの正しい規定があることを見落してはならない。

第三にそれは、地域的あるいは植民地インテリゲンチヤナリズムの戦略と機構に、プロレタリア国際主義の具体化を一步前進せしめているし、普遍的な世界戦略に対

して道を閉ざすことなく留保限定し、飛躍の条件を抽出している。すなわち、後進諸国の斗争は解放が一国的規模の革命の総和ではなく、相互に統一された戦略戦術の下での、国際的同時革命を展望することを明確化したことと、すべての帝国主義に対する国際的に結合された解放斗争の対峙を「二二三つのヴェトナムを無数のヴェトナムを」という路線の中で、まさに実践的インターナショナルナリズムとして表現した点である。

我々はこれ等の点からこのOLA会議派を次のように評価する。まず第一にこのOLA会議派はキューバ労働者国家の永続革命の道と、未だ権力奪取を遂げていない他国プロレタリアートとの間に、統合された戦略を既に提起しているという路線として提起されているということ。第二にはそれ故にこの派は、米帝本国における革命的潮流運動との政治的軍事的な、グローバルな戦略的統合を追求しており、ここには、帝国主義国家、労働者国家、過渡期世界総体の階級斗争、プロ独共産主義実現のための戦略、党運動の真のインターナショナルナリズムの萌芽があるという点である。それ故我々はこれ等の視点から、この派とは運動上の統一行動を基軸とした統一戦線の形成を早急に追求できるという判断を基盤にすえるものである。

(ロ) ブラックパワー、SNCC、カーマイケル。

アメリカ国内における階級斗争の諸ヘゲモニーは、次のような特徴を各々有している。

まず既成インテリの体制内化、既成党（共産党のみならず様々な他のトロツキスト党派）の没落にとつかわたって、新たな世代のインテリゲンチアの、運動理念をもった政府国家からの離反の広範な永続的な開始、そこへの運動体としての急進民主主義SDSの登場。

これとは別個な、これまで一貫してアメ帝の階級支配の客体であり与件であった、黒人の政治的解放斗争の、いわば反社会的な高揚。すなわちブラックパワーの登場。そしてこれ等とは更に相対的に別個な白人プロレタリアート本隊内部での、しるびよる経済危機を反映した組合主義左派の胎頭（これは政治的には未だ未登場である等である。もちろん我々にはこれ等が相互に分離しており対立させる等である。

していることを知らねばならない。だが客観的にはこれ等の胎頭という事実の中から、アメリカ帝国主義の経済的地位の後退にもとづく国内攻撃の、とくに下層へのわよせが、政治的軍事的地位—世界戦略の後退と亀裂からもたらされる「反共自由」

共の、いわゆる反米民族解放統一戦線論や二段階戦略そのものの転換を中共みずから問うた。一国社会主義建設を共通項とする限り、ソ連に対する実質的な批判は中共には出来ないからである。我々はそれ故そのような政策転換の過渡として現在の中共を評価する。すなわち現在の中共は、人民公社形態で再度の大躍進を行い、自力更生で一国社会主義を再度追求することも、対外的に「米帝一元論と中間地帯論」の結合を再度設定することも、既に出来ないような段階に追い込まれているという判断である。人民公社に変わるべき人民の社会的権力形態を明確に示し得ず、三結合形態として発展させるべき生産力発展の方向と国家形態の確保が現在の的に全く不明確なのである。対内政策においては一国社会主義路線をとるのか、労働者国家建設、プロレタリア独裁の完成を世界革命との関連でうたじ、現在の危機から脱出するのが、体系化された路線は未形成である。現象的な対外路線の転換も、一定の国内経済基盤を持つ国での一国社会主義建設路線が、ソ連の援助打ち切りを契機として破綻する過程を通して始まり、この内的な矛盾にヴェトナム解放斗争をめぐるとして国際階級斗争の激化という外的インパクトが加わっておこったものである。そういった点からいって、我々は中共に対する評価を次期中国共産党大会での提起をまわって判断する他ない。しかもその判断もそれが必ずしも肯定的なものになるとは限らないのである。

以上の点をふまえるならば、我々が「国際主義」の内実を形成するために結合しうる部隊は、既に中南米一段階社会主義革命路線を提起したOLA会議派ではないことは、ほぼ明らかである。すなわち我々の「国際主義」はこの部分との単一世界党結成、反戦インターの創造、世界革命戦略の一致に基づき、ブルの提起する世界戦略との対決の中に貫徹されねばならないのであり、それが運動組織形態の基軸とならねばならないのである。以上

(文責・日向翔)

のナショナル・コンセンサスの動揺と合さって、アメリカ国内に、新たなしかも急速な政治的イデオロギー的分解をもたらしつつあることを見てとることが出来るのである。最もこれ等の波が革命的マルクス主義者の運動として統合されるためには、高度の目的意識的な革命党による闘いの指導を不可欠とするし、帝国主義的労働運動、帝国主義的民主主義の蓄積された害毒に対する、ラディカルなしかも継続的な闘いの組織化が不可欠である。しかし我々はこの萌芽を、SNCC等の一連の思想と行動のうちに見ていくことはできるのである。我々がSNCCブラックパワーの組織思想行動にアメリカ革命の原動力を見出すのはこの故である。例えばSNCCは現在のアメリカ国内で最も非和解的な反帝・反政府派であり、かつプロ独社会主義の現在の擁護者である。そのブラックレボリューションの論理は、「大衆の中の帝国主義白人社会」からの公然たる自立を通してしか、黒人を主体としてとらえかえすことができないところの内容を、対象化してとらえたものに他ならない。それは早晩、マルクス主義と結合しない限り論理的に破産をきたすことは全く自明なのである。

(ハ) 中国文革と毛・林派。

文革に対する評価は、いわゆる「中共派」が帝国主義心臓部およびソ連に對しても分派と形成していることからも又権力を争いどつたプロレタリア国家の「転換」であることからも、極めて重要である。それは帝国主義の攻撃の激化が生む国際階級斗争に規定され、二重の過渡期にある国内的要因—農民性後進性との結合として、ある意味では特殊な永続革命の表現である。その場合問題はその指導部としての共産党が、如何なる世界革命戦略を提起しているか、そして又、帝国主義国内プロレタリアートを指導しようとしているかにかかっている。既にソ連の一国社会主義建設路線から逆規定された「生産力主義的世界戦略」（すなわちソ連の発展—資本主義国内プロレタリアの社会主義への接近—後進国の非資本主義的發展の道の保証という路線）は、戦後第三期の現在世界中至るところで破綻している。ヴェトナム戦争はそれを促進した。平和共存路線批判は、一国社会主義建設を基軸にすえた中



変革主体としての近代プロレタリアートの措定

(若きポリシェヴィキ復刊1号より転載)

(序)

いつか、だが必ずや近い将来、この日本においても、**炎上するまちの空へ照り返す炎が、その日の朝焼けとなる日**を、まさに変革主体として双肩に担い、震撼する世界ブルジョアのおののきと畏敬にみちた叫喚を、自己解放の鉄槌によって終焉せしめるべき近代プロレタリアートの措定こそ、それが何故に**変革主体**であり、来るべき世界を担うのか、ということの証左として解明されるべきである。

階級形成の方法論の差異が党派の差異として現象化する時、それは階級主体としてのプロレタリアートの規定、存在論的認識の差異に多くの場合、基づくものである。

革命的左翼にとり変革対象である即自的プロレタリアートを本質論的に解明しつくした時、そこに初めてその措定された対象を**変革**するための方法論が問題になるのである。経哲草稿におけるマルクスの人間の規定(対象の感性存在ゆえに受苦的存在であり、それゆえ熱情をもつ、すなわち実践的存在である)なるものを押しはめて是とし、自分達には哲学があると思ひこむような少年じみた党派は、もう一度よく世の中を眺めて己れの至らなさを痛感しなければならぬ。

あるいは又、社会的諸関係そのものの**変革**にはあまり熱意をしめさず、世界認識の方法を痛々しく、自己変革しながら変革していこうとする傾向のまことに強い党派は、自分の頭の中が**変**っていくほどに世の中が**変**らないことを驚きの目で眺めて、物質的諸関係、情況そのものを**変革**していくことに生きる**欲**びを感じる構造を今少し身につけることである。

ともあれ、我々はずきのように考える。我々以外の党派はすべて**まちが**っている。それ故彼らは**打倒**ないしは**変革**されなければならない——と。

有に從属する形で**動産**の私的所有および**不動産**の私的所有が発生した。国家の公民はただ彼らの共同によってのみ、彼らの**労役**を行う奴隷への支配力をもった。すなわちこの**共同体**所有においても生産者と生産手段を無媒介的に結合させたものは**血縁**であった。

所有の第3の形態は封建的あるいは身分的所有である。そしてこの第3の所有の形態は都市と農村で2つのものを発生させた。一つは農村における奴隷にとつて代った**農奴**の発生である。しかしここにおいても生産者と生産手段を媒介したものは**門閥・地縁・血縁**等であり、土地という**物的生産手段**を人間には再生産できぬということが、**門閥**によって生産者と生産手段が結合されたことの原因である。

他方都市においては**同職組合**所有が発生した。親方、職人、徒弟という**位階制**は農村における**君主、貴族、僧侶、農奴**という関係と、生産者と生産手段の結合という視点から見た時、本質的には同じものである。たとえば**労働農具**という生産手段と**職人(生産者)**を媒介するものは**熟練**であり、この熟練工は生産手段としての用具を私有したが、しかしこの時この熟練工そのものがこのこの熟練工の属する**集団**に所有されていた。マルクスの理論を借りるならば、彼は生産手段を私有して**おらず**、占有しているにすぎない。

この封建社会までの時代における生産者と生産手段の結合の崩壊過程(いわゆる**本源的蓄積**)は農奴制の発展の中に見られる。すなわち農奴は自ら**が物的生産手段**であつて生産者であつたが、この農奴制の発展がブルジョア出現の基盤を確立する。そしてブルジョア出現はこの農奴制そのものを破壊させる。所有の第4の形態は搾取のための**物的生産手段**の私有の形態であり、いわゆる**ブルジョア**的個人所有である。

② マニユファクチャを契機とする近代ブルジョア出現は、土地という生産手段の価値を喪失させた。(1)それは土地という生産手段が**剰余価値**を生産しないこと、(2)土地を搾取のための場所として彼ら**が用**いることのために**血縁、地縁、門閥**等による無媒介的な生産者と生産手段の結合の枠を打ち破り、**封建的所有者**と彼が**用**いる**物的生産手段(農奴)**を**追放**した。そしてそのことにより、彼らは**生産手段(土地、農奴)**と**生産者(農奴および封建領主)**との無媒介的な結合を分離した。この時**ブルジョア**は**物的生産手段(土地)**から**物的生産手段(農奴)**を追放した。そしてその時、**生産手段(土地、農奴)**と**生産者(農奴および封建領主)**との間を分離した。このとき**ブルジョア**は**物的生産手段(土地)**から**物的生産手段(農奴)**を解放し、**物的なるもの**から**一個の人間へ**彼らを変革した。しかしこの人

I プロレタリアートとは何か、その存在論的解明

資本制社会は、歴史上あらわれる他のすべての特定の生産様式、社会と同じように、特殊な歴史的規定性をもつ**生産様式**、社会である。それは先行する諸過程の**所産**である社会的生産力の**一発展段階**を、自分の与えられた歴史的條件として前提している。それ故、我々は**資本制の蓄積**に先行する**本源的蓄積**から出発して**資本制社会**を見なければならぬ。何故ならば、**い**うまでもなく、これが近代プロレタリアート発生に至る**歴史の総括**となるからである。

「資本関係は、労働者と労働実現条件の**所有**との分離を前提とする。だから**資本関係**を創造する過程は、労働者を彼の労働条件の**所有**から分離する過程即ち一方では**社会的な生活**、および生産手段を**資本**に転化し、他方では**直接的生産者**を**賃労働者**に転化する過程以外の何物でもない。だから**本源的蓄積過程**は、**生産者**と**生産手段**との歴史的分離過程以外の何物でもない。」(資本論2章)

我々は歴史を無媒介的に統一されてきた生産者と**その物的生産条件**とが分離、分裂していく過程として見る。そしてその結合のなされる仕方いかんによって、**社会構造**の種類なる**経済的時代**が区分され、**直接的生産者**から**剰余労働**がくみとられる**経済的形態**が、その**社会の支配隷属関係**を規定するのである。そしてマルクスはこの分裂は**奴隷制**とともにではなく、**資本制**においてはじめて完成するものとみなしている。すなわち**奴隷**という萌芽的な階級が**プロレタリアート**という完成した階級にまで形態変化していく中で、それが何を完成し成熟させているのか、これを追求しなければならぬ。この過程はマルクスによれば**無媒介的に統一**されてきた**生産者**と**生産手段**が分離していく過程である。従つて、**階級の完成**の過程を追求することは、**生産者と生産手段が結合し、分離する条件**を分析することである。

① それ故、我々のなすべきことはこの歴史の総括、階級発生**の総括**でなければならぬ。マルクスはドイツイデオロギーにおいて**所有**の歴史的形態を大きく4つの形態区分においてとらえた。その第一は**部族**所有であり、部族は同一の祖先から生まれた**共通の氏**をもつ人々の**総体**を意味した(ドイデ)それ故、当然そこにおいては**社会的編成**は**家族**の延長にとどまり、その構成は**家長的部族長・部族員・奴隷**というものであった。部族**所有**における**生産者**と**生産手段**の結合を媒介したものは**血縁**であり、**奴隷**という**物的生産手段**が他部族の人間であるということの意味した。

第2に発生した**所有**の形態は**共同体**および**国家的**所有である。ここでは**共同体**所

間は**実質のない主体**、すなわち**主観的**生産力であり、**生産力(農奴)**は**物的なもの**から**自由な主体**となったが、逆に**物的生産手段**(例えば**小規模な機械**)と**相対する**存在としてこれと**対決**するものになった。これが**労働貧民**である。労働貧民は**主観的**生産力として、**物的生産手段(土地、生産用具)**と**対立**し、それは**労働力**という**商品**と、**貨幣**という**商品**の**対立**として、**競争**と**商品交換**という形式に媒介されて再び結合する。しかしこの結合を媒介するものは**血縁、門閥**等にとつて代った**貨幣**という**商品**である。貧民は近代プロレタリアートというよりもむしろ土地を奪われた**農奴**であり、それ故彼らは**封建的貧民**として**封建制**と**対立**し、**主観的**生産手段として**資本制**とも**対決**した。

マニユファクチャでは**労働貧民**は**自分**に**独自の**手道具を用いてそれぞれの部分行程を遂行した。この場合**貧民**が**労働過程**に適合されるのではなく、むしろ**労働過程**が**労働貧民**の**能力、技術、熟練**等に適合された。すなわち**資本**は**未だ労働過程**を**全面的**には**支配**していない。しかし多くの**国**の**労働運動**の初期にみられる**労働貧民**の**斗争**の**異様な激しさ**、その**多様さ**や**執拗さ**は**貧民**の**斗争**が**普通の斗争**ではなかったことを示している。貧民の**斗争**の**異様さ**はその**激しさ**だけにあつたのではない。

それは**相互扶助**や**賃金**値上げの**経済斗争**から、**工場法改正運動**、**社会改革運動**などの**政治斗争**に至るまで、また**ロバートオーエン**等の**空想社会主義**にもとづく**協同組合運動**、**大陸諸国**の**ブルジョア民主主義**のための**斗争**、**機械打ちこわし**から**小暴動**や**騒擾**にいたるまで、ほとんどすべての**種類の労働運動**、**急進主義運動**を含んでいた。何故ならば**貧民**は**物質的**生産手段(土地)から**強引に**引離された**生産手段**として、**労働者**というよりもむしろ**農民**であり、「かようにして**暴力的**に土地を**収奪**され、**追放**され**浮浪人**とされた**農民**は**グロテスク**で**テロル**的な**法律**によって**鞭打**たれ、**烙印**をおされ、**拷問**にかけられて**賃労働制度**に必要な**訓練**を**仕込ま**れた」(資本論第一巻二十四章)ことに**対する**、それは**原理**をもたない**反抗**だった。

③ **農民**から**近代プロレタリアート**への展開は**マニユファクチャ**から**機械制大工場**への**発展**によってなされる。機械制大工場の導入は**生産手段**の**運動**および**活動**が**労働貧民**に対して自立した。マルクスの言葉を借りるならばそれは「**労働手段**自体が、**その人間助手**における**特定の自然的制限**(その**肉体的脆弱**および**我意**)に**衝突**しない限り、**絶えず引続いて**生産を**続ける**一つの**産業的恒久運動の機構**」(資本論第一巻十三章)となるのであり、**物的生産手段**の**生産者**からの**自立**が**完成**されているのである。すなわち**マニユファクチャ**の**全機構**は**労働者**から**独立**した**客観的**な**骨格**をもたないために、**資本**は**絶えず労働貧民**の**不従順**に悩まなければならなかつ

た。これに対して機械体系という客観的な骨格をもつとき、作業過程は労働者の我意主観的欲求と無関係に、必然的に作動する客観的過程となり、その恣意を許さない。それは資本の労働に対する全面的な支配である。貧民の反抗はこれによって征圧され、資本の労働に対する意志を恒久的に全面的に貫徹する機構が生まれる。そして又、逆にいえば、無組織的な貧民はこれによって近代の主体としての独自の社会的組織の形態をもった私の商品所有者へと生れ変わったのだ。マニユファクチャ労働者の持っていた熟練や技術は無意味なものとなり、労働の質は不問にされるようになる。近代プロレタリアートへ生まれ代るために労働貧民に要請されたことは、機械装置への順応能力であった。

農奴・奴隷は物的生産手段の一部であった。近代プロレタリアートは物的生産手段とは遊離した生産手段である。主観的生産力(土地を奪われた農奴)より発展した主観的生産手段としての近代プロレタリアートは物的生産手段と対立した存在としてこれと関係することが出来る。すなわち物的生産手段と遊離することにより、この物的生産手段の組合わせの可能性を無限なものにする。それは生産力の発展を無限なものとする特殊な生産手段である。

④ブルジョア主体とは、無限にその数を拡大できる他者としての対象と関係することによって、それに依拠し、限りなくこの依存関係を拡大し変革していくことによつて、主体的に行動することが出来るものでなければならぬ。封建的私的所有者たる農奴は、彼自身の物的生産手段としてかたく土地に緊縛されていた。これに対しプロレタリアートは主観的生産手段としての物的生産手段から切断され遊離し、対象と主体との自由な媒介的手段としての物的生産手段をもつ。性質をもった質的労働たとえばマニユファクチャ的な熟練労働や、農民の、伝習的に固定化された労働はその質の許す範囲をこえて自由に組織することはできない。対象的労働となった機械制大工場以降のプロレタリアートの労働は無限に組織されるものとしてある。すなわちプロレタリアートは私の商品所有者として完成され、それは指導されることのできるということを発生的な特質としてもつ。他の諸階級はそのままで指導されることのできない。(小ブル中間層はむしろ労働貧民に近い。)彼らが指導されるのは、指導されることのできる存在としてのプロレタリアートに媒介されることによつてである。近代プロレタリアートは最も進んだ階級として社会的組織性、普遍性、世界性を有する。そしてその普遍性とは資本制社会における商品の普遍性に他ならない。

だがしかし、このことはプロレタリアートがブルジョア主体として自己を完成させたという点、逆にいえばその存在形態を機械制大工場によってブルジョアジー

ートそのものの所有する私有財産労働力商品に対する評価の欠落であり、もう一つにはこのプロレタリアートの階級の本質そのものがブルジョアジーによって外から付与されたものであるが故に、資本制社会における商品の普遍性をもったプロレタリアートもそのままで内に対立する二つの要素を展開発展させることが出来ず、何らかの外在する要素、対象からの内へむかひかけての働きかけなければ自己展開できないという、ことへの理解の欠落である。そして、いうまでもなく、この内的矛盾を展開させる、その媒介を果たすものが、前衛共産主義者の集団である。そしてこれは結局は前衛党による大衆、プロレタリアの組織化。プロレタリアのプロレタリアートへの形成の問題として措定されるべき問題である。

Ⅱ 国家・市民社会とプロレタリアート、すなわちプロレタリアートの実在

特殊とは普遍の一部が固定化されたものであると捉えるならば、その部分の拡大されたものとしての現実の資本制社会における自己分割された人間は、当然実在的にもその歴史的な階級的規定性という存在論上の本質に規定されながら、だがしかし、総体のうちの部分が拡大されたものとしての特殊性をもつ管である。そしてその特殊性とはいふまでもなく普遍の本質の部分が様々な形態に歪められ、拡大されたものとして、現実の資本制社会の分析を待つて初めて解明されるのである。

プロレタリアートの存在論的な解明が、直ちに実在のプロレタリアートにそれだけのものとして押しはめるべきではないことは、その実在そのものが本質に規定されたものではないながら、しかしそれは本質のうちのある部分が拡大されていたり、特殊が普遍としてブルジョアイデオロギーの内に固定化されているという、この資本制社会の階級支配、国家市民社会と個人の関係のうちに根拠があるのであり、その意味では現象は本質に規定されたものであつても、本質それ自体ではないということに他ならない。

そうだとするならば、我々は存在論上の普遍・本質の措定にとどまらず、その実在、国家市民社会と個人との関係を解明して初めて、プロレタリアートを対象化してきたものとしなければならぬ。この点、プロレタリアートの彼らなりの存在論上の歴史的論理的構造だけを直ちに世の中の総体を見たときと早合点する社青同解放派は、はなはだ遺憾な党派であると云われなければならない。

プロレタリアートの実在を解明するという事、或いは現実のプロレタリアートの意識を考察するという事は、とりもなおさずその存在を明らかにすることであり、すなわちそれは彼らの生活過程、市民社会を解明することに他ならない。

により強制的に押しつけられたということの意味する。すなわち機械制に順応することにより、彼が貧民から発展したということでは、プロレタリアートという存在の本質が外部から付与されたものであるということであり、それ故プロレタリアートは二重性という内的矛盾をもった階級である。労働力商品所有者というブルジョア主体であるが、彼のこの階級の本質はブルジョアジーによって外から付与されたものであり、彼はブルジョア主体でありながら、自らがブルジョア主体であることに内的に対立する存在、自らの階級の本質そのものに対立している階級である。このようなプロレタリアートの本質存在の内的矛盾は、いうまでもなく、彼ら自身の自己解放によってのみ揚揚される。

要約するならば、我々にとり近代プロレタリアートとは次のようなものとして措定される。プロレタリアはまず第一に近代の主体として商品経済の中に繰りこまれた、その社会的諸関係の総体としての私の商品所有者である。私の商品所有者としての彼らは常にブルジョアのエゴに基づき、自己の私の商品を如何に高く売るかという観念で物を考える。それは彼らのもう一つの階級の本質であり、市民社会においてはもろもろの個人は欲求の総体であつて、各々が互いに他の手段になる限りでのみ、あるものは他のものに対し、又、他のものはこのあるものに対して、現に存するといふ個としての彼らの姿がここにある。

他方、近代プロレタリアートは、労働貧民が機械制大工場の導入により、機械体系に従属することによって、物的生産手段から遊離したところの、もともと組織される指導される存在である。そしてこのことは私の商品所有者としての彼らの性格と矛盾する。

この、一つの存在の中に二つの要素が宿り、そのどちらもが、他からの働きかけによって安易に対象化されるといふことの中にいうまでもなく、近代プロレタリアの内的矛盾は存在する。そして彼ら自身の階級の本質そのものが矛盾したものである以上、これを如何に発展止揚するのかがという視点からしか、階級形成の問題はたてられないことも又自明である。

例えば近代の労働組合等が私の商品所有者としての彼らのエゴを組織したものであるならばその機能も又、不断にブルジョアのエゴに基づく分裂をくり返し、ブルジョアジーによって買収された第二組合、第三組合を生んでいくのもまた自明のことであるといふべきではない。

いわゆる疎外革命論といわれる一連の体系の構造——生産過程において疎外された労働を働く労働者は、その疎外された労働そのものを物質的根拠とする感性的直感に基づいて革命的自覚をとり、という論理の誤りは、一つにはプロレタリア

そこで我々はまず第一には市民社会そのものを或いはそれと政治的共同体との関係を規定しなければならぬ。その市民社会と政治的共同体の本質規定がなされて初めてそこにおける人間の問題も明らかになる筈だからである。そしてそれは結局は「国家」を明らかにすることである。その次にはそこに於るプロレタリアートの実在の姿を見出すことである。

我々が「国家」という場合、その多くは「政治的共同体」を指している。そのため我々はまず政治的共同体の発生から見なければならぬ。政治的共同体の発生の問題とは、個人の分業への包摂の完成の問題である。

現実のこの資本制社会は物質的生産手段の所有者と労働力商品所有者が分離した社会、すなわち生産とその享受が、あるいは精神労働と肉体労働が分離した社会である。人間の生命の再生産、人間の自己活動としての物質的生活の再生産という、いわゆる本来の意味における労働は、資本制社会においては生産と所有の分離によつて、人間の生命活動としてではなく、価値増殖過程としての商品生産へと歪められていくわけである。

享受と労働、生産と消費、生産と所有が、一人の全人格的な人間の生命活動の総体としてあるのでなく、別々の個人の仕事へと分裂していることは、人間活動の分裂として人間の意識の分割であり、人間の自己分割である。これは黒寛流にいうならば主体の自己対象化、すなわち客体化のみがなされ、所有と享受による客体(労働生産物)の主体化(主体による消費)がなされないことである。

この生産と所有の分離に基づく人間の自己活動の分断は、互いに対立しあう利害を発生させ、市民社会においては追求する利害の異なる諸階層を発生させる。すなわち個人の分業への包摂が、互いに対立しあう特殊利害を発生させるわけである。

この対立しあう特殊利害のうちブルジョア特殊利害が彼ら自身が物的生産手段を所有することによつて精神的生産手段をもつ、所有することと相まって、いわば幻想の共同利害として特殊利害の分裂の上に君臨する時、対立する他の階層利害に「干渉と制衡」(ドイデ)を行うブルジョア政治権力が登場することになる。

このブルジョア特殊利害が幻想の共同利害として語られる時、それは政治的共同体の利害として、幻想共同体の全体利害として語られることになる。

ここに市民社会における個人(プロレタリア)が個人生活に於いて追求する利害と、政治的共同体が国家生活において追求する全体利害との分裂が、両者の対立と疎外が発生することになる。これが資本制社会における全体制と個人性の分裂であり、自己分割された人間の集合体としての資本制社会での種族生活と個人生活の分

裂である。そしてこれは現実的なものが観念的なものへ昇華され、観念的なものが現実的なものを借称するという転倒を生み出し、政治共同体と市民社会に於けるあるべき人間の姿のブルジョアイデオロギーによる転倒を生み出させる。

すなわち市民社会、階層的特殊利害の衝突の場においては、個人（プロレタリア）は私利私欲の所有者として、欲求の総体であり、それ故、感性的個別的な存在、すなわち実践的存在である。

他方、政治的共同体においては、個人は抽象された幻想上の人間として、寓意的道徳的存在となる。すなわちここに現実の人間（市民社会における欲求の総体）は利己的個人の姿において承認され、真の人間は政治的共同体における抽象的市民の姿においてとらえられるという世界の転倒が成立するわけである。すなわち社会や国家における世界意識が転倒しているのは、国家や社会そのものが転倒しているからに他ならない（ヘーゲル法哲学批判）そしてここでいう国家とはブルジョアたちが彼らの財産および彼らの諸利害の相互的保障のために、対外的および対内的関係において自己に必然的に与えるところの組織形態に他ならない。政治過程（政治共同体でのブルジョア政治過程）はそれ故幻想過程であり、経済過程（市民社会そのもの）は現実過程である。

国家とは、分業と私有財産の下で自然発生的な階級社会の下での、特殊利害と共同利害との矛盾にもとずいて共同利害が「幻想的な共同性」として現われ出たものである。

生産過程と流通過程を包括する総過程としての市民社会は、「対内的には国家として、対外的には民族・国民性として」（ドイツ）現われる現実過程である。国家は資本制社会において幻想的な共同性としての市民社会の総括者の地位を最も完成させた公的暴力の体系とともに確立するものであり、それは支配階級たるブルジョアが自己を地方的にはなく、国民的に組織すること、彼らの特殊利害に「一般的形態を与える必然の結果」である。

したがって国家は階級対立の非和解性の産物であり、そのあらわれである。国家は階級対立が客観的に和解できないところに、またその時に、その限りで発生するものである。すなわち国家の存在は階級対立が和解できないものであることを示している。だから支配階級は国家なる機関のもとに他の階級の抑圧を法律化し、強固なものにする秩序を作り出し、抑圧者を打ち倒すための一定の斗争手段と斗争方法を被抑圧階級から奪い取る。それはエンゲルスの言葉によれば「自身を武装力として組織する住民とはもはや直接には一致しない一つの公的暴力を設置する」のである。それが常備軍、政治警察、物的な強制施設等であり、この公的暴力は国家内部

のみ労働者として現存するようになるのであり、また資本が労働者に対して現存するようになるやいなや、その時にのみ労働者は、資本として現存するようになるのである。資本の現存は労働者の現存であり、彼の生活である。（経哲草稿）

現実の市民社会にあってはプロレタリアートが階級を形成するのは他の階級に対して自らの階級の利害を守る必然のあるときのみである。と、いうのは、現実の市民社会、ブルジョアイデオロギーの内には、個々のプロレタリアートは個人としての歴史的規定性を持ち、それは彼自身の所有している労働力商品以外の私有財産と結合することによって他の人間と異なる生活実体を彼の存在として作り出し、物質的諸関係の総体としての彼は、そこでは現象的には、あくまでも個人としての社会的諸関係のうち生きるからである。

このことは彼がプロレタリアであるということが、彼が変革主体として指定されるということではあっても、無媒介的に彼が革命的であるととらえられないことの根拠であり、その意味ではプロレタリアートはこの資本制社会の実際の姿、前提ではなく、結果に対決しながら、そのことによってはじめて前提に対して対決する存在である、ととらえられなければならない。何故なら一人のプロレタリアートが社会的諸関係の総体であるということは、彼自身が市民社会に包摂された存在として、特殊利害を共同利害と考える存在であり、ブルジョアイデオロギーで物を考える存在であるということである。すなわち社会的諸関係のイデオロギイ的表現、ブルジョア意識は、彼自身の私有財産、私利私欲の商品と結びつき、彼はそこではブルジョアのエゴ、欲求の総体としての市民社会における自然人間となって実在するからである。

これは存在論上のプロレタリアの、ブルジョアジーによって外的に付与された階級の本質である私利私欲の商品の所有者ということが、すなわちブルジョアのエゴそのものが拡大されたものとしてブルジョアイデオロギー、虚偽のイデオロギーの内固定された姿として現実の市民社会とその内にある個人（プロレタリアート）が存在していることを示す。これが普通二本質のある部分の拡大化、全体化としてのブルジョア社会の分業に包摂された個人の姿、すなわち実在である。

だから個人としてのプロレタリアートの追求する利害は、いつでも常に、現象的には私利私欲の商品所有者としての利害であり、「平均的個人」として出発した彼らのブルジョアのなエゴに基づく利害である。

そして、このブルジョアのエゴの追求のうちに内在化したものとして、プロレタリアートはブルジョアジーによって外的に付与された自己の内的矛盾の止揚を追求していると我々は見なければならぬ。だからこそ、ここに他者との結合、あるい

の階級対立が激しくなるにつれ、また境を接する諸国家が大きくなり、人口がふえるにつれて、その生み出す国家イデオロギーと共に強化される。

諸階級が独自の利害を追求して、独自の生活を開始した時、（市民社会の階級利害の対立が特に激化し尖鋭化した時、）国家はそのブルジョアイデオロギーによる自己自身への幻想の創造、マスメディアによる無数のデマゴギーの創造とキャンペーンによって、新たな共同体幻想を、その物質的根拠としての新たな国民的結集点の創造と共に作り出そうとする。というのは幻想の共同利害が国家利害、全体利害として成立するためには絶えざる共同体幻想の再生産が必要であり、それがブルジョアジーの物質的生産手段の所有を根拠とする精神的生産手段の所有およびその駆使として、大衆の国家イデオロギーへの包摂としてあるからである。ブルジョアイデオロギーの一つの表現としてのナショナリズムはこの共同体幻想の最も象徴的な危機の表現である。この時、国家はこのイデオロギーの流布の緻密化（クラムシ流に言うならば、網の目状の支配からニカワ状支配への発展）をぬって、突出してくる部隊に対しては、徹底した暴力的な攻撃をかけ、これを壊滅させようとする。そしてその時、国家は常に市民社会での住民の生活の安定等をたてにともものである。多くこのような情勢のとき、小ブル中間層は自らの階級利害を、この国家のイデオロギーの強化に基づく共同体幻想と共同利害の中に求めようとし、それは結局は小ブル中間層の自己権力思想とフアンズムとなって政治過程に現われるものである。

なお、いわゆる資本制国家と、それ以前の諸社会における、国家一般とを本質的に区別する点、すなわち市民社会と政治的共同体の分離が資本制社会において完成される根拠は、諸社会における国家一般においては生産者と物質的生産手段の自然発生的結合様式が存在したが故に搾取関係としての下部構造と、身分的・道徳的・宗教的關係としての上部構造が一体化しており、従って政治的共同体は国家として自立することができなかったが故である。

これに対し資本制社会においては、生産者と物質的生産手段が明確に分離し、その結合が貨幣という商品によってなされるが故に、階級支配そのものが本質的にはマルクスの言葉で借りるならば、経済的強制であって、経済外的強制によるものではない。だから資本制国家では、階級支配にとつて暴力は外化されるのであり、ここにおける政治的イデオロギーの支配は幻想的共同性を軸とせざるをえないのである。

労働者は彼が自分に対して資本として現存するようになるやいなや、その時に

は前衛の媒介の必要が生まれる。すなわち個としてのプロレタリアートの意識は、生産実践の場合が示しているように、その日常的な領域から外に出ることによって、すなわち自然成長のままでは結合することのできない方法で他者と結合することによって、はじめて内に対立をもち反映を否定することによって反映する。反映となることによって発展する意識、真の意味の意識となることのできる。前衛とよばれる部分がプロレタリアートと結合することにより、その内にある矛盾と結合し部分の全体化された姿を、その自己展開を媒介することによって、すなわちそれを通じてプロレタリアートが自分の内に自分を否定する意識を持つことを媒介する部分としての意識は成長する意識となり、観念は思想となる。

だから前衛の問題はプロレタリアートの内的矛盾の自己展開の媒介の問題であり、社青同解放派の、レーニンの「外部注入論」批判は、この外部注入に対する認識——からってな器に水を注ぐ、ごとき認識の誤謬にあるのであって、要するに認識不足としかいえないような代物である。

最後に要約するならば、結局、実在のプロレタリアの姿とは、現実の生きた市民社会の姿であるということはプロレタリアそのものの歴史的な発生、その存在論的な位置が明確化されるならば、いみじくも黒田寛一が主張するところの、特定の資本制国家の社会的現実の客観的法則性の問題、すなわち特定の資本主義国の他の資本主義諸国および社会主義陣営との国際関係、特定の資本主義国における支配階級と被支配階級との本質的な敵対関係（プロレタリアートの組織的団結の現状）、前衛の存、不在、プロレタリア・インタナショナルイズム（国際的団結、統一戦線の現状）、これらから派生するイデオロギーの諸条件等々の全体構造の問題として、すなわち結局は情勢分析の問題としてすべてはとらえられるのである。

それ故、党派の差異は階級形成の方法の差異であるということは、変革主体であるプロレタリアの本質規定の差異と、現実のその実在の姿の認識の差異として、情勢分析の問題として登場し、現象化する。

だからこそ、その存在論的な規定と実在の姿の認識に規定された方法論は、戦術（すなわち階級形成の方法論）となつて具現化される時、その差異の姿を明確化するものであり、それはとりもなおさず戦術（プロレタリアの実在の姿の全体構造の把握）に基づく目的とする革命の実現内容の對象化）そのものの差異に規定されたものである。

ここに党派が現在いかなる戦術・戦術をもっていかかという問題が発生してくるのであり、現在この視点で階級斗争を推進しようとしているのは我々だけであるの

はいりまでもない。だからこそ我々以外の党派はすべて間違っており、それ故に、それらは打倒ないしは、変革されねばならないのである。



若きボリシエウイキ

発行 昭和43年4月25日

発行所 社会主義学生同盟早大支部

発行責任者 社会主義学生同盟早大支部

印刷所 (株)アザック写真印刷

TEL 03-6691-1代